
ネギま！ 剣製の凱歌・新編

佐藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！剣製の凱歌・新編

【Nコード】

N1533W

【作者名】

佐藤

【あらすじ】

現在、同作者が連載中の「ネギま！ 剣製の凱歌」の改訂版。魔法先生ネギま！とFate/stay nightのクロスオーバーで、ネギま！世界出身の「衛宮士郎」が主人公。オリキヤラ・オリジナルストーリーが入りますが基本的に原作沿い。ルビが多いのでPCからの閲覧をお薦めします。基本的に改訂以前版を優先するので今作品の更新は不定期です。

設定1 士郎のステータス（前書き）

初めての読者様はじめまして、

「ネギま！ 剣製の凱歌」の読者様こんにちは。

佐藤Sと申します。

以前から書くと言っておりまして剣製の凱歌・改訂版、満を持しての投稿です。

だというのに最初は設定話となりましたが、面倒だという方は過去編から読み始められても構いません。

内容についても、基本的には「直したい部分だけ直した」のがこの改訂版なので、改訂以前とまったく変わっていないような話を投稿することもありますが、なにとぞ大目に見てくださいとありがたいです。

設定1 士郎のステータス

主人公：衛宮士郎

名前と一部の設定以外は完全にオリ主。ネギま！世界出身の魔法使いで魔術師。

・誕生日：1984年4月6日。原作開始時18歳、2003年4月6日で19歳

・身長185cm、体重74kg（魔法世界編の頃には身長186cm、体重76kgになる）

・魔力量：木乃香の3/5程度（原作開始時） 後に木乃香の3倍程度になる（予定）

8歳で実の家族と死別し、「弱い自分」に嫌悪を抱くようになる。だが自分のような凡人に何か出来るはずもないと、一般人として普通に生きてきた。しかし12歳のクリスマスに、後にマスターとなるエヴァンジェリンと魔法を目撃し、「魔法があれば強くなれる」との思いを抱いて魔法使いを志す。

その数年後に友人を殺され、自らも臨死体験する。そのとき平行世界の自分と魂が同期し「固有結界」を通して魔術を会得した。そして友人の死により再び自分の無力さを痛感した士郎は「自分には価値がない」という考えを無意識に抱くようになり、自分より他人を優先するようになる。結果「まさか自分なんか」という考えか

ら、他人からの期待・信頼・好意に対して異常に鈍感になっている。しかしその異常な感性は現在、エヴァンジェリンによって矯正されつつあるらしい。

「千の刃」ジャック・ラカンに師事し、魔法界では「無限の剣」グラディウス・インフィニトゥスという異名を執る。他にも「千の刃の弟子」「トレイス・マギステスコピー魔法使い」などがある。

木乃香やネギ達が何かに巻き込まれた際には基本的に自ら戦うことはせず、当事者達に任せようとするが、荷が重いと判断すれば自らも力を揮うというスタンスをとる。

「大切なだれかを守るだけの力が欲しいという理想を実現してしまつた人物」。

《外見》

・赤髪紅眼。Fate原作の士郎よりはナギやネギの髪に近い色。髪型は原作士郎と同じ。だが一時はアーチャーの髪にランサーの前髪を足したような髪型（イメージとしては、Fateルートでカリバーンを投影したときの士郎みたいな感じ）だった。

髪型が変わつたのは、2001年に麻帆良に帰つて来たときに「士郎らしくない」と言う木乃香に無理やり昔の髪形に戻されたため。整つているとも言える精悍な顔立ち。見る人によつて普通ともイケメンともとれるが、2-A（3-A）女子達からはイケメン評価を受けている。

・服装・身嗜みには頓着しないが、黒・赤系統色の服を好む。この

小説でのデフォルトはワインレッドの長袖Tシャツと黒いズボン。
料理時はそこに黒いエプロンを装備する。

《魔法》

魔法学校を僅か2年で中退しているが、魔法世界での修行生活で何とか魔法学校卒業程度の魔法は使える。ただし精度は平凡。

普通の魔法はあまり使わない（使えないのではなく）。得意属性は火。本人は知らないが父親譲りで重力魔法と時間魔法の適正がある。

《技法》

・気、瞬動、虚空瞬動を使用可能。

《固有技法》

・魔術

・解析、強化、投影、固有結界を主に使用するが、通常の魔術もある程度使える。

*ネギま！世界出身の士郎が魔術をえるのには一応理由があります。

*士郎は剣製の質でアーチャーに及ばない。

・オリジナル魔法

・魔術とネギまの魔法をブレンドした技術や、士郎自ら開発した新呪文など。

《スキル》

・直感：A～E

「そんな気がする」という程度のものから虫の知らせ、未来予知レベルのものなど、精度が定まらない不安定な直感^{ランダム}。

・心眼（真）：B

修行・鍛錬において養われた戦闘を有利に進めるための洞察力。経験に裏打ちされた戦闘論理。僅かな勝率が存在すればそれを生かすための機会を手繰り寄せる事ができる。

・千里眼：C

純粋な視力の良さ。遠距離視や動体視力の向上。高いランクの同技能は透視・未来視すら可能にするという。

（士郎は幽霊を見ることが出来ない。これは千里眼のランク云々ではなく士郎本人に靈感が皆無なため。この所為で士郎はさよを見ることができない）

・道具作成：B

魔力を帯びた道具を作成できる。このランクで開発できる道具は一級の性能を持つ。さらに高い同技能は、疑似的な不死を可能にする薬を作ることでもあるという。

《戦闘時の装備》

アーティファクトに登録されているいくつかの服装を纏う。

？赤い外套（AF初期設定）

？赤い革のジャケット、黒いブーツ（AF初期設定）

？黒いズボン、黒いロングブーツ、フード付きの黒いコート。

《パクティオカード》

仮契約カード：従者のカード (Charta Ministralis)

契約主：エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

数字：999 (CMXCIX)

色調：虹色 (prisma)

称号：無限の剣を持つ者 (GLADIUS INFINITUS)

徳性：正義 (justitia)

方位：東 (oriens)

星辰性：黒い穴 (nigrum foramen)

アーティファクト：「顔のない英雄」

AFの外見：

「赤錆びた鉄甲」^{ガントレット}。ガントレットとは言うが装甲付きの手袋のような形状をしている。布部分は朱色の生地で、金属部分が赤く錆びた鉄の手甲。

「顔のない英雄」の能力：

- ・登録した他人のアーティファクトの形状と能力を完全再現する。
- ・登録できる数は4つ。
- ・登録したいアーティファクトのカードと自分のカードを重ねて「登録」^{登録}と唱えれば登録完了。
- ・この能力で現れるアーティファクトはあくまで「顔のない英雄」が変化したもので、オリジナルのアーティファクトの状態には発動を左右されない。よって使用に制限はない。
- ・この能力を使えば同じ場所、同じ時間に同じアーティファクトが存在できる。

この仮契約に関して、エヴァと士郎がキスしたかどうかは明言し

ませんw

あくまで「キスが一番お手軽」な方法なのであって、それしか契約方法がないわけではありませんので。

士郎曰く「何か知らないうちに契約が終わってた」らしい。

《終わり》

- ・オリジナル魔法の設定などは随時投稿していきたいと思います。
- ・そしてストーリーが進むと士郎がパワーアップする予定です。その際も新たな設定話を投稿したいと思います。

お楽しみに！

……………飽きずに更新が続けばの話ですが！！

設定1 士郎のステータス（後書き）

（補足・解説）

：「ホ・ヒーローズ・メター・デン・アンティムトピズン」

|| 「 ? ? μ μ ?

|| 「無い顔を持つ英雄」

「顔のない英雄」は本来なら「ホ・ヒーローズ・アプロソツポス」となるのですが、「無い顔を持つ英雄」つまり「顔のない顔を持つ英雄」という意味の名前の方が士郎の性質に合っているかなと思ったので。

なんせ「無銘」ですから（Fate/EXTRA）。

それでは次回！！

設定2 士郎の半生

《年代とその当時の士郎の居場所・拠点》

| | |
|------|-------------------------|
| 1992 | 京都（8歳） |
| 1993 | 京都 |
| 1994 | 京都 |
| 1995 | 麻帆良 |
| 1996 | 麻帆良 |
| 1997 | ウエールズ |
| 1998 | ウエールズ |
| 1999 | 魔法世界 |
| 2000 | 魔法世界 |
| 2001 | 麻帆良 |
| 2002 | 麻帆良 |
| 2003 | 麻帆良（18歳時に原作開始、誕生日で19歳に） |

《経歴》

1984/4/6 . 士郎、衛宮家に生まれる。

1992 . 士郎8歳。アメリカでテロに遭い家族を失う。母方の祖父がいたが彼の元ではなく父の親類であった近衛家に引き取られ「近衛士郎」となる。義妹・木乃香と共に麻帆良を訪れるまで学校には通わなかった。

1995/4/8 . 士郎11歳、木乃香7歳。2人は京都を離れ麻帆良本校初等部に入学。

(ただし木乃香は13歳から女子中等部に編入)

1996/12/25 . 士郎12歳。魔法使いを目撃する。彼女の会話から祖父・近右衛門が関わっていると知り祖父に魔法の教授を頼みこむ。

1997/9月 . 士郎13歳。近右衛門、何故か自ら魔法を教えることも麻帆良で教えることもせず英国ウエールズのメルディアナ魔法学校へ士郎を入学させる(初等部卒業後、半年かけて英語を必死に習得)。13という遅い年齢での入学となった。

1998/12/25 . 士郎14歳。英国で事件に遭遇して臨死体験する。魔術を会得する。

1998/4月 . 士郎14歳。独自に情報を入手し、メルディアナを無断で中退して「目的」を果たすべく魔法世界へ不法入国する。そこで己の師匠となる人物と邂逅し、以後約2年間修行に励む。その後目的を
果たすことに成功する。

2000/9 . 士郎16歳。気まぐれに麻帆良を訪れる。そこで昔見た魔法使いと出会い、彼女の従者になるべく押し掛ける。結果「従者候補その1」として居候することになる。さらにその後、これ以上近衛家に甘えるわけにはいかないと考えて籍を抜き、名前が「衛宮士郎」に戻る。

2003/2月 . 士郎18歳。ネギ・スプリングフィールドが

麻帆良を訪れる。

2003/4/6 · 士郎19歳。

* 実にハードスケジュール。読者の皆様、波瀾万丈ということに
といてください。

しかしこれを表社会の方面からのみ見たら、士郎の最終学歴が「小
卒」になるな……メルディアナも中退だし……。

……………ごめん、士郎。

設定3 世界観設定

《この小説における Fate 世界とネギマ世界の関係》

この小説での「ネギマ！」世界の在り方としては、Fateにおける「平行（並行）世界」の概念で考えています。

平行世界とは『ある時の選択でAではなくBを選んでいたら、世界は別の道筋を歩む。そういった、数限りなく存在する可能性の数だけ分岐した世界・パラレルワールドのこと』。

世界A
・
世界B
・
世界C
・
・
・
・
世界？

このように世界は隣り合っているワケですが、その離れ具合は距離が離れているほど、その差異は大きくなります。世界Aと世界Bを比較した時よりも、世界Aと世界Cを比べた時の方が世界の違いは大きくなるというわけです。

通常 少し離れているからといって世界に大した違いはありませんが、それがもう有り得ないくらい離れていたら、それはもはや並行世界ではなく「異世界」になるのでは？と考えました。

その考え方がこの小説における Fate / stay night とネギま！の世界の関係です。「もはや異世界と呼べるほどに差異が大きくなった並行世界」。そういう位置づけなのです。

え？ それはもう並行世界じゃないだろ？ それは言わないで。

で、何故ネギま！世界出身の士郎が無限の剣製を使えるのか？という点ですが……。過去に臨死体験した士郎が「何故か」英霊の座”に迷い込んだことが原因です。

この「何故か」は非常にご都合主義なのですが、説明させていただきま

過去、士郎はあくまで「死にかけた」瀕死状態だった」だけで、死んで「根源」に行ったとかそういうことはありません。そもそもネギま！世界にはガイア論、アラヤ識など「世界」というシステムがないので当然ですね。

ただし Fate 世界のようなシステムではないというだけで、「世界」の修正など、「ありえない状況」や「世界の存在に害を及ぼしかねないもの」を忌避・拒絶する」というような感じの「防衛機能」は存在します。

学園祭編でカシオペア同士の戦いになった際、八カセが「因果律が破綻してしまう為に一定時間・一定距離以上の時間跳躍と擬似時間停止は出来ない」という趣旨の発言をしていました。あまりの無

茶が出来ないという点は同じだと言つことです。

ただ、「世界」の修正は魔術的・概念的なもので、因果律は理論や摂理の観点から見たものであつて全く別物なんですけどね。

話を戻します。では何故、根源の中に在る（この言い方は語弊がありますが）英霊の座に士郎の魂が迷いこんだのか？ 「引つ張られた」からです。

死にかけて肉体という器、枷からの束縛がゆるくなつた士郎の魂は、元を同じとするアーチャー・エミヤシロウの魂に引つ張られてしまつた、というのが作者の理屈です。

はい、ご都合主義です。

以上がこの小説における世界観と世界の位置づけと、士郎が魔術を使える理由に関する話です。

納得できない部分があるかと思いますが、そこは二次小説だからと目を瞑つていただけるとありがたいです。

《この小説世界における麻帆良》

・原作よりも危険地帯。大戦当時に行われていた関東魔法協会への「襲撃」が、20年を経た今でも継続して行われている。頻度は年に6〜8回。

・20年前当時の帝国側の魔法使いの残党や、西の陰陽術師たちが主犯。「襲撃」は彼らの属している組織の意思は介在しておらず、あくまで末端の暴走であるが、関西呪術協会はその限りではないら

しい。

・これに対して学園長・近衛近右衛門は魔法使い達による「警備」と学園結界による防衛策を執っている。”夜の警備員”はシフト制魔法先生は残業扱い、魔法生徒は成績評価に色をつけてもらえる。

・「外部協力者」扱いの士郎には毎月歩合制の給料が支払われている。これはエヴァも同様（エヴァは定額給料）。

・エヴァや超が学園結界を落とす度に危険に曝される面倒な都市と化している。

・京都修学旅行編の出来事をきっかけに西との関係が幾分か改善され、襲撃は極端に減少した。

《この小説世界における冬木市》

士郎以外の Fate 世界の住人もネギま！世界に存在している設定です。でも凜がうまく書けない（作者の力量不足ゆえ）から彼らは登場させません。でも最近ちょっと書いてみたくなってきている。彼女たちは魔法学校に通っていないのか？ などの細かい設定は考えていません。登場させる気がないので。

冬木市

かつて衛宮家が居を構えた西日本にある都市・冬木市。東西JR線の関係で一度だけ乗り継ぎをしなければならぬが、麻帆良から普通に電車で行ける。

この土地は「聖地」クラスである麻帆良には劣るが、2本の竜脈

と2本の霊脈が通る強力な霊地である。

陰陽術師の勢力が強い西日本にも関わらず、魔法使いの一族「沙条」「遠坂」「間桐」

「言峰」の4つの家が土着して住んでいる。

また、名前に「ヤ」のつく職業の藤村家と竜洞寺の竜洞家に”気”を使う人物が確認されている。（雷画さんと藤ねえと零観さんです）

冬木四家の設定

・沙条

もともと関西呪術協会に属する陰陽師の大家、その家系だったが、いつの頃からか西洋魔術に転向した変わり種。家の歴史は四家の中で一番古い。

元が陰陽術師の家系である点を生かし、東洋・西洋の系統が入り混じった独自の術式を使用する。気・魔力の習得はこの家の魔法を使用する為には必須事項であり、現当主は究極技法「咸卦法」を習得しているという。その彼の娘は魔法には関わりたくないと考えていて父とは距離を置いている。

・遠坂

約300年前、日本を訪れた西洋魔術師が遠坂家の人間に「うつかり」魔法を見られた事がキツカケで魔法を伝授された。その後彼女は自分が魔法バレしてしまった人物と恋に落ち結婚。彼女の血が遠坂に混じることになる。ちなみに彼女は故郷に妹がおり、その妹の子孫が今もフィンランドに住んでいるらしい。

火属性呪文と身体強化呪文に才能を持つ者が多い。ちなみに当家の末裔の長女はなんと全属性適合者（オールユーザー、アベレージ・ワン）であるらしい。

・間桐

日本に移住した魔法使いマキリ・ゾオルケンを始祖とする一族。といってもそれはまだ数十年前の出来事で、高齡ながら彼はまだ存命中。当家は当代の遠坂と仲が悪い（現当主同士の仲が悪いのが原因）。

水・闇・影系統呪文に適性を持ち、呪い・契約などを得意とする。

・言峰

代々冬木教会で神父を務める魔法使いの一族。かつて彼らは基督教の布教が出来る地を探して冬木に流れ着き、そこで遠坂家と懇意になった。遠坂家の援助もあって布教が進み、彼らはそのまま冬木に根を下ろしす。それ以来この二家は仲が良い。

（ネギマ！世界ではシスターシャークターや美空など、教会関係者が魔法使いであることは基督教の教えに反するものではないらしいのでこの設定で問題ないはず）

ただし「遠坂と言峰の仲が良い」といっても、その末裔のあかいあくまと

毒舌シスターの仲が良いというワケではない。

主に身体強化呪文と、鍛え上げた自らの肉体から繰り出される体術、十字架を武器として戦う一族。

*冬木についてはこれ以上の設定を作りません。だって登場しないんだもの。

《その他の諸設定》

衛宮家

元は関西呪術協会・近衛家の分家。しかし本家から分かれて300年ほどしか経っていない、歴史の浅い弱小分家。数代前の当主が裏社会（陰陽術・神鳴流など）からの引退を決定し、一族は京都から西日本のある地方都市に移り住んで一般人として生活を始めた。しかし衛宮矩賢が京都神鳴流に入門し、再び裏との結び付きが強まった。

衛宮一族とその関係者

・衛宮矩賢

息子・切嗣が10代の時に謎の死を遂げる。神鳴流・呪術協会内の争いに巻き込まれたと思われるが、詳細と真実は不明。

・衛宮切嗣

父に倣って京都神鳴流に入門していた。しかし父・矩賢の謎の死に疑念を抱き、「理不尽に命が失われる」ことを嫌悪するようになる。

全ての人間を救う「正義の味方」を目指し、立派な魔法使いといマキステル・マキう思想を持つ「魔法使い」になるべく麻帆良の近衛近右衛門に師事する。

10年弱の修行を終えて魔法使いのNGOに参加して中東を訪れるが、自らの理想の甘さと限界、現実を知って絶望する。紆余曲折を経て、多くを殺すことで逆説的に多くを救うことを選択。生涯で多くの血と汚名を浴びた。

魔法界では「マイダー・メイガス魔術師殺し」と呼ばれる。本国出身者・関東魔法協会側の人間からは命を狙われ、関西呪術協会（の一部の協会員）からは英雄視されている。

時間制魔法を飛躍的に進歩させた人物として魔法世界では有名で、帝国やアリアドネーでは切嗣を「タイムエンジニア時間技師」と呼んで尊敬する人間が少なくない。彼の開発した術式によってダイオラマ球の性能が10〜20倍は上がったと言われている。

後に妻との間に娘と息子を儲ける。アメリカでテロに巻き込まれ死亡する。

・衛宮士郎（近衛士郎）

本作の主人公。旧作（ネギま！ 剣製の凱歌）の感想ページにて読者様より「オリ宮士郎」と名づけられるほど中途半端な設定を持つオリ主。

元は「衛宮士郎」だったが家族の死後に詠春に引き取られ「近衛士郎」となる。現在は籍を抜いて衛宮性に戻っているが、何故か近衛家の家系図に養子として名前が残っている（詠春と木乃香の仕業）。

その他の説明はもう要らないと思うので割愛。ぶっちゃけメンディー。今までの設定話を読んでくださいな。

・青山詠春（近衛詠春）

切嗣の神鳴流時代の友人。稽古の合間に会話を交わす程度の付き合いだったがお互い友人だと感じていたらしい。

切嗣の遺児である士郎を引き取って育てた。今では彼を実の子のように思っている。

・近衛近右衛門

切嗣少年に魔法を教えた。切嗣の遺児である士郎を孫のように思っている。魔法を知って魔法使いを志した士郎を友人が勤めるメルデアナ魔法学校へ送り出した。

自分が士郎に魔法を教えることで、切嗣と同じようになってしまっているのではないかと恐れたのかもしれない。矩賢とも面識があったようだ。

・近衛木乃香

詠春の一人娘。幼少時、父が突然連れてきた”兄”と仲良くなるうとするが、当時まだ家族を失ったショックで茫然自失状態だった士郎はそれに応えなかった。しかし木乃香は諦めず、士郎を笑わせようと奔走した。

現在はお互いの生活に積極的に干渉しようとはしないが、兄妹仲は良い。

・桜咲刹那

詠春に拾われて京都神鳴流に身を置いていた少女。木乃香の最初の友人であり親友。同じく詠春に引き取られて木乃香の義兄となつた士郎を胡散臭く思つて警戒していた。

川で溺れたところを助けられてからは心を許すようになったようだ。

アインツベルン

ドイツ貴族であり魔法使いの一族。長寿、並みの魔法使い以上の魔力容量、高い対魔力などの優れた体質を持ち、錬金術 「も のをつくる」ことに長けた一族。

本家筋の女性は何故か必ず銀髪・白い肌・真紅の瞳を持って生ま

れる。始祖は雪の妖精だという伝承があるのかなんとか。

遺伝的に女性の方が強い能力を持つため歴代当主はほとんどが女性。その中で男性が当主になるということはその人物が出鱈目な実力者だということを示している。そして先代当主も男性である。

かつて「アインツベルン」の名は魔法具業界における優秀なブランドだった。しかし現在（2000年代）より約100年前に旧世界と魔法世界が繋がり、向こうの優れた魔法技術が流通・普及したために衰退・没落していった。

しかし彼らの技術力は紛れもなく本物である。その「作る才能」は密かに士郎に引き継がれている。

アインツベルン一族

・ユーブスタクハイト・フォン・アインツベルン

「アハト翁」と呼ばれた八代目当主と同じ名前を持つ、第二十八代目当主。二人の娘をもつ。現在は隠居し、長女に家督を譲っている。

アイリと切嗣の結婚には大反対だったが、孫にはデレデレだったという。

・アイリスフィール・フォン・アインツベルン（衛宮アイリスフィール）

二十八代目当主・ユーブスタクハイトの次女。NGOに参加した際に切嗣と出会い、彼に惹かれる。後に結婚し、彼との間に娘と息子を儲ける。

アメリカでテロに巻き込まれ死亡する。

・衛宮イリヤスフィール

切嗣とアイリの間にも生まれた長女。アインツベルン本家の血筋であることを示す身体的特徴を持つ。母親に瓜二つ。アメリカでテロに巻き込まれ死亡する。

死後は運命か偶然か、現在Fate世界の「英霊の座」でアーチャー宅一（？）に居候中。心象世界の剣を通してアーチャーと共に弟を見守る。

・第二十九代目・アインツベルン当主

アインツベルン現当主。ユーブスタクハイトの長女でありアイリの姉。士郎の伯母。

アイリの遺骨を衛宮家の墓に入れることを渋った父親を説得した。なぜ士郎を引き取らなかったかは不明。

アインツベルン最盛期の当主であり、歴代最高最強と謳われるユステイツァ・リズライヒ・フォン・アインツベルンの再来と呼ばれる。

この小説における衛宮切嗣のステータス

- ・魔力容量は並みの魔法使い程度で、得意な魔法は火と重力。
- ・戦術・戦略・畏・銃火器など近代兵器・魔法を駆使して戦う。
- ・スキル：破壊工作/ランクA

戦闘を行う前、準備段階で相手の戦力をそぎ落とす才能。トラップの達人。

ランクAならば、相手が進軍してくる前に六割近い兵力を戦闘不能に追いこむ事も可能。

《魔法・武器》

：呪文封印弾（C・S・BⅡキャスト・シール・ブリット）

魔法使い専用独房（ネギま！KC16巻に登場）に使用されている呪文封印処理が施された弾丸。銃弾を約30層に分けて製造し、層の表面に術式を刻んで重ねている。この弾丸が体内に埋め込まれると魔法使いは呪文Ⅱ大半の魔法が使用が出来なくなる。ただしアーティファクトは使用可能。

敵の体内にあつてこそ威力を発揮するので、貫通しないように銃弾の先が僅かに丸みを帯びている。

：火炎の魔弾・燃える天空

「燃える天空」の術式を刻んだ弾丸。基本的に着弾時に刻まれた術式が発動するが、戦略的に運用するために遅延呪文（解放エーミツタムと唱える）でも起動する。

地面に撃ち込んでおいて即興の地雷としても使用したりする。戦略に基づいた戦いの時はもちろん普通の地雷を使うので、この弾丸を地雷として使用する時は切嗣にとっての不測の事態か敵との直接戦闘時のみ。

：障壁貫通弾

切嗣が使用する武器・銃器・兵器には全てこの呪いが掛けられている。通常の銃弾も魔弾も地雷もミサイルも全て魔法障壁を貫通する。

* 作者は銃火器に詳しくないのでそれらについての記述は割愛。Fateは魔術師の物語のハズなのに、なんでZeroはあんなに近代兵器の記述や設定が多いんだ……。切嗣スゴイよ。

メローディア・ベラークス
：『戦いの旋律』

身体強化呪文「戦いの歌カントウス・ベラークス」の上級版。罨を抜けて切嗣に接近できる腕利きの魔法使いも当然いたので、肉弾

戦に備えておく必要があつた。

切嗣は元・神鳴流なので体術も申し分ない。

今ウエオ・プロバリウス・テンパス
：『固有時操作結界』

通称「固有時操作」（誤字に非ず。あえて「固有時制御」ではない名称にしている）。準備と条件を満たすと使用可能になる。光魔法と重力魔法でそれぞれ光と重力を操作して結界内の時間流を停滞させる。このとき結界の中の人物を結界の外から見るとスローモーションのように見える。

これに敵を捕えている間に周囲に攻撃・罠を仕掛けておき、結界の解除と同時に襲撃する（結界を解除しないと、結界に入った瞬間に切嗣自身の攻撃も時間が停滞してスローになってしまったために攻撃が届かない。Ⅱ止まった時の世界で主人公にナイフを投擲するぜ・ワールドな吸血鬼と同じ戦法かもしれない）。

無詠唱呪文に長けた魔法剣士や魔法拳士、魔法使いの従者に対する切り札。

Fate/zeroの「固有時制御」の「固有時」とは「術者の肉体の時間」を指すが、この結界の「固有時」とは「指定された領域内の時間」を指す。

なお、この固有時操作は「停滞」だけでなく「加速」も出来るが、固有時制御と違って体内展開が出来ないため加速にはあまり意味がない。

《まとめ》

・基本的には罠を使った戦術などを用いて陰から戦い、正面きつて相対して戦うことはあまりない。特技は暗殺。スキル破壊工作・ランクAは伊達じゃない。

・「呪文封印弾」で魔法使いを無力化し、「戦いの旋律」「魔弾」「固有時操作」で魔法使いの従者・魔法剣士に対抗する。

「敵を殺すのに相手より強い必要はない。ただ、殺す手段があればいい」

*以上で世界観設定の説明を終わります。読了お疲れ様でした。

番外話 オリジナル宝具 + 追加 (2011/9/11)

はい始まりました、誰でも1度はやってみる「オリジナル宝具」のコーナーです。

興味のある方はどうぞ読んでみてください。

「真つ赤な嘘」
ハイド・オブ・トゥルー

イソップ童話「嘘をつく子供」(「狼少年」の逸話がカタチになった宝具。

(I hide the truth.「私は真実を隠します。をモジった。

「ハイド・オブ・トゥルー」=「真実の皮」。真実を覆い隠す姦計の皮。)

・能力：真名解放直後に発した言葉が指す事実を完全に隠蔽する。

例：真名解放して「ここで戦闘を行った」と言えば、どれだけの目撃者がいようとその事実当事者以外の人々の記憶に残らなくなる。カメラなどからも消え失せる。

あらゆる調査を回避し、情報隠蔽に特化した宝具。あくまで「当事者以外には知ることができなくなる」だけなので、事実を無かったことにしているわけではない。

「尊ぶべき三叉の海」トライデント・ランクA (とうとぶべきさんさのうみ)
海神ポセイドンが持っていた三つ又の槍。

・能力：

水または液体を自在に操る力を持つ。ただし生物の体内の水分は操れない。

水がある場所ではランクがA+に、海に近い場所ではランクEXに上昇する。この宝具の力で操作される水は、操作されている時のみこの宝具と同じランクの神秘・魔力を帯びる。

言ってしまうえば操る水そのもの全てを宝具と化してしまう。

「必中する無蹉踏の弓」フェイルノート（ひつちゆうするむさてつこのゆみ）

アーサー王伝説に登場する円卓の騎士トリスタン、彼が作った豎琴のような形状の弓。

・能力：

狙った場所に必ず当たる矢を放つ。故に「無駄なしの弓」と呼ばれた。しかしそれは弓の能力ではなくトリスタンの技能スキルだという説もある。

「大御葬歌」ミストルティン（おほみなりのうた）

北欧神話に登場する剣。

伝承：

世界中のあらゆるものから傷つけられない力を持っていた光の神・バルドルが、その力の唯一の例外であるミストルティン（ヤドリギ）の木の枝が胸に突き刺さって死亡したというエピソード。

さらに「ミストルティン」という名前の名剣が別の伝承に登場する。

「剣」であり「神を殺したヤドリギ」でもある「ミストルティン」。
この2つの伝承がミックスされて生まれた対神宝具。

おほみなりのうた

大御葬歌……日本の天皇の葬送のときに演奏するもの。起源は武神と崇められるヤマトタケルノミコトが死した際、彼の妻と子供達が歌った三首の歌。

神の死を悼み、あの世へ送り出した歌である。

・能力：

剣の宝具だがその伝承により、投擲または矢として使用した時に真価を発揮する。

宿る概念は『神殺し』。神霊クラス存在を完全に滅ぼす力を持つ。神をも殺す剣ではあるが魔剣ではない。

北欧神話と日本神話をごちゃ混ぜにしたネーミングの宝具。

「神の死」にまつわる伝承を探したら「武神ヤマトタケルノミコト」と「大御葬歌」の逸話を見つけたので、これ幸いと「ミストルティン」と混ぜてみました。

「万象毀つ神槌」(ばんしょうこぼつしんつい)

シャルウル
戦闘と豊穰(農業・狩猟)を司る、メソポタミア神話の大地神ニンウルタの持つ棍棒。「すべてのものを破壊するもの」という意味の名前で「戦闘の洪水」という異名を持つ。

(ニンウルタの名前には諸説あり、ニンギルス、ニヌルタとも呼ばれる。)

・能力：

オーバーキル・ファンタズム

即死宝具。有機物・無機物・物質・エーテル・実体・霊体関係なく、この宝具の攻撃を受けた者は例外なく破壊され殺しつくされる。

ただしこの宝具よりランクが上の宝具や魔術は破壊できない。そしてひとつの対象につき一度しか使用できない。

防御系の宝具（＝結界宝具）が使用された場合はその宝具のルーが優先して適用される。「投擲されたシャルウル」なら「ロー・アイアス」には勝てないし、当然「アヴァロン」も貫けない。

「ヴァジュランダ
雷の牙」

インドの伝承「ラーマヤナ」という物語に登場する、ラーマという英雄の持つ投げ槍。とある聖者より授かった神々の武器だという。ラーマは神々の化身である猿たちの王スグリーバに協力し、スグリーバの兄である猿王バーリをこの槍で倒した。

・能力：

「神殺し」の概念を秘めた対神兵装。神霊クラスの霊格を完全に討ち滅ぼす力を持つ。

「クラウ・ソラス
惑い眩ます光焰の剣」（まどいくらますこうえんのけん）

ケルト神話に登場する剣。

ダーナ神族の王ヌアザが所持する剣。鞘から出れば光を放ち周りの者の目を眩ます。他にも「抵抗すらさせずに敵を二分する不敗の剣である」「隠れた敵を探し出してひとりでに倒す」「不敗の剣」「光の剣」「炎の剣」など多くの伝承を持つ。

・能力：

鞘に納められた状態で真名を開放すると、抜刀した際に閃光を放ちそれを見た者の視力を奪う。奪われた視力を回復する為にはこの宝具の担い手を倒すしかない。ただし視力を奪われたのがサーヴァ

ントの場合、パスを通してマスターの視界を共有して物を見ることはできる。

「ゲイボルク」のように、宝具として複数の真名を持つ。「惑い眩ます光焰の剣」は「光で敵の目を眩ませるクラウ・ソラス」の真名。

「光で敵の目を眩ませる」「隠れた敵を探し出して攻撃する」、この2つのクラウ・ソラスの真名を開放した相手にのみ、第三の能力「抵抗すらさせずに敵を二分する（仕組みはゲイボルクやフラガラックのような因果逆転による攻撃キャンセル）」が発動可能になる。しかし第三の真名解放は一度しか行えず、第三の能力を使用した相手には以後、他2つの真名も解放できなくなる。

「人喰い刀^{エピタム}」

アイヌ民話に登場する人喰い刀。別名「エペタム」。

伝承：

祈りを込めるとひとりで飛んでいき何百人の敵でも追い払う。飛ぶ際に稲妻のような光を放ちながら光の尾をひいて飛び回る。また刀の出す「カタカタ」という不気味な音を聞くと敵が逃げ出すという。

ある村の酋長の家に安置されていた刀。エピタムは1人の英雄の武器ではなく、その村の老人たちだけが知っている「祈り（＝制御方法）」にて運用されていた。しかし老人たちが亡くなって祈りを知る者がいなくなると暴走を始め、村人が神に縋って解決法を得るまでに多くの人間を喰らったという。

・能力：

特定の担い手も「祈り」を知る者もない為、制御ができない。一度鞘から抜かれれば人間を喰らい続け何をしてもしままらない。ただしこの刀は人を食べない時は石を食べていたと言われており、「石」の近くにいれば僅かな間だけ鎮めることができる。

この刀の鳴らす音を聞いた相手の戦意を削ることができ、敵のパラメータの幾つかをランダムでワンランク低下させる。この宝具の担い手がサーヴァントであった場合、担い手とそのマスターにはパラメータ低下が発生しない。

「エツケザックス遍し守りを貫くもの」（あまねしまもりをつらぬくもの）

ゲルマンの伝承「シドレクス・サガ」に登場する剣。

ディートリッヒが巨人エツケを倒して手に入れた「サクスエツケの剣」という意味の名前の剣。この剣にはどんな丈夫な楯でも耐えられないという。

・能力：

この宝具よりもランクの低い魔術やスキル・宝具による防御を破壊・無視してダメージを与える。ランクを上回る防御でも「筋力値×50%」の貫通ダメージを対象に与える。ただしやはり「アヴァロン」は例外。

「アスカロン守護聖剣」

基督教の聖人・聖ジョージ（聖ゲオルギウス）が竜退治に使用した剣。彼には数多くの竜退治の逸話が存在しており、中には槍で倒したという話もある。

伝承：

11世紀、十字軍兵士達の前に聖ジョージの幻影が現れたという伝承により、彼は戦士を守護する聖者になった。さらに14世紀にはイングランドの守護聖者と認定され、それ以外にもグルジアやモスクワ、更には武器職人・旅行者・農民をも守護している。

……忙しそうだ。

・能力：

宿す概念は『竜殺し』。幻想種より強力な存在である竜種（位階は幻想種の方が上）を殺害し完全に討ち滅ぼす力を持つ。さらに他者を守る戦いにおいてのみ、自身（アスカロン）のランクと担い手のパラメータをワンランク上昇させる。そして聖剣でもある。

「イフン・ソッド・ブローケン 刀折れ矢尽きるまで」

オリジナル。参考となる伝承はなし。でもちゃんと探せば該当するような伝承があるかもしれない。

・能力：

戦闘続行スキルと類似した能力。「十二の試練」や「騎士は徒手にて死せず」等と同じ「宝具能力」。

己の武器（宝具含む）が全て破壊されない限り、致命傷を受けても死ぬまで戦闘を続行できる。所持する武器や宝具の数だけ効果が増す宝具で、例えば士郎やアーチャー、ギルガメッシュがこれを保持していた場合、「無限の剣製」「王の財宝」内に貯蔵される全ての武具が破壊され尽くすまで行動できる。

・刀折れ矢尽きる（＝弓折れ矢尽きる）

戦う手段をすっかり使い果たす。また、物事に立ち向かう手段がなくなる。

Even if sword broken. Ⅱたとえ剣が折れていても。

「ヤグルシ・ワオ 反逆して且つ・アイテム 駆逐する者」

ウガリット神話に登場する、「アイテム 反逆するもの」と「ヤグルシ 駆逐するもの」という名の一对の棍棒。水神ヤムを倒すために嵐の神バルが用いた対神兵装にして神の武器。

・能力：

投擲すれば遠隔操作が可能。この棍による攻撃を受けた者のスキル・特殊能力の類を全て使用不可にする。

しかし英霊も宝具も、伝承の在り方というものに縛られる。この宝具の能力を発動するためには、「先ずヤグルシを投擲し、それを敵が避け、次いで投げたアイテムが敵に命中する」というプロセスを経なければならない。

*2011/9/11、以下のものを追加。

「ホアンキエム 湖還剣」 ランク：B

ベトナム民話の英雄で実在の人物、レイ・ロイ 黎利が用いた「湖の宝剣」。

・伝承：

レイ・ロイは12世紀頃の実在の人物。彼はあるとき湖で神剣を手に入れ、これを天帝からの授かりものとして戦った。この剣を抜き放せば敵は戦意を失い、倒れ、逃げ去ってしまうという。

後に剣を湖に返したという逸話から「湖・還・剣」という意味を持つ”ホアンキエム”湖と呼ばれるようになった湖が今もハノイに実在する。

湖還剣……こかんけん。決して深読みしてはいけない。

・能力：

対峙した敵のパラメータをツーランク低下、スキルをワンランク劣化させる。

(例：A C、A++ C++、E E--、EXには効果なし)

ただしどのパラメータ・スキルが弱体化するかはランダムで、その判定は対象の幸運値に左右される。

さらに、この能力の元になっている逸話が「敵の戦意を失わせる」ものであるため、精神攻撃を無効化するスキルを持っている、「パラメータを下げられない」「ランクを下げられない」という性能のスキルを保持している相手には効果が弱体化し、パラメータのみをワンランク低下させる。

宝具のランクは下げられないため、サーヴァント戦では強力な宝具を持っていることが多いアーチャーやライダーのクラスが天敵となりうる。

(……どっかの円卓の白騎士や裏切りの騎士や腹ペコ王は能力が軒並み高いくせに宝具もデタラメに強力という他のサーヴァント涙目なチートですが……)

「フスベルタ苦しんで死ね」 ランク：C

八世紀フランク王国、国王カール大帝に仕えた騎士ルノー・ド・モントヴァンの剣。

(モントヴァンは実在したと明言していない資料もあるため、ここ

では「実在したといわれる人物」として扱う)

彼は『エイモン公の4人の息子』『シャルルマーニュ伝説』などでリナルドという人物として登場する。

・伝承：

フスベルタは「フランベルジュ（炎の刃）」という剣の原型だという伝説を持つ。

フランベルジュは刃の形状が波打つ炎のような形状をしており、これは単に装飾的な意味合いだけでなく、敵に致命傷を刻むために作られている。

結論を言えばこの剣で斬られた傷は治りにくく、戦闘から帰還できても傷口から破傷風などに感染し、兵士は苦しみながら死んでいったのだという。このことから「死よりも苦痛を与える剣」と呼ばれた。

『シャルルマーニュ伝説』では、フスベルタは魔法の剣として扱われている。

・能力：

決して癒えない傷を与える。 治癒阻害・回復阻害の呪い。

傷口が塞がることはなく、人間ならば失血死する。サーヴァントなどの霊体に対しては追加の呪いが発動し、塞がらない傷口から魔力が漏れ続ける。サーヴァントが現世に存在を留める為の糧である魔力が失われていくのである。

また「炎の刃」という伝承により、この剣でつけられた傷は常に熱を持って対象の体力を奪う。

これらの呪いを解くにはこの宝具を破壊するしかない。長期戦に秀でた宝具。

「確実に致命傷を与える」「より長い苦痛を与えて死に至らしめ

る「というフランベルジュの性質が、原型であり同一の存在である
フスベルタに反映された。

「オリジナル宝具」のコーナーはこれで終了です。
また思いついたら追加するかもしれません。

それでは次回。

番外話 オリジナル宝具 + 追加 (2011/9/11) (後書き)

*フスベルタの「苦しんで死ね」は表現として過激でしょうか？

一応R15指定と残酷描写ありのタグは付けていますが、苦情・意見・要望が来たら修正します。

Fateを知る者ならば…誰でも一度はオリジナル宝具を作ってみたことがあると……。

私は信じている!! (アホ)

- 5話 京都編 関西呪術協会・子供会（前書き）

小説らしい小説が始まる最初の話なので、設定話1に続きもう一度挨拶を。

改訂版からお読みになってくださっている読者様、初めまして。改訂以前、「ネギま！ 剣製の凱歌」から読んでくださっている読者様こんにちは。佐藤Sと申します。

この小説、基本的には以前のものを「直したい部分だけ直した」ものなので、以前とまったく変わっていないような話を投稿することもありますが、なにとぞ大目に見てくださいるとありがたいです。

これからも「剣製の凱歌」シリーズをよろしくお願いします！

・ 5話 京都編 関西呪術協会・子供会

肩口まで伸ばした黒髪を全て左に纏めて結えた、袴姿の女の子。
ツヤのある黒髪を腰まで伸ばした着物姿の少女。
そして

「きゃあああ

!!!」

「わっ！わ

!!!」

「ばっばっばっばっばっ！……!」

「……………」

「ってシロウなにしとるん!? はよ逃げーな! あーもー!」

赤い袴を履く少女と色違いの黒い袴を履いた、赤い髪の少年。
彼は赤い袴の少女に襟を掴まれ、されるがまま引き摺られていった。

近衛木乃香・桜咲刹那4歳、衛宮士郎8歳の頃の話。

「お嬢様、何をされているのですか」

「ひゃうっ!?!」

背後から聞こえた、自らを咎めるような声に木乃香がビクツと肩を震わせた。

「ここは板場です、包丁などもあるのですよ?危ないではないですか」

「えへへ……ごめんなー」

少女はそう言って申し訳なさそうにほにやっと笑う。すると呪術協会の大抵の者はそれ以上彼女に何も言えなくなってしまふ。関西呪術協会本山・?毘古社の姫(でありアイドル)である彼女は周囲から非常に溺愛されていた。

調理場に入ったことを咎めた巫女もその部類で、諦めたように息を吐いた。

「それで何をされていたのですか? かくれんぼでしたら他の場所へ行ってください」

「むー。かくれんぼしとるよーにみえる?」

「……………見えませんね」

板場の作業台の上にはまな板が置かれ、その周りには野菜だったり果物だったり、その他統一性のない食材が所狭しと並べられている。

「おかしつくるー思ってたん！」

巫女は目を見開いた。

「……………この材料ですか？」

『初めまして土郎くん。私は君のお父さんの昔の友達で、近衛詠春といひます』

『土郎くん、君さえよければ、君を引き取りたい　君を、私の子供にしたいと思っっているんですが』

その話を受けたのは、土郎にとってただの気まぐれ。

見ず知らずの人間ばかりの場所に放り込まれるよりは、自分の父親の友人であったという不健康そうな眼鏡の男の所に行く方が、いくらかマシだろうと。そんなテキトーな考え。

だってこの世界に居ることに、士郎は価値を感じない。

家族に、みんなに会いたい。

／そのためには天国に、あの世に行くしかない。自分も死ぬしかない。

その考えに思い至った瞬間、士郎は絶望した。

あの地獄で死を隣に感じ、死の痛みを体感し、あの場所から帰って来た。そしてそこから帰って来れなかった姉の姿が脳裏をよぎる。フラッシュバックする。

死にたくない。

死にたいけど死にたくない。そんな思いが、士郎を情性で生かすこととなる。

事の発端はひと月ほど前に遡る。

『ただいまこのか。いい子にしていましたか？』

『おかえりなさーいおとーさまー？ ……？ おとーさま、その子だれ？』

『そうでしたね、彼の紹介をしなくては。 ……このか。彼は君の兄弟だよ』

『……………ほえ？』

そうしてこの場所へやってきた赤い髪の少年、旧姓「衛宮」近衛士郎。

物怖じしない、というか天然である木乃香は積極的に士郎にかまっていたが、彼女はそこで思わぬ事態に直面する。

『ほな、つきはおにじっこしよー』

『……………おれは別に……………』

『シロウ！ アンタこのちゃんがせつかくあそぼゆーてんに……………！』

『あっ せつちゃんおこらんといて〜』

笑わないのだ。士郎は。

遊んでいても話しかけても、いつも口を一文字に結んで表情を崩さ

ない。

極めつけはその直後の事件。

たまたに協会の敷地に出没する子犬があり、それに木乃香が泣かされるのがままたあった。

以前 刹那が竹刀でその子犬を追い払うことに成功したのだが……。

先日、再び子犬が現れた。そしてそのとき刹那は竹刀を持っていなかった。

彼らは大人達が駆け付けるまで、吠えられながら散々追い回された。だが士郎はその時ですら反応を示さず、刹那が引つ張り出すまで逃げたそうともしなかった。

木乃香は、士郎が恐ろしくなった。

吠えられて怖ないん？ 噛まれたらどーするん？ 何で逃げへんの！？

なんでいつも、そんな眼で !

『このか。士郎はここに来る前にとて辛いことがあったのです。できるだけ、優しくしてあげてくださいね』

父の言葉を思い出す。

もともと士郎を外に連れ出したり遊びに誘ったのは、その言葉を受けた木乃香の、彼女なりの優しさだった。

……それにそっけない態度ばかりとる士郎に、刹那はいちいち憤慨していたが。

そして　　木乃香は決心する。「士郎を笑わせてみせる」と。

「せやから、おかしくろうおもったんや」

作戦名『美味しいものを食べれば皆ハッピー』。

「……………しかしわざわざ、お嬢様が自ら作らずとも……………」

「てづくりのほづがおいしいってきいたえ？」

こてんつ、と心底不思議そうに首を傾げた姫を見て、巫女は心の中で白旗を上げた。

（お嬢様、可愛らし過ぎです……………ッ！）

ひとり悶える巫女を再び不思議そうな顔で木乃香が見つめると、それに気づき彼女は即座に姿勢を正す。

「……………こほんつ。わかりました、しかしおひとりではダメです。誰

か大人の方と一緒に料理してください。私が板長に話しておきましよう。ですから今日はやめてください」

「はい」

巫女が狂喜するような笑顔を残し、少女は黒髪を揺らして てててと歩いていった。

後日。新品のエプロンを着て板長と一緒に板場に立つ木乃香の姿があった。ちなみに割烹着も用意されており、エプロン姿と共に記念撮影が行われたのは言うまでもない。

「お嬢様は初めてのお菓子作りですし、簡単な饅頭おまんと団子を作りましょう」

「はい」

後日焼き上がったそのときの愛娘の写真を見た詠春が、そのカタブツそうな顔を蕩けさせたのも言うまでもない。

その写真は極秘に無断で焼き増しされ、呪術教会・木乃香お嬢様ファン倶楽部の会員が数日間ホクホク顔だったことはもっと言うまでもない。

「んしょ、んしょっ」

材料は強力粉、薄力粉、団子粉、黒こしあん、白こしあん e t c …。
声を出して、心をこめて一生懸命 生地をこねた。

・ ・ ・ ・

「できたあっ!!！」

「とてもお上手ですよお嬢様」

「素晴らしい出来栄えですよお嬢様ッ！」

小さな掌にポテツと白い饅頭が乗っている。プロや板長のものと比べるとさすがに歪で不格好だが、初めて作ったにしては間違いなく上出来な部類に入るだろう。

「わーいわーい！ シロウントコもってこーー!!！」

「ああっお嬢様 手を洗ってください、それに皿に盛り付けません
と」

後片付けをしると誰も言わないのは、自分達の姫をつい甘やかしてしまう彼らの悪い癖だった。

・

・ ・ ・ ・

？毘古社の一角、とある社の縁側に、ちよこんと並んで座る兄妹の姿があつた。

……それを陰から見つめる約一名の少女がいるのは「愛嬌」。

(わくわく わくわく)

「どや？ おいしい!？」

「……うん。美味しいと…思う」

(ワクワク ワクワク)

「……もぐ…もぐ。」

(……わくわく…。。)

「……もぐ…もぐ。」

(……。。)

「……なにこれ？」

(……ごめん……)

「……？」

惨敗だった。

(シロウエ……………!!)

2人は幸い(?)、刹那が陰から発する殺気に気づかなかった。

(……………美味い)

士郎の表情がいつもより柔らかいものだったことにも、落ち込んでいた木乃香は気づかなかった。

「そうですね、このかがお菓子を」

先日の巫女が事の顛末を報告したのは協会のトップ、「西の長」「近衛詠春」。

かつて、魔法世界の存亡を懸けた戦いで力を振った一団「紅き翼」。

その一員にしてサウザンドマスターの盟友。魔法界でサムライマスターの異名を執る救世の英雄のひとり。連日の激務ですっかりこけてしまった頬が不健康な印象を与えているが、それでも彼の眼は穏やかだった。

「あの娘は、本当に優しい」

その声が聞こえたのは、いま彼の執務室に居る2人だけだ。

「……………長。本当に…それだけのことでしょうか？」

恐る恐る、巫女は震える声で話を切り出した。ずっと胸に抱えていた、その疑問を。

詠春は何も言わない。その目で彼女を見やる。続けるということなのだろう。

「確かにお嬢様は心優しいお方です。しかし……………木乃香お嬢様は恐ろしくないのでしょうか？」
士郎様が「

あんなおそろしいものをわたしはみたことがない
巫女はそう
言葉を続けた。

「彼は……………あれは、”空虚”…なんでしょっね
「は……………」

疲れたように溜め息を吐き、詠春が口を開いた。

「あの子はく不幸な事故で全てを喪いました。そして、胸を抉るような現実にも無力で独り投げ出された」

人が生きながら焼け死んでいく世界で、彼は独り生き残った。

空気すら焼ける灼熱の世界で、見るも無残な姉の死を突きつけられた。

そこは彼にとっても、彼でない誰かにとっても。地獄以外に成り得なかった。

そのとき燃え尽きてしまったのか。壊れてしまったのか。死んでしまったのか。

それは誰にもわからない。

唯一つ確かなことは。

少年はその大事な心を、その地獄に永遠に置き去りにしてしまったということだけ。

いまの「士郎」には、こころがない。

それでも木乃香は士郎から離れていかなかった。

大の大人さえ恐怖を催さずにはいられない、その”虚無”を感じ取ってなお彼女は傍に在り続けた。

「あの娘は……本当に優しい」

優しさと甘さは度々イコールで結ばれる。だが今回は違う。優しさは「強さ」に成りうるのだと。詠春は今までの人生の中で初めて気づかされた。

『シロウ ……!!』

下の庭から、騒がしい声が聞こえる。いま本山にいる者達の心はおそらくひとつになっているだろう。「ああ、またか」と。

「噂をすれば、ですね」

「……ええ。また刹那が士郎様を追い回しているのですしょう」

理由は先ほどの「このか手作りお菓子の一件」だろう。

「平和ですね」

時折り聞こえる子供達の元気な声は、関西呪術協会の日常になり始めていた。

川辺ではしゃぐ、「妹」と「友達」の声が聞こえる。

それでもいつも通り少年はその輪に加わることなく、昨日の雨で濡れた雑草の上に構わず腰を下ろしている。

彼はただ気だるげに、自らにとって何ら価値のない世界を瞳に映していた。

それでも無意識に、2人の少女を常に視界に入れていた理由を、彼はまだ知らない。

「妹」？ 「友達」？

くだらない。自分はその日からずっと独りだ。家族なんてものも無い。

何もかもが億劫で、あらゆるものが無価値で、世界の全てがどうでもいい。

だというのに。何故かあの「妹」はいつだっておれに笑いかける。おれが気に入らないくせに、あの「友達」も一緒になっておれを連れだそうとする。

放っておいてくれよおれの事なんか。なんで構う。なんで笑う。

（ 一体、なんだっていうんだ。 ）

そんな士郎の苛立ち^{いらだち}は、突如別の思考に支配される。

ドボンッ！

「え」

不意に、少女の片割れが姿を消す瞬間を視界に収めて。

「……このちゃんッ！」

刹那が悲痛な声で叫んだ。突如起こった事態^{げんじつ}に数瞬動きを停止するも、直ぐに親友を助け出そうと慌ただしく辺りを見渡す。しかし力になってくれそうな大人は近くにいない。

そのとき、刹那の目が士郎を見た。

だが役に立たないと判断したのか。刹那は足元に落ちていた長い木の枝を掴んで走りだし、流されていく木乃香に必死に突き出す。

「このちゃんっ！ こ、これにつかま」

昨日は雨だった。増水した川は流れが激しく力がある。

それは同時に、刹那の足元も露に濡れていることを示していた。

「あつ」

激しい水音をたてて、刹那もその身を川に落とした。

数秒。ほんの数秒だ。

たったそれだけの時間で、自分を取り巻く2人の少女が抗い難いものに飲み込まれた。

だが、自分にどうしろという。

家族でも友達でも、何でもない少女達の為に、いったい何をしろと言うのか。

正直どうでもいい。だが助けられないわけにもいかない。誰か大人を呼ばなければならぬだろう。

『。』
『!』
『!』

2人の叫びが士郎の耳を叩く。それは士郎の頭を支配した。

大人を呼んでいる時間があるのか？

自分が助けに行っただ方が助かる可能性が大きいのでは？

「 いやだ 」

頭に浮かんだ考えを、士郎は即座に棄却する。その可能性は危険性。士郎自身も道連れになる恐れが大いにある。そうなった結果、訪れるのは

息苦しい程に心臓が胸を叩く。もはや呼吸することすら困難になる。それを無理やり押さえつけ、士郎は立ち上がって川から背を向ける。

「 死にたくない。おれはまだ死にたくない 」

『 違うだろう。お前が助けるんだ 』

「 ツー! ? 」

いま聞こえた声の主を探して、立ち止まって辺りを見渡す。誰もいない。

「なに言ってるんだよ！ だったらあんたが助けるよ！ なんでおれが……なんで！！」

耐えきれなくなつて土郎が喚く。そして 気づいた。

なんで。

苦しい程に心臓が動くのは、なぜ。

苦しい程に呼吸が荒いのは、なぜ。

思わず背を向けたのは、なぜ。

耐えきれなくなつたのは、何に對して？

嫌だつたから。

激しい動悸は焦り。苦しい呼吸は恐怖。背を向けたのは”彼女たちの死”から。失うことに、耐えられなかった。

父を喪い、母を喪い、姉を喪い、そして今また 妹と友達が。

家族でも友達でも何でもない？

そんなこと、ない。

いつだって笑ってる。いつだって怒ってる。いつだって、傍にいた。

木乃香と、刹那。

“お前らまで俺を、置いていくのか”

『往けよ。きつと後悔する』

この数秒もない出来事を経て。

士郎は川に沿って駆けだした。

森の中の川沿いに、ずぶ濡れになった3人の子供がいた。

1人は息を切らして大の字に寝転び、他2人は咳き込みながら座り込んでいる。

増水した川の勢いは激しかったが、増水したゆえに水かさが増し、士郎はなんとか2人を引き上げることに成功した。

だがこの結果は、現実には奇跡だったと言っている。8歳の子供が

たった1人で、4歳の子供2人を川から引き上げる。それがどれほどの困難か。本来ならば3人と溺死していた。それを理解していた土郎はそれでも、助けないわけにはいかなかった。

「ゲホツ…ケホツ……。…ごめん…このちゃん。ウチ…もっと強おなる……！」

「え？…そんなんええよ…けほつ、一緒に遊んでくれるだけで」

2人が、土郎の意識がないことに気づくのはこの直後。

地元の大人が偶然通りかかり、3人の身に起こった事態が協会に伝わるのは約1時間後。

このときの会話が…2人の少女の後々にまで影響することになると知るのは、約10年後のことだった。

「……………どこだここ」

いや、俺の部屋の天井だってことは間違いない。いま俺は自分の部

屋で、自分の布団の上に横になっている。ただどうして、こんなことになっているのかというワケで

「ふみゆ……………」

びっくりして声の方に顔を向けると　木乃香が、俺の横で座ったままうたた寝していた。船を漕ぐようにこっくり、こっくりと頭が前後に揺れている。

……………だんだん思い出してきた。そうだ、俺は

スウツ……………。

「このちゃん、シロウ起き……………」

……………ばつちり目が合った。

襖を開けて入って来た刹那と、横になった土郎の視線が数秒間絡み合う。

「お……………」

(……………お?)

「長あ　　！！　しろっシロウが目を覚ましましたあああああ

あ！……！

耳を塞ぎたくなるような大声をあげて走り去る。廊下に響くドタドタという足音が僅かに遠くなった頃、ようやく木乃香も目を覚ます。

「みゆ ……。あ、シロウおはよー」

「あー…おはよう」

「……………っ！？」

寝ぼけ眼をこすっていた木乃香が、目を見開いた。

「しっ…シロウ

！！」

「おわぁっ！？」

ようやく脳が覚醒したのか、士郎が目覚めていると理解したとたん木乃香は彼に抱きついた。

ドタドタドタドタ……………ばたんっ！！

「シロウッ！ 起きてる ……………ッ！？」

(あ、死んだ。)

士郎は桜咲刹那という人物を自らの友人だと認識してはいるが、おそらく彼女の方はそうではない。

自分が木乃香と仲良くする度に彼女は、士郎を怒鳴ったり竹刀を振り回して追いかけてきたりエトセトラ。

たぶん、いや確実に嫌われている。それが士郎の考えだった…のだが。

「……………え？」

刹那は士郎を見るなり硬直し、その目に涙を溜め始めた。

「……………つく……………ひつぐ……………ふえ……………」

その姿に、士郎は声を出すことも出来ず
彼女の為すがまま抱きつかれた。

「シロウ……………シロウ……………！」

「……………。」

呆然とした士郎と、彼に抱きつく木乃香と刹那。
そんな3人の姿に頬を緩めた詠春は、部屋に入ることなくそっと襖
を閉める。

そのまま踵を返そうとして 縁側を歩きながら ふと庭を
見て、足を止めて空へ顔を上げる。天気は快晴。どこまでも青い、
蒼い空だった。

(士郎はもう、きっと大丈夫)

「あの世で君に謝らなくて済みそうですよ、切嗣」

ありがとう、詠春。

彼は自分の正面から歩いて来る医師に少しだけ待つよう伝えて、軽
い足取りで執務室に帰っていった。

この後、^{のち}関西呪術協会に響く子供の笑い声は3人分が増えたのだっ
た。

ただそれも、長くは続かないが。

短くない年月を経たその先に、再び彼ら3人が笑い合える日がやって来る。

その時を、楽しみに待っていていよう。

《おまけ》

士郎が目覚めた数分後。

刹那「あ、あの……し・シロウ……その、たすけてくれてあ、ありが……」

士郎「ん？ なんだ？」

刹那「な……なんでもな　　い！！」

士郎「げはあっ！！？」

木乃香「せ、せっちゃんなにしとるん！？」

顔を真っ赤にした刹那の正拳突きが、士郎の鳩尾に見事に入りましたとき。

チャンチャン

・5話 京都編 関西呪術協会・子供会（後書き）

《裏設定》

「アンタの親父さんはなア、ウチみたいな人間にとつては英雄や」
「長も英雄なんて呼ばれとるけども…ウチから大事なもの奪ってつた奴らの仲間を、ウチは英雄やなんて絶対呼んでやらへん」

幼い自分に背中を向けて、涙を殺して声を絞り出すその女性は「天ヶ崎千草」と言うことを、士郎は終ぞ知ることはなかった。

*実は会ったことがあるという裏設定。士郎の方が覚えてないうえに、めんどくさくなって改訂前の修学旅行編では描写しなかった。改訂版では千草の1人語りで描写してもいいかもしれない。

（よりによつて…何でアンタが。何でアンタがウチの前を遮るんや
士郎 ……！）

……つてカンジ？ うーんどうだろ。

*ちなみに以前、「ネギま！ 剣製の凱歌」の、「修学旅行編の」「あとがきにのみ」「名前だけ登場した」「京都編の人物」「鍋島柚衣」サン。

彼女は今話の出来事の後に士郎の教育係になる予定。ああ、登場させられなかった……。……登場させようと思えば出来るんだけど。面倒だから。

〈補足・解説〉

：少女はそう言って申し訳なさそうにほにやっと笑う。

由紀香ちゃんはマジ天使だと思う。(あれ？木乃香の話だったはず……)

：時折り聞こえる子供達の元気な声は、関西呪術協会の日常になり始めていた。

士郎の実の父親である切嗣は協会の反関東派に英雄視されているため、呪術協会全体から士郎は煙たがられたりしていません(近衛家の養子にするのはどうかと思っっている人間はいるが)。刹那は神鳴流であり、木乃香は言わずもがな。

この3人の微笑ましさは関西呪術協会の癒しとなっています。

：「違うだろう。お前が助けるんだ」

：「往けよ。きつと後悔する」

この声は士郎の幻聴ではなく、自覚していない己の心の声というわけでもなく。実は「ネギま！ 剣製の凱歌」「バッドエンディング後の士郎が”時間旅行”で過去にやってきたという設定。

そして実は…当初はそのバッドエンドルートがトゥルーエンドになる予定でした。今ではハッピーエンドを目指していますが。

ぶっちゃけ「仮面 イダーカブトのTV版と劇場版の関係」と似たようなモンですかね？

：「お前らまで俺を、置いていくのか”

士郎の一人称が「おれ」「俺」になるという判り辛い変化。士郎の成長、心情の変化を象徴しています。

このあと土郎のセリフから「……………」が減って流暢に喋ったり考えたりするのは「新しい心」が生まれたからで、「死んだ心」が生き返ったわけではない。

つまりある意味、心を失う前の土郎と現在の土郎は別人とも言える。

疑問点・お気づきの矛盾点がありましたら感想までお寄せください。

それでは次回！

- 4話 英国編 平穩を奪う闇（前書き）

改訂前Ver.に全13話で書いた過去編、それを全3話に再編集したのが今回の「英国編」です。

ぶっちゃけ「改訂前の方が面白い」というのが作者の自己評価でも以前のは長過ぎたよねという反省から短くしました。

そのため展開が速いとか唐突だとか心情描写が拙いとか欠点だらけでしかもそれらを改善出来ていない。しかし私、小説は自己満足の為に書いてますので別にいいんです（オイ

今回から始まる「英国編シリーズ」はオリジナル要素が強いので
ご注意を。

それではどうぞ！

・4話 英国編 平穩を奪う闇

「は、初めまして。私、エレナ・キャンベルって言います……あなたのお名前は？」

「よかつたら……その……私と、友達になってくれない？」

「ねえねえシロウ君。今日はどんな事があつたの？」

「……うん。じゃあそのときは、シロウさんに助けてもらっつね。約束だよ？」

1998年6月。俺に、親友ができた。

英国のウェールズ地方。そのとある山奥に、魔法使いが住む村があった。

「今日の授業は”呪い”についてです。

皆は呪いがどういうものかある程度知ってると思うけど、呪いについて正しい知識を知っておき、それに安全に対処するための大切な授業です。しっかりと聞くようにね」

そこには魔法使いとなるべく勉強に励む子供達の姿。その学び舎を「メルディアナ魔法学校」という。

「えー、私たちは普段魔法を使う際、精霊の力を借りることが多くあります。そしてそれと同じように、呪いにも精霊が関係する術式があります」

しかしその中に異質な者が1人いた。小学生程度の歳のクラスの中で、この場にそぐわない、中学生ほどの年齢の少年。

「あまりに強大な呪いを解呪するために、呪いの精霊を”騙す”という手法もあります。ただしその場合………注意しなければいけないことは何でしょうか？」

はい、シロウ君」

シロウと呼ばれた赤髪の少年が返事をして立ち上がる。

「はい。その場合、解呪は一時的な効果しか得られないことがほとんどです」

「はいそうですね。よくできました」

士郎は内心 溜め息をつきながら再び席に着いた。

(「よくできました」って、小学生じゃないんだから………)

近衛士郎(14歳)。ひよんな事から魔法を目撃し、魔法使いを志した少年。

実の両親と家族に先立たれ、親戚に引き取られたという過去を持つ。

義理の祖父・近衛近右衛門は魔法使い。しかし彼は自ら孫に魔法を教えることはせず、士郎はこの学校へ送られた。

お陰で今、士郎は年下だらけの学校で勉強するハメになっている。幸い人間関係に不満はない。その年齢のために最初は学校で浮いていたが、士郎の持つ生来のお人好しと人助け精神によって年下のク

ラスメイト達とは仲良くさせてもらっている。

（おじいちゃんが魔法を教えてくださいな。そうすれば必死に英語の勉強する必要も、麻帆良を離れる必要もなかったのになあ……………）

しかし魔法が学べるのはありがたい。士郎は入学2年目の授業に再び集中し始めた。

放課後。大概の生徒は授業を終えてすぐ帰路に就く。この村は山奥に存在し、生活に最低限必要なもの以外は何もない。当然娯楽施設などがあるわけはなく、学校が終われば友達と遊ぶか勉強や課題をする、もしくは家の手伝いをする以外にないのである。

しかし今のメルディアナには、それに当て嵌まらない数人の生徒が存在した。

村の丘、雑草が茂る平原に2人の少年少女がいた。

少年は星の飾りがついた杖を手に、少女はそんな少年を見つめなが

ら座り込んでいた。

「プラクテ・ビギ・ナル。……え」と

「ネギー、今日は早く帰るって言ったじゃない。早く行こうよー」

「もうちょっと…『闇を切り裂く一条の光。我が手に宿りて』……」

…」

士郎の赤い髪より鮮やかな赤髪の少年が何かをしている。

フルクフティオー

「白き

わあっ！！」

バシィッ！

「きゃあっ！？」

少年の掌から閃光が走り、辺りを一瞬白い光で染め上げた。だがどうやら失敗らしい。

光を出した少年は反動でひっくり返っている。

「ネ、ネギー！ 大丈夫！？」

「………失敗しちゃった」

そう呟くと彼はむくりと立ち上がり、再び杖を構える。

「………ネギー？」

「もう一回」

ビキッ。

「このポケネギ

ッ！！

危ないじゃないのケガしたらどうす

るのよ!!

ホラさつさと帰るわよ!! 今のことネカネお姉ちゃんに言いつけるからね!!」

「ええっ!? ちょっと待ってアーニヤ、お姉ちゃんには黙って

」

「うるさ い!! もう怒った、あんたはいつも無茶ばかりして! 今度という今度は

」

ぎゃーぎゃーと騒いでいる少年少女の名は

ネギ・スプリングフィールドとアンナ・ユーリエウナ・ココロウア。

スプリングフィールド。それは十数年前に世界を救った英雄の名前。ネギはその人物の実子であり、英雄の子として周囲に期待されている。

しかしその血脈ゆえに彼は「悲劇」に遭い、戦闘用呪文の習得に明け暮れる、およそ子供らしくない生活を送っていた。

そんな幼馴染みの面倒を見るのは専ら彼女、アーニヤの役目。カづくで練習を中断させられ、ネギはずるずると彼女に引き摺られていった。

「……………今日も平和だなあ」

微笑ましい様子を視界に収め、士郎はいつも通りある場所へ足を向けた。

メルディアナ魔法学校を擁する山村。
その中に立つ屋敷のひとつに、数年前から新たな住人が住み着いた。
それは病弱な女の子で、自然の中で養生する為にやって来たのだと
いう。名前を

コンコン、ガチャツ

「こんにちは、エレナさ」

「フシヤアアアアアアアア！！！」

「ぎゃああああ！？」

「きゃあああああ！？」

灰色の物体を視界に収めた瞬間、士郎の顔に縦線が刻まれた。

・ ・ ・ ・

「ごめんねシロウ君」

ベッドで上半身だけ起こしている少女が士郎を見る。

ブラウンの目と、腰の辺りまで伸ばした少し癖のある金髪。

申し訳なさそうに士郎に謝っている彼女こそ、この部屋の主エレナ・キャンベル（17歳）だった。

「いやいいよ……エレナさんの所為じゃないし……。で、その猫なに？」

僅かに恨めしさを込めた目で、窓辺に座る灰色の猫を見る。

「さっきアドルフおじ様がいらしてね、私にくださったの　　デイ
アナって言うんだって」

「へー、サクストンさんが来てたんだ」

アドルフ・サクストン。メルディアナ校長の知人である初老の魔法
使い。

士郎　校長　サクストン　エレナ、という流れで2人は出会った。

『士郎。お主に会ってもらいたい者がいるのだ』

『は、初めまして。私、エレナ・キャンベルって言います……あなたのお名前は？』

幼い頃から病弱だったエレナは友人らしい友人がいなかった、とい

うのは後で聞かされた。始めからその為に引き合わされたのだと士郎は気づいたが、だからといって彼女と距離を置く理由もなかった。

『ねえねえシロウくん。今日はどんな事があつたの?』

以来、エレナと士郎は友達になった。歳が離れているため姉弟のようだと言う者もいる。

2人がすることと言えば、士郎が外での出来事を話すだけだったがそれで充分だった。

そして士郎が今日も今日とて彼女の部屋を訪ねてみれば。灰色の猫に見敵必殺サーチアンドデストロイとばかりに顔を引っ掻かれた。

その張本人といえは、窓際に座って後足で頭を掻いている。

(何なんだこのヤロウ……………!!)

そんな意思を込めて士郎が視線を送ると。

「……………フツ……………」

鼻で笑わ…いや晒われた。なんかむかつく。

「おいでディアナ。よしよし、いい子」

エレナが呼ぶと、ディアナはすぐにベッドに上って彼女の膝上に座り込む。頭から背中を撫でられ、気持ちよさそうに銀色の目を閉じた。

(やつぱ猫だな)

そんなことを思った途端、ジロリと猫の視線が士郎に向いた。

(ッ!?! こやつ心でも読んでいるのか?!?!?)

「…………シロウくん」

マズイツ呆れられた!? くだらない思考を彼女に読まれたかと思つた士郎だったが…………その考えは頭の外へ押しやられる。

エレナの表情には、隠しようのない陰があつた。

「なにか…………あつたのかな」

聞き逃してしまいそうなほど頼りない声でエレナが言う。要領を得ない質問だが、答えない訳にはいかない。答えなければいけない。訊かなければいけない、そんな気がした。

「何かつて…………何が?」

俯いて目を伏せ、ディアナを撫でる手を動かしながら彼女は続けた。

「おじ様がね……………すごく、怖い顔してたんだ。隠そうとしてたみたいだけど私にはわかる。だって私のおじいちゃんみたいないなひとだもの」

『エレナ、この猫はディアナという。君の新しい友達だ』

『 きっとお前を守ってくれる』

「……………」守ってくれる”…。きっと何かあったのよ。おじさまはいつもそう。いつも自分だけで済ませちゃうの」

俺にはよくわからない…だが、あの人をよく知るエレナさんが言うのならそうなんだろう。

”何かが起きようとしている”。

「 怖い？」

「……………」怖いよ。すごく嫌な予感がする。もう…誰にも会えなくなっちゃうような気がする」

「そんなことあるわけない」「大げさだ」とは言えなかった。彼女の纏う暗い不安が、俺の口を縫い付けて動きを止める。

駄目だ、そんな顔しないでくれ。何か言えよ俺の口……………！！

「 。。。」

苛立ちを含んだような視線が俺を射抜く。それを辿った先には銀灰色の双眸が、じっと自分をみつめていた。

（ デイア、ナ……………？）

“ 早く言葉をかけてやれ。友人だろう”

眼が、そう言っていた。

「大丈夫だよ」

「え？」

「きつと、大丈夫」

わけがわからない、といった目で彼女は俺を見る。

確かに俺の言葉には何の根拠もない、そしてこれから言う言葉にも。

「この村には大勢魔法使いがいる。校長だって、ドネットさんだって、今ならサクストンさんだっている。それに……俺もいる」

でもいいだろう？ 少しくらい見栄を張ったって。

「本当に エレナさんの身に何か起きるんだとしても、俺が守るよ」

「俺が、エレナさんを護るから」

「……うん。じゃあそのときは、シロウくんに助けてもらおうね。」

約束だよ？」

「ああ、約束だ」

凄く綺麗な笑顔で笑った彼女に少しだけ見惚れた後。俺達は可笑しくなって笑い合った。

彼女を元気づけるためだけの、冗談のような約束。

それが試される日が来るなんて俺は、思いもしなかったんだ。

時間は過ぎて12月25日、クリスマス。

日は沈み夜の帳は落ち切った。石畳の上に立つ街灯と月明かりが辺りを照らし、しんと降り続く雪が薄っすらと地面に積り始める。

「……………」

もうすぐ夕食の時間だと思って台所のドアを開けて数秒間、呆然とせざるを得なかった。

ドアを開けた土郎の目の前で、アラサーの女性が年甲斐もなくハシヤいでいる。

よく見ると玄関に普段見慣れない革靴が置いてある。土郎はようやく眼前の事態が把握できた。

「ああ…おじさんが帰って来たんですか」

「そうなのよ！ まったくあの人ったら仕事仕事って何ヶ月も私のこと放っておいて、ホントヒドイわよね〜」

愚痴すら幸せいっぱいだった。

土郎の祖父・近右衛門とメルディアナの校長は友人で、その繋がりで下宿先として紹介してもらったのがここネヴィル家である。

魔法具などマジックアイテムを作る職人「魔具師」であるバートランド・ネヴィル氏と、その妻ドナ・ネヴィルの夫妻が土郎の現在の保護者である。

土郎がおじさんと呼ぶネヴィル氏は旧世界・新世界問わず仕事で飛び回っているためにほとんど家に帰って来ない。だからいま夫人はこんなにゴキゲンなのだ。

「さ〜て今日のお夕飯は御馳走よー！？」

踊るように調理するドナ。土郎は彼女が手に持った包丁が怖くて仕

方なかった。

「やあ士郎、帰って来たのかい」

声の主は、赤茶けたボサボサ髪とそれと同色の目を持つ男性。自宅だからだろうが、服もだらしない着こなしをしている。

彼こそが話題の人、この家の家主・バートランド・ネヴィルだ。

「おかえりなさいおじさん。で、ただいま」

「ああ、おかえり」

彼は士郎のような人懐っこい笑みを返した。

夜になったことに加えて冬休みであるメルディアナ魔法学校。その校長室に、ある客人が訪れていた。

「久しいなアドルフ。息災で何よりだ」

校長にアドルフと呼ばれた初老の男は 僅かに口の端を上げて応えた。

アドルフ・サクストン。かつてエレナの祖父の「魔法使いの従者」ミニステル・マギであり、同時に親友だった人物だった。

「校長もお元気で。それであの子は……いや、あの子達はどうですか？」

「あの子らも息災だ、儂らなどより余程な。仲も良い、まるで姉弟のようで微笑ましい。」

してアドルフ、何用で来た。亡き親友の孫娘の顔を見に来た……だけならば良いのだがな」

アドルフの眉間に皺が寄る。それは苦悶の表情だった。

「その通りです校長。実は……」奴”が生きて……ここに向かっているかもしれない」

校長が目を見開いた。

「……奴……じゃと？確かか？ アレはお前の親友が、サイラスが命と引き換えに」

「10年前、奴と戦った私には解る……」奴”です。間違いない……！」

確信に満ちたサクストンの言葉に、校長が黙りこむ。

2人の間には重い空気が流れ、重い沈黙が部屋を支配した。

「……………」ごちそうさまでした」

「ああ、美味しかったよドナ」

「うふふ お粗末様でした」

士郎はゲップが出そうになるのを必死に堪える。とてつもなく大量の食事だった。夫人、夫が帰って来たからって頑張り過ぎである。しかしそれを何食わぬ顔で完食して笑ってみせる辺り、旦那の方も妻への愛が溢れている……………のか？

「2人とも、何とデザートもあるのよ」

「おっ、それはいいね！ 一体何かな？」

「……………」うぶ」

《 》。

「……………」

「？ どうかしたかい士郎？」

「いや…何か変な感じがしたっていうか…誰かに呼ばれた？ ような。……………気の所為かな」

《 気の所為などではない》

「へ？」

ダイニングキッチンの面々が部屋のドアを凝視する。
今、明らかにこの家の者ではない声がした。

《……………何処を見ている……………此処だ》

「「「え」「」」

よく見るとドアが僅かに開いており、そこには1匹の猫がいた。
だがその猫、士郎には見覚えがある。

「 …… ディアナナ!？」

士郎は思わず叫んで近寄った。何故なら……………その灰色の体が、血まみれだったから。

《ええい…私に触れるな小僧! 怪我など……………今はどうでもよい……………!!!》

「!?!? しゃ、しゃべつ」

「……………猫の妖精か?」

《その…通りだ この家の主よ。誰でもよい……………伝えてくれ。あの娘が……………エレナが……………》

そのまま、ディアナは糸が切れたように崩れ落ちた。

「エレナ? 士郎の友達の、あのエレナちゃんか?」

「……………あなた、これ只事じゃないわ。校長先生に連絡してシロウ!？」

ドアを突き破るような勢いで、士郎は雪の降る中を駆けて行った。

この世界には、吸血鬼が2種類いる。

失われた術法によって人間が吸血鬼へと変じた、「ハイデライトウォーカー」。

「真祖の吸血鬼」。

そして「そうではない吸血鬼」。幻想の存在である神造異界の住人、魔法世界人。

後者の吸血鬼である人物と、とある人間の間にも生まれたのが「彼」だった。

血の為に、欲望のまま人を襲い続け、魔法世界で多額の懸賞金をかけられた。

遂にはゲートを密航して旧世界へ逃亡。さらに人を襲い続けた。

そして現在より10年前。

その人物はとある魔法使いと相討ちとなって死亡。
魔法使いは死後、本国より「偉大な魔法使い『マギステル・マギ』」
の勲章を贈られた。

だが彼 吸血鬼は生きていた。
力の源である血液を大量に失血し、激しく弱体化しても尚、地を這
い蹲るようにして生きていた。

息を潜めるような生活を続けた。
見つからぬよう、感づかぬように人を襲い、魔力の回復に必死に努
めた。

「独学ながら魔法の知識も手に入れた、むしろ過去の私を超えたか
もしれないな」

だが恨みは忘れていない。私を討ち倒した魔法使い『サイラス・キ
ヤンベル』。
しかし彼は私との戦いで死去してしまったのだという。

「ならば、彼の血縁を狙うだけ」

サイラスの血を色濃く受け継ぐ孫娘がいるという。
その娘は病弱で、現在とある山奥で養生していると聞いた。

探し出すのが面倒だと思っていれば、偶然見つけた彼 サイラ

スの親友にして相棒、アドルフ・サクストンが妙な動きを見せていた。

もしかと思って後をつけてみれば。

『エレナ・キャンベル』。

私の目の前に彼女がいる。

ベッドで上半身だけ起こして本を読んでいる可憐な少女。

「……………どちら様？」

相変わらずだ。サクストン。君はいつも大事な所でヘマをする。君は常にサイラスの足を引っ張ってきた。今回に限っては彼の孫娘さえも巻き込んで。

…いや、今回は私の幸運　彼女の不運によるものかな？

「初めましてお嬢さん。申し訳ないが　その血を『いただききます』」

「ゼエツ、ハアツ……………!!」

屋敷の廊下を走る。全力で走る、走る。

息が切れても、肺が悲鳴を上げても。

士郎は筭に乗れないため、家からずっと走って来た。とつくに限界など超えている。

だが止まるわけにはいかない。友達に危険が迫っているかもしれないのだ。

その予感はずいぶん変わっている。士郎が走る先々で屋敷の使用人が倒れている。

気絶しているだけだと思われるが、何か起きていることは疑いようがない。

そして　　最後の、扉。

「　　エレナさんッ…!」

扉をブチ破る。

「　　おや。ノックもせずレディの部屋に入ってきて来るとはマナ
ーがなっていないね」

目の前に、黒い　　黒い男が立っていた。
黒いシャツ、黒いネクタイ。黒いスーツに黒い革靴、黒いコート。
肩口までのびる、湿っているように脂ぎった天然パーマの黒髪。
黒くないのは、病的なまでに白い肌と紅い瞳だけだった。

そして。男の足元には

(……………何で。何でエレナさんが倒れてる?)

文字通り、血の気の無い肌の色をしたエレナが倒れていた。

(　　何をされた?)

首筋に残る斑点のような傷から、血が滴り落ちている。

誰に。

「お前

……!!」

激昂して男に駆けだした。

「プラクテ・ビギ・ナル！ 火の精霊17柱、集い来たりて敵を射て
て！！！」

「『魔法の射手・闇の19矢』」

「 がつ！？ 」

速い。後から呪文を唱え始めた男は容易く士郎の呪文詠唱を
追いついた。

全身に魔法の矢を受けた士郎はその場に倒れ込む。
ほとんどが掠り傷だったが……左腕、左脚、そして脇腹を矢が貫通
した。

間違いなく重傷だ。噴きだした鮮血が辺りに血溜まりを作っていく。
士郎は這い蹲るように床に伏して吐血した。

「がつふ……あ……げはっ！！」

だが まだだ……！

「ほう。その傷でまだ敵を睨みつける気力があるとは。こんな山奥
の、平和ボケした魔法使い……いや、魔法使い以下の子供が」

(……………当たり前だ)

《其処は地獄。または煉獄。或いは魂を灼く錬鉄場。》

(あの地獄を生き延びた

この程度でビビる程ヤワじゃない…

…!!)

「……………君に興味が湧いてきたが、生憎と私は暇ではない。グズグズしていたら魔法使い共が集まって来てしまう。さらばだ少年。じつとしていれば失血前に助けが来るだろう。その命、大事にしたまえよ」

「……………は……………？」

コイツは今、何と言った。

『ちんぽ、だど？』

……………おい、待てよ。巫山戯るな。

逃げんな!!

好き勝手やっておいで

後はさっさと逃げるのか……!!

「ふざけんな、こんちくしょう……!!」

傷の痛み能耐えながら絞り出したその声は、立ち去る男に届かない。尚も声を張り上げようとしますが、痛みと失血で視界が歪む。体は当然動かない。

意識が、徐々に薄れていく。

(くそっ　　待てよ……!!)

『うん。もし何かあったらシロウ君に助けてもらっね。約束よ?』

約束は守れなかった。会話の流れで言った、冗談みたいな約束だったけど。

それでも、俺は

!!!!!!

》

ゴォン!!!!

錆び色の大地。乱立する無窮の剣。空を染める黄昏。宙で軋む歯車。

世界。根源の渦。英霊の座。とある英霊の心象風景。

其処は、「剣の丘」。

その丘に、たった独りで立つのは。

「理想に溺れて溺死でもしたか？ 衛宮士郎」

《おまけ》

「士郎、エレナの部屋を訪問する。の巻Ver.25.5」

コンコン、ガチャッ

「こんにちは、エレナさ」

いつも通りノックして 返事を聞かずに ドアを開けて、
絶句した。

部屋に居たのは2人の女性。1人は黒いドレスにフリルの付いた白いエプロンを着ている、いわゆるメイドさん。そしてもう1人は。

「ひゃあっ！？ シッシロウ君っ！？」

下着姿のエレナさんでした。上下ともに色は白

「あの子はお嬢様のことになるよと目の色が変わっちゃうんですよ、でも普段はとつてもいい娘なんですよ〜?」

「は、はあ」

申し訳なさそうな笑顔で謝ってくる彼女を見て、何故か士郎は不安に駆られた。

笑顔の裏に、いや彼女の後ろに「割烹着を着た悪魔がいるような気がする」などという自分でもわけのわからない焦燥。

思わず一歩後退る。

(……怖い。なんか怖い。害意はないのに悪意に満ちてるとかそんな気がする!?)

そんな士郎の内心を知ってか知らずか、逃がさんとはかりにルビーは士郎に一歩近づく。

先程までとは違う種類の笑みを浮かべて。

「それでえ〜……。お嬢様のお身体を拝見したご感想はどうですか？多少クセはありますが、絹糸のような金糸の髪!

あのシミひとつなく白い、艶のある肌! 瑞々しい太腿!

清純ながら色香に満ちたうなじ、鎖骨! くびれ! 足首!

あどけなく愛らしいお顔! 赤く染まる唇!! どうですかシロウ様!? もうドキツとしちゃったとかクラツときちゃったとか興奮しちゃったとか押し倒したいと思っちゃったとかキヤ〜!!

シロウ様ったらそんな大胆な〜」

「おっ思ってませんよそんなこと!!」

ギィィ……………。

地獄の扉が、開いた音だった。

ドアの向こうには。

顔を真っ赤にして俯くエレナさんと、こちらを怨嗟の籠もった眼で射ぬくメイドさんの姿があった。

ええそりやまあさっきの会話（というかルビーさんの声）は当然聞こえているでしょうねえ大声だったんだからそしてルビーさんは満面の笑みで吊り上がる口を手で隠してくすくすとお笑いになられておる……………嵌められた。

ドアの向こうから、もう一人のエレナ付き侍女サファイア・モーラ
ンがナイフを両手いっぱい構えている。排除すべき害虫を S A T
S U G A I すべく。

（ああ……………死んだなこれ。ははっ）

《いいから走れ！そのような泣き事聞く耳もたん！！》

そんな幻聴が聞こえていなければ、俺はあそこで死んでいただろう
と思います。まる。

・4話 英国編 平穩を奪う闇（後書き）

《ボツ文章・あるいはエフルート》

「……」守ってくれる”…。きっと何かあったのよ。おじさまはいつもそう。いつも自分だけで済ませちゃうの」

俺にはよくわからない…だが、あの人をよく知るエレナさんが言うのならそうなんだろう。

”何かが起きようとしている”。

「そういう所はシロウくんも同じね」

「…いや、なんでさ」

思わず反論すると、彼女はクスリと笑う。

「だってそっくりじゃない。君は ……貴方はきっと、そういう道を進むことになる。私にはわかるの」

困ったような、悲しそうな笑みを浮かべる彼女を見て、土郎は何も言えなかった。

〈補足・解説〉

・平穩を奪う闇
ヴァイジター

「ヴィジター」＝「来訪者」。

・ネギ・スプリングフィールドとアンナ・ユーリエウナ・ココロウア。

この時のネギはメルディアナ魔法学校一年生、アーニヤは二年生です。

・校長

メルディアナ魔法学校校長。彼の魔法使用ミニストラ・マギの従者であるドネットさんの登場予定はありません。

・そして「そうではない吸血鬼」。幻想の存在である神造異界の住人、魔法世界人。

捏造設定。多分こうなんだろうなあって想像で作ったものです。

・英国編オリジナルキャラクター

エレナ・キャンベル

17歳の少女。少しくせのある金髪を腰まで伸ばしている。瞳の色はブラウン。

祖父譲りの膨大な魔力と才能を持つが、生まれつき病弱な為にならず、土郎が初めての友達。

ロンドンの実家（金持ち）に祖母、父母、そして10歳の妹がいる。

アドルフ・サクストン

灰色の髪をした初老の男性。瞳の色は青みがかった灰色。

魔法使いで、エレナの祖父の親友で彼の魔法使用ミニステル・マギの従者だった。

その親友の死に負い目を感じており、忘れ形見であるエレナを守ってきた。

校長の知人。

ディアナ

女神の名前を持つ、灰色の毛並みと銀灰色の瞳の猫。性別はメス。オコジョ妖精と並んで由緒正しい猫ケット・シーの妖精。

元はアドルフの使い魔だったが、エレナに迫る危険を感じて彼女を守るためエレナの飼い猫となった。

士郎が初対面の時に引つ搔かれたのはディアナが士郎を警戒したため。

ネヴィル夫妻

結婚して数年経つのに、一緒にいると今でもバカツプルの如くイチャイチャする歩く公害。

そんなバートランド氏のドナへの接し方を見て過ごしたため、士郎の女性の扱いは多分にこの一家の影響を受けていたりする。

吸血鬼

この吸血鬼の名前は後々に登場する予定です。それまではいちいち「吸血鬼」と呼称します。

ルビー・フェアマン&サファイア・モーラン

エレナ付き侍女の2人。にも解説あり。

： 貴方を、万死に値するツ！！

： あは

某屋敷の某メイド双子姉妹とは別人。ていうかこれが翡翠さんだったら性格違い過ぎるw

平行世界の人物というわけでもない。姉妹じゃないし。あくまで他人の空似でそっくりさん。しかも外見は全くの別人・性格だけ似てるという設定。

ていうか「おまけ」でのお遊びなのでそこまでちゃんと考えてないですw

それでは次回!!

・3話 英国編 〈剣の丘〉（前書き）

修正・加筆はありますが、基本的に改訂前と変わりません。

改訂前を知る読者様は読み飛ばしていただいてもノープロブレム。ただし次話は以前と展開が違いますのでご注意ください。

それでは「・3話」《剣の丘》ブレイドハイト」、どうぞぞ！

- 3話 英国編 《剣の丘》

マイナス
- 3話 英国編 《剣の丘》
フレイドハイト

《

ゴオン!!
》

歯車が浮いていた。

黄昏という言葉が想起される夕焼けの空。

そこに、幾つもの歯車が浮いていた。

ああ、なんて懐かしい

「え？」

懐かしいだつて？

俺は、此処を知っている？

ガバツとその場で起き上がり

剣。

剣が在った。

短剣、長剣、小剣、大剣、石剣、銅剣、片手剣、両手剣、西洋剣、
騎士剣、斧剣、鎌剣、
錘剣、双剣、湾刀、和刀、野太刀、小太刀、夫婦剣、霊剣、聖剣、
魔剣、破魔剣、妖刀、
神刀、神剣。

あらゆる剣が其処にはあつた。

砂塵が舞う錆び色の大地に、墓標のように突き刺さる無窮の剣。

そして。

赤い外套を着た男が、こちらを向いて立っていた。

「……………随分とボロボロなようだが、平気なのか？」

言われて気づいた。そうだ、俺は怪我をしていた筈なのに……………傷が、治っていた。

服は血だらけのままだったが。

「……………安心するな。見たところ塞がっているだけのようだ。此処はあらゆる剣を構成する要素で満ちている。それがお前の傷を塞いだのだろっ」

(……………?)

「なに言ってるんだ？ それじゃあ俺がまるで剣みたいじゃないか」

そう言つとその男は、面白いものでも見るような目で言った。

「クツ……………」『衛宮士郎』の口からそんな言葉が出るとはな。どうやらお前はまだ、自分が何なのか理解していないようだ」

「は？」

「まあいい、こちらの用件をさっさと済ませてしまおう。お前はともかく女性を待たせておくわけにはいかないのね。それにハッキリ言っ、お前に此処に居られるのは迷惑だ。

さて、ついて来れるか？」

何を言っ、と口を開こうとして

コトバが、紡がれた。

y s w o r d .

I a m t h e b o n e o f m

「 体は剣で出来ている」

黒い太陽。ソコから溢れる黒い泥。呪いの炎。

周りには人 いや、ヒトだったモノ。

家族も友人も知人も他人も生きながら焼けていく。

家も公園も学校も思い出の場所も、少年の生まれ育った場所が燃え

ていく。

大地も空も空気をも焦がし、それでも炎は命を喰らう。

まだ喰い足りぬと炎は勢いを増していく。

助けを乞う声を振り切って、必死に自分の命を守った少年の心も。

灰になって燃え尽きた。

そして。

『……………ああ、よかった』

助けられ。救われ。そして……………
呪あこがれたわれた。

S t e e l i s m y b o d y , a n d f i r e i s m
y b l o o d .

「血潮は鉄で、心は硝子」

『 うん。初めに言っておくとね、僕は魔法使いなのだ』

『 いいかい士郎。君の投影は、絶対誰にも見せちゃいけないよ』

『何を言ってるんだ士郎！ 男はカワイイ女の子のために頑張るものなんだ！』

……あれ？ 大河ちゃん？ 何をそんなに怒ってるんだい？』

『……………士郎、女の子を怒らせちゃいけないよ。後で損するからね』

『僕は、正義の味方になりたかった』

『……………ああ 安心した』

I have created over a thousand blades .

「幾たびの戦場を越えて不敗」

『おはようございます、先輩。もう藤村先生来ちゃいますよ？』

『しーろ うー！朝あさごはん つー！…！』

『おっす衛宮！ で、どうだ？ そろそろ弓が恋しくなったか？』

『いつもスマンな衛宮。ところで…実はまた、生徒会室のエアコンが……………』

『よう衛宮。お人好しのお前に頼みたいことがあるんだけど別にイヤよな?』

Unknown to Death,

「ただの一度も敗走はなく、

『問おう、貴方が私のマスターか』

『衛宮くん。どういふことがキツチリ説明してもらつたよ?』

『喜べ少年。君の願いはようやく叶う』

『こんばんわ、お兄ちゃん』

『聖杯は欲しい。けれど、シロウは殺せない』

『判らぬか、下郎。そのような物より、私はシロウが欲しいと言つたのだ』

『やっと気づいた。シロウは、私の鞘だったのですね』

『シロウ　貴方を、愛している』

“ 契約しよう。我が死後を預ける。その報酬を、ここに貰い受けたい”

N o r k n o w n t o L i f e .
ただの一度も理解されない」

『殺して、殺して、殺し尽くした。己の理想を貫くために多くを殺し、無関係な人間の命なぞどうでもよくなるぐらい殺して、殺した数の数千倍もの人間を救った』

『そのうちにそれにも慣れてきてね、理想を守るために理想に反し続けた。』

自分が助けようとした人間しか救わず、敵対した者は速やかに皆殺しにした』

『犠牲になる“誰か”を容認する事で、かつての理想を守り続けた』

みんなを助ける、正義の味方になる

だって仕方がないだろう。何を救おうと、救われない人間と
いうモノは出てきてしまう

『そんなことを何度繰り返したか……分からないんだセイバー』

『 そら。そんな男は、今のうちに死んだ方が世の為と思わな
いか?』

Have withstood pain to create
many weapons .

「彼の者は常に独り、剣の丘で勝利に酔う」

『……………じゃない』

『……………なんかじゃ、ない……………!』

『……………間違い、なんかじゃない……………!』

『 決して、間違いなんかじゃないんだから……………!』

『俺の勝ちだ……アーチャー』

『 ああ。そして、私の敗北だ』

“ それでも 俺は、間違えてなどいなかった ”

『私を頼む。知っての通り頼りないやつだからな 君が、支えてやってくれ』

『うん、わかってる。わたし、頑張るから。アンタみたいに捻くれたヤツにならないように頑張るから。きつと、あいつが自分を好きになれるように頑張るから……！

だからアンタも 』

『大丈夫だよ遠坂。答えは得た。俺も、これから頑張っていくから』

Yet, those hands will never hold anything.
「故に、生涯に意味はなく」

あの日俺を見送ってくれた君の笑顔は

あの日とは違うものである今の俺の中にも。

たしかに残っているはずなんだ。

だからいつか俺よ。

その笑顔がもつ意味を思い出して欲しい。

S o a s I p r a y , " u n l i m i t e d
b l a d e W o r k s " .

「その体は、きつと剣で出来ていた。」

脳が沸騰する。

鮮明な映像が、音が、匂いが、感触が記憶が経験が”魂に”流れ込む。刻み込まれる。

脳が焼き切れる。

膨大な情報量に脳が悲鳴をあげる。

吐き気がする。

衛宮士郎の殺戮に。英霊エミヤの殺戮に。

そして理解した。

彼は、俺なのだ。

「よく耐えた。これでお前には戦うチカラが備わった……元居た場所へ帰るがいい。………まったく、姉弟揃って”英霊の座”に迷い込むなど誰が予想出来るのか。少なくとも私に非はないな」

薄れゆく意識の中

近衛士郎は世界に帰る。

・3話 英国編 〈剣の丘〉（後書き）

近衛士郎が去った後、剣の丘に残されたのは。

赤い外套を羽織った、白髪に浅黒い肌の男、と雪のように真っ白な肌と、輝く銀色の髪。血のように紅い瞳を持つ少女が男の背に隠れて立っていた。

「ありがとうシロウ」

「……私は君の弟とは別人だと何度言ったらわかるのかね？」

「もう、ホントにシロウは素直じゃないんだから！こういうときは素直にお礼を受け取ればいいのよっ」

少女は声を荒げるが、その声色と表情は楽しげだ。対する男は無言で苦笑している。この場所で既に何度も繰り返された遣り取りだ。

この少女には勝てないと、彼は既に諦めていた。

この剣の丘に雪の少女が舞い降りたとき、彼は我が目を疑った。彼女から話を聞いて、彼はさらに混乱した。

だがいくら考えても詮無いこと、彼は諦めて現実を受け入れることにした。

剣しかない孤独な世界に、住人がひとり増えた。

どれくらいの時間が経ったか、ある時。血だらけの少年が迷い込ん

だ。

その少年は少女の弟であり、男と元を同じとする存在だった。狼狽える少女を制し、男は少年に近寄る。

生きている。何故か傷は塞がっている”だけ”の状態だった。そして少年は何事か呟いた。

「……………護るんだ、俺が……………。　　約束、したんだ、か……………
……………」

少年は誰かの為に戦い、傷ついたらしい。

平行世界だろうが異世界だろうが、「衛宮士郎」は人助けをする性分らしい。

男はそう、思った。

「士郎だったら、小っちゃい頃と全然変わってないのね。ケガしちゃう
いけませんって、何度、言ったら、判るのかしら……………」

少女が泣きそうな声で呟く。

「どうせこれからも、危ないコトを続けるんでしょ……………」

少女は男に顔を向ける。

彼女が言いたいことは、目を見るだけで伝わってきた。

“ならばせめて。弟が死ぬことのないように。彼に……………「戦
う力を」。”

「……………これで良かったのかね？」

青年は己の記憶を通して少年に全てを与えた。

魔術、戦術、戦闘技術、戦闘経験。そして心象世界の剣たち^{シナイ}。

要らぬ重荷も背負わせてしまったのではないかと男は思考する。

「いいの。お姉ちゃんの言うことをきかない弟には、それくらいの罰^{バチ}が丁度いいわ」

そう言って少女は笑う。

その表情は自分の知り合いにそっくりだと、男も密かに笑う。

其処は剣の丘。とある英霊の心象世界。

いつまで私／彼女が英霊^{こゝろ}の座に居られるのかわからないけれど。

別れ^{その}のときまで、一緒に／共にいよう。

衛宮イリヤスフィールと英霊エミヤ。少年を見守る者が、ここに一人。

- 2話 英国編 降り頻るは紅蓮の鉄鎧（前書き）

……そろそろ息切れしてきました。

予約投稿機能を使っけていま投稿設定をしているのですが……

設定話1、2、3、- 5話、- 4話、- 3話、- 2話……流石に
気に投稿は疲れます。

さてと愚痴はここまでにして……それではいきましょう。

「- 2話 降り頻るは紅蓮の鉄鎧ブラッド・スノウ」、どうぞ！
……ハア。

- 2話 英国編 降り頼るは紅蓮の鉄鎧

「失礼する」

「!? こ、校長! それにそちらのお方は……?」

ドナは困惑しながら2人を招き入れる。ネヴィル夫妻の家の玄関を乱暴に叩いたのは校長とアドルフ。そのまま2人は上がり込んで家主と一匹の猫の前にやってくる。

「お久しぶりです校長。ディアナはこちらです。それで、何が起きているのですか?」

「話が早いなバートランド。詳しい話は彼がしてくれる」

校長の視線の先で、アドルフがディアナの前に屈みこんでいた。

「何があつたディアナ!」

《すまんアドルフ……時間稼ぎも連絡も出来なかった……お前の所まで行くことも出来ず、ここで力尽きたのだ……。まさか、あの小僧の家だとは》

「何があつたと訊いているのだ!!」

アドルフが声を張り上げる。それを見て、躊躇うように一度彼から目を逸らして　　ディアナは再び銀の瞳をアドルフに向けた。

《 奴だ。 ” コーンフィールド ” だ 》

その名を聞いた瞬間、アドルフと校長の顔色が変わったのを、ドナは見逃さなかった。

イメージしろ。

現実で敵わない相手ならば想像の中で勝て。
自身が勝てないのなら勝てるものを幻想しろ。

二十七の撃鉄よ、上がれ。魔力よ奔れ。

このポロポロの身体にもう一度、立ち上がる力を。寄越せ。

「 トレース・オン
同調開始 」

『トレース・オン
同調開始』

「……………む？」

気の所為か、後ろから声が聞こえた。いま吸血鬼 彼の後ろにいるのは死にかけの少年1人。到底そんな声を出す余力はないはず。訝しみながらも彼が後ろを振り返ると

直後。彼はその行為を後悔した。

全身に突き刺さる 氷のように、冷たい、殺気。

吸血鬼は、無限の剣に貫かれる己の姿を幻視した。

「な」

痛い。痛い。痛い。痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い

痛、い。

激痛を伴う威圧感プレッシャー。まるで体を、氷のように冷たい剣が貫くような
イロージョン
幻覚。

そう幻覚だ。幻覚だと、解っているのに。

目イロージョンの前に立つ少年から放たれるそれに、吸血鬼は抗う術を知らな
つた。

身体状況。 損傷が著しいが、今は全て塞がっている。

残存魔力。 ほぼ満タン。

戦闘意欲 充分。

結論、” 戦闘可能”。

だが体は相変わらずボロボロだ。…1回。あと1回動いただけで、
このボロ雑巾のような体は機能を停止するだろう。

……だが、それがどうした？

それが眼前の敵を見逃す理由にはなり得ない。

投影開始。

集中しろ。イメージしろ。己の裡の設計図を探し出せ。
潜る。潜る。己の心へ、心象世界へ。敵を滅ぼしうる幻想を検索する。

剣の丘の中心から

その剣を引き抜いた。

「トレース・オフ投影、完了」

紺青の装飾踊る黄金の西洋剣が、士郎の手中に顕れる。

「殺るだけ殺って逃げようなんて…道理が通ると思うなよ……………」

一步、士郎が踏み出す。

「……………ッ!!」

剣の放つ輝きが、纏う魔力の奔流が吸血鬼を恐怖させる。

(何だ……………何だあの剣は!! 何であんな代物をあんな子供が持っている!?)

更に一步、士郎が踏み出す。一步、吸血鬼が後退る。

(マズイ……………実にマズイぞ……………ここは予定通り 一刻も早くこの場から離れ)

「 逃げるのか? 」

その声が、黒衣の男を縛りつけた。

(……………逃げる?)

……………冗談ではない。

私は吸血鬼、夜を支配する怪物!!

それが、何故、私が何故、何故、何故、何故あのような小僧から逃げねばならぬのだ!!

吸血鬼が子供に負ける道理など何処にもない!!

更に一步、士郎が踏み出す。

吸血鬼も一步、前に出た。

「……………」
「……………」

正面から相對して對峙する。互いの眼を見て睨みあつ。

2人の距離は6m。

呪文の詠唱が終わる前に斬り伏せれば士郎が勝つ。
斬りつけられる前に魔法を放てば吸血鬼が勝つ。

撃たれる前に斬るか。斬られる前に撃つか。

() ……………。()

果てのない静寂は、一瞬で破られた。

黒衣の男が腕を前に突き出して。

「ヴァロ・ス・ヴァ・ロツサ・ハイレディン！闇の精霊19柱・集
い來たりて敵を射て！」

『サキタ・マキカ魔法の射手』・セリエス連弾・オプスクイリー闇の19矢 ……！！』

闇の19矢が獲物へ向けて収束し加速する。
士郎は微動だにしない。

(やはり傷が障ったか

この戦い、私の勝利

！！)

士郎の口の端が上がった。

「止まったな」

(！！)

己の攻撃を確実に当てるには、敵の動きが止まっている時を狙えばいい。

敵の動きが止まる時。

それは敵が攻撃する直前。攻撃の直後。そして敵が…「勝利を確信した時」。

士郎の体を矢が貫くまであと数瞬、剣を持った右手が動く。

黄金の剣が、担い手の意志に応えて輝きを強くする。

剣を両手で力強く握り締め、闇を払うべく振り上げる

！

「カリバーン 勝利すべき黄金の剣」

！！！！」

黄金の斬撃が漆黒の矢を呑み込んで蒸発させる。その煌きは勢いを増し続け

「ぬぅっ
ぬあああああああああああああああああ
あああああ!」

魔法障壁ごと、吸血鬼を斬り裂いた。

『勝利すべき黄金の剣』。

担い手が騎士道を往く限り、あらゆる勝利へ追い風を吹かせる王の
剣。

そしてこの剣が本来の力を発揮するのは、伝承が残るここ英国。フリテン

伝説が体現されるのなら。

伝説が吸血鬼に 英雄が怪物に敗けることなど有り得ない。

この結果は当然のものであり、戦う前から決まっていたこと。

幾たびの戦場を越えて不敗。

I have created over a thousand
blades.

敗ける道理は、何処にも無い。

「ぐあつ……ああ……グアああアアアアアアアアアアアッ！！！」

刻まれた一条の傷痕、露になった血肉からは鮮血が吹き出している。士郎が未熟だった故か。傷ついた身体では剣を使いこなせなかったのか。

怪物はまだ死んでいなかった。

だが士郎の右腕も、ズタズタに裂かれたように傷ついていた。服は紅く染まっている。

しかしそれは大した問題ではない。今、体中の傷が開いたことに比べれば。

確かなのは　吸血鬼を、殺しきれなかったという事実。
敗けはしなかったが、勝つことも出来なかった。

「……………ぐ……………ッ！！！」

ドサッ……………。

音をたててその場に崩れ落ちる。カリバーンの斬撃、その衝撃波で壁が吹き飛び、冷たい外気が部屋の中に入ってくる。冬の風が容赦なく士郎の身体に吹きつけた。

「……………お久しぶりです。アドルフ・サクストン」

(……………?)

霞がかってゆく意識の中、そんな声が耳に入った。

『遅かったか……………！ 貴様……………エレナに手を出したばかりか……………シロウまで』

『……………「シロウ」。そうか、その少年はシロウというのか』

『……………そんな事を気にしている余裕があるとは意外だな。貴様はここで死ぬのだぞ？』

『無理ですよ、貴方では。私を殺せるのは……………私を滅ぼす権利があるのはその少年だけだ』

『……………どういう意味だ』

『貴方に話す必要はない。心して聞けシロウ！まだ意識があるハズだ！』

私が憎ければ、いつか魔法世界まで追って来るがいい。ムントウス・マギクス

我が名は吸血鬼ポールドウィン・コーンフィールド！

いつか来るその時までこの傷を癒し、君との殺し合いに備えよう……………！』

『私が憎ければ追って来なさい……………魔法世界まで』

壁の向こうで降り頻る、白い雪を視界に収めて。 士郎の意識は暗転した。

「やあ、起きたかい士郎」

俺のすぐ隣にバートおじさんが座っている。ここは……病室？

「シロウ！ 目が覚めたのね!!」

「…………… 士郎、状況がわかるかい？」

!!

「おじさん!! エレナ…エレナさんはっ……………!？」

勢いよく上半身を起こす。何故か傷は痛まなかった。魔法で治癒されているのだろうか？

だが今はそんなことどうでもいい。

彼女は、生きているのか。

「ああ。彼女なら昨日まで隣の病室で寝ていたよ。君は2日も眠っ

ていたけどね」

昨日まで。

「……………それじゃあ……………！」

「死んだよ」

え？

「ッあなた！！」

「遅かれ早かれ知るんだ。だったら早い方がいい」

何て言った？

誰が、どうなったって？

理解できない。何が、ここは、あの時、何処で、誰が

「でも……………だからって……………！！ ああ、ごめんなさいシロウ……………！！」

ドナおばさんの胸に抱き締められる。

でも俺の耳にはもう、何も入ってこなかった。

「本当に……ありがとうございました」

やめろ。

「お嬢様はお身体が弱く、友人らしい友人が1人もおりませんでした。ですが、あなたが屋敷を訪ねるようになってからは……それはもう……生き生きとしておられて……」

やめてくれ。

「使用人一同からのお礼とともに、僭越ながら……お嬢様の遺言をお伝えしようと参りました」

俺の所為だ。

「ありがとう、と」

俺の所為なんだよ。

あのとき。吸血鬼^{あいつ}は戦う気なんてなかった。あの場から去ろうとしていたんだ。それを勝手に引き止めて、俺は無謀にも戦った。頭に血が上っていたんだ。

そんな時間があれば、エレナさんを医者^の所にでも運べば良かったのに。

一度倒れて、起き上がった後でもそれは出来た。エレナさんを救えたかもしれない、二度のチャンスを。

俺は、ドブに捨てたんだ。

『私が憎ければ追って来なさい……………魔法世界まで』

「……………ボールドウィン……………コーンフィールド……………」

その日から。彼の生きる目的は 復讐というベクトルへ向かうことになる。

僅か2年半後、その目的を果たすまで。

- 2話 英国編 降り頻るは紅蓮の鉄鎧（後書き）

（補足・解説）

：黄金の斬撃が漆黒の矢を呑み込んで蒸発させる。

はたして公式のカリバーンは斬撃を飛ばすことができるのか！？
わかりません！！

疑問点やお気づきの矛盾点がありましたらバンバン感想にお寄せください。

でも「小説家になろう！」の規則に則った文章でお願いします！

ただの誹謗・中傷みたいにもとれる感想が以前あったんですよチクシヨー！！

その時は10数秒ほど「もう更新やめよっかな……」と本気で考えちゃったくらいシヨックでしたね……。

それでは次回！

・1話 麻帆良編 そこは運命が始まる場所（前書き）

ぶっちゃけ今回のお話は、改訂前の「第五章 麻帆良祭編」に載せた

「番外話 過去編14 麻帆良過去編」そのまんまです。

ですが細部の修正と僅かな加筆がありますので、既読の方がもう一度読んでも（まあまあ）楽しめると思います。

それでは「・1話 そこは運命が始まる場所」、どうぞ！！

- 1話 麻帆良編 そこは運命が始まる場所

1998年、12月25日。

『私が憎ければいつか魔法世界まで来るがいい。』

ムントウス・マギクス

私は吸血鬼ワールドウィン・コーンフィールド!!

いつか来るその時までこの傷を癒し、君との殺し合いに備えよ

う!』

『私が憎ければ追って来なさい……………魔法世界まで』

2001年、8月末日。

「……………フ、ハ　　ハハハハハハハハハハハハハハハハツ!!!
見事、見事だコノエシロウ!　まさかあの少年がここまで成長して来るとは!」

聖剣と摂理の鍵で地面に縫い付けられ、脱出も再生も出来ない吸血鬼はただ叫ぶ。

後はとどめを刺すだけだ。

数日後

群青色の海が、港が見える。港から続くなだらかな斜面に沿って建物が建てられており、ヨーロッパの港町のように見える。だが実際は違う。ここは「夢の国」「魔法の国」「新世界」と呼ばれる場所。魔法が満ちた世界、「魔法世界」。

ムントゥス・マギクス

その町の小高い広場、塀の上。そこに腰を下ろして港を眺める赤髪の少年がいた。

いや、彼は何も見てはいない。その目に何も映していない。心ここに在らず、彼はただ虚空に視線を送っていた。

「まったく、いつまで腑抜けてんだ teme は」

広場の入口から大男が歩いてきた。

長身で大柄、筋肉質な褐色の体を持つ金髪の男。頭に赤色のバンダナを巻いている。

その正体は18年前の大戦で魔法世界を救った英雄「紅き翼」の1人。

アラルブラ

最強の傭兵剣士、「千の刃の男」ジャック・ラカン。

今は 広場で黄昏れている少年の師をしている。

「……………」

しかし少年は反応を返さない。

師は困ったように頭を掻きながら、しかし鋭い目で弟子を見やる。

「っハア~~~~、重傷だなこりゃ。…………お前が言ったんだぜ、自分^{めえ}が殺るつてな」

その問いで少年の瞳に、僅かに感情の光が灯る。

少年は復讐する為にこの世界へ来た。親友を殺した男を殺す為に。そして
その目的は果たされた。

「……………わかってますよ。俺が決めた事です。その為に魔法世^こ界に来たんですから」

だがそれだけ。その問いに返答すれば少年は再び生気を失う。
その様子を見てラカン^こは懐に手を入れて、用意した物を弟子に渡す。

「オラ」

「？」

少年は何か書かれた紙を手渡される。

「明日の午前9：34分……メガロメセンブリアのゲート通行許可証……………」

「確かイギリスの……ウェールズだったか？そこに通じてるのは

メガロのゲートだったろ、確か」
「師匠？」

「まったく世話の焼ける弟子だぜオメーは。師匠の手を煩わせんじやねえよ。」

今のテメエに必要なのは休養だ。生まれた世界よこしまに帰って、魔法世界まじでの

事は一旦忘れろ。気分転換ってやつだ。

チケット料金の利子は付けねえ。士郎 いつか必ず返しに
来い」

そうして少年は新世界を後にして、旧世界へと帰還した。

マイナス
- 1話 麻帆良編 そこは運命が始まる場所

弟子がゲートを通ったのを確認して、ラカンはゲートポートから出て行った。

「これで満足か？」

ラカンがそう言うと、彼の後ろにスーツ姿の金髪美女が姿を現す。

「ドネット」

本国　メガロメセンブリアの魔法使いであり、メルディアナ魔法学校校長の「魔法使いミニストラ・マギの従者」。ドネット・マクギネス。

「それは貴方が決めることでしょうか？　私は貴方の相談に乗って意見を述べたまでよ。」

でも意外ね。貴方なら力づくでなんとかかしてしまいそうだけど」

ドネットは腕を組んだままラカンに話しかける。

「ああ。オレ様なら1発ブン殴って喝を入れてやるところなんだが……今のアイツじゃそれだけでおっ死んじまいそんな気がしてよ」

「私も彼がこんな所で抜け殻になるのは忍びないわ。近衛詠春の養子すこでジャック・ラカンの弟子……無限の剣インフィニトゥス・クラティウスの近衛士郎。彼は間違いなく大成する」

「あいつはメガロにや付かねーぞ？」

「勘違いしないで。私はマスターの意向に従っているだけよ」

2人は不敵に睨み合う。先に視線を外したのはドネットだった。

「そうそう……彼の不法入国記録の末梢と正式な入国記録の偽造、
出国申請、チケットの手配、とても大変だったわ。貸し1つにして
おいてあげる」

目を瞑ってそう言うと、ラカンはニヤツと笑って応えた。

「何だそんなことかよ。だったら今夜にでも返すぜ？」

「結構よ、貴方のお酒好きと女好きは知ってる。飲みにも行って
潰されちゃ堪らないわ。それじゃあまた会いましょう、千の刃」

そう言い残して彼女は颯爽とその場を去って行った。

（ さて……あの子の心は息を吹き返すかしら）

赤い髪の少年を思って、ドネットは魔力充ちる空を見上げた。

・ ・ ・ ・ ・

ウェールズからは逃げるように去った。

誰にも気づかれぬように、会わぬように、静かに。

ゲートポートで換金しておいたポンドでチケットを買い飛行機に乗り込む。そして。

「……………着いた」

士郎は久しぶりに 5年ぶりに麻帆良を訪れた。

「……………抜かった」

士郎が麻帆良に着いた頃にはすっかり夜も更けていた。綺麗な満月が夜空で光る。

そして忘れてはならないのは、麻帆良は学園都市……………「学校」ということである。

学校関係者用以外の宿泊施設などない。電車は士郎が乗って来たのが終電だ。

「しょうがない、今日は野宿か」

瞬動で走れば夜中のうちに近隣の都市に行くこともできるが、それは何となく億劫で野宿を選択する。魔法世界ではしょっちゅうだったので苦ではない。だが都市部で野宿しては怪しまれる。浮浪者扱いは勘弁なので森で野宿することにした。

「まったく、気分だけで旅行なんてするモンじゃないな」

何処に行こうか考えた。そして土郎が最初に思いついた場所は、何故か実家の京都ではなく……ここ麻帆良だった。

森の方へ向かうまで、ついでに夜の学園都市を観察しながら歩いていった。

《ぐあああああああああ！！》

鬼が1体、また1体と、その白刃に斬り伏せられて還っていく。

「はっ　　、は……………っ！」

《ガキのくせにいい腕しとんのう》

《しっかし娘つ子1人相手にこんな大人数なんて気分悪いわ》

《仕方あらへんやろ、それが命令なんやさかい》

《嬢ちゃんホンマ堪忍な。しかしな、嬢ちゃんが素直にココ通してくれるんやったらワシらも手エ出さんで済むんやで?》

「くッ……………!!」

鬼の軍勢を遮るように立ち塞がる、たった1人の中学生。

愛刀・夕凧を構えて息を切らす彼女の名は、神鳴流剣士

桜咲

刹那。

麻帆良学園の正体はメセンブリーナ連合傘下、関東魔法協会。

その組織に恨みを持つ魔法使いや陰陽術師がこの街を襲おうとする。

(今夜はツイてないな……………おそらく偶然だろうが…今日はこのエリアに襲撃が集中している……………!!)

ここは麻帆良の端と接する森。その中の開けた場所で、彼女は密かに冷や汗を流していた。

《氣イ抜いとる場合とちゃうで!》

「……………!!」

数体の鬼が刹那に迫り、先頭の1体が大剣を振り下ろす
!

ボツ!!

《……………あ?》

身に起こった現実には、鬼が呆けた声を出す。
振り下ろした腕が、何かに挟られて千切れ飛んだ。

《なっ なんやコラアツ!?!》

何が起こったか理解できないその鬼は絶叫し、刹那と他の鬼達は無意識に動きを停めた。
瞬間。片腕を失った鬼の視界に

ズドオンン!!

突如乱入した人物に、全員が呆気にとられた。
赤い髪に黒いコート。黒塗りの弓を持つ男。一体彼は何者か。

先の轟音。彼は自分より遥かに大きな鬼の頭を鷲掴みにして、そのまま力任せに地面に叩きつけたのだ。鬼は今、ピクリとも動かない。

「こいつらって、全員敵？」

「……………え」

(……………あれ、この人……………?)

刹那はこの人物に、妙な既視感を抱いた。

「……………どうなんだ？」

「え？ あ、はい。一応全て、排除すべき敵ですが……………」

(つて、ハッ!? 私はこの得体の知れない男に何を無防備に……………!!)

「つてことは、だ。ここにいる化け物全員、狩り尽くしても構わな
いんだな？」

「……………は？」

刹那はただ、呆然とするしかなかった。

《 ナメるんやないでええええ!! 》

先ほどやられた鬼が起き上がって 残った腕で拳を握って振りかぶった。

刹那が思わず声をあげる。

「危な……っ！！」

結果を言えば、その心配は杞憂だった。

《……な………っ》

鬼の拳は、男の弓に阻まれた。弓の持つナックルガードが鬼の拳を防ぎきる。

そして男はそのとき既に、受けとめた体勢のまま矢を番えて敵の肩間に狙いを定めた。

だが「それ」を矢だと思った者は、この場でその男以外にいなかったらう。

彼が弓に番えていたモノはどう見ても ” 剣 ” だったのだから。

ドッ！

放たれた剣は当然のように鬼の頭蓋を貫いた。

「弓道と違って弓術には接近戦用の技がある。それと同じだ
覚えておけ。」

真の弓兵は、接近戦でも負けはしない」

男が弓を持っていたから、弓兵だと思ったから 鬼は無謀にも
殴りかかった。

その鬼も刹那も、勘違いしていたのだ。「弓兵だから、接近戦には
弱い」と。

ただ彼は 弓兵でもないのだが。

「アテアット
投影、開始」

男の左手に、身の丈を越えるほどの、巖のような鉛色の斧剣が現れ
る。

今まで様子を見ていた他の鬼達に、男は右手で手招きして言い放つ。

「 来いよ」

《…は。よう言った兄ちゃん》

《ワシらをそこらへんの奴等と一緒にするんやないで？》

「 投影、装填」

《オオオオオオオオオオオオオオオ》

ッ！！！！！！》

「
是、射殺す百頭」
ナインライフズブレイドワークス

命を奪うことで君の心は縛られて、殺すことで君のその手は血濡られて、殺した罪で君の魂は穢れるだろう!!

あれ以来。自分の手が赤黒く見える。どす黒い血の色に。
あれ以来。鏡で自分を見るたびに、昏い昏い影が見える。殺した男の嗤う姿が。

君は決して

私の呪縛から逃れられない

だから怖くて仕方なかった。力を、魔法を、魔術を使うのが。そんな力が俺の裡にあるということが。

“そもそも俺は

何で、魔法使いになりたかったんだっけ

？”

何処に向かえばいいのか分からなくなって。師匠に呆れられて。旧世界に帰って来て。

麻帆良に戻って、妙な気配がやって来て、厄介事だとわかっていても探さずにはいられなくて、見つけてみれば大量の化け物と、それに立ち向かう女の子の姿。

だというのに。ただ怖くて。

目の前で女の子が危ない目に遭っているというのに、助けることさえできやしない。

怖い。力を使うのが怖い。

呆然と立ち尽くしていた時、ふとその娘の顔が見えた。

「
せ
」

せつな。刹那。桜咲刹那。

瞬時に、無意識に　　過去の記憶がフラッシュバックした。

義妹の木乃香が。幼馴染みの刹那が川で溺れた時の事。

実の肉親を失って。でも俺は独りぼっちで生きていて。2人が川に流されて、姿が小さくなっていくのを見て

気がつけば、士郎の手には弓と剣やが握られていた。

「……………！！」

怯えていたのは心だけ。迷っていたのは心だけ。身体はたとえ1度だって答えを見失っていなかった。

『例えこの手が血に濡れようが、この魂たまが穢れようが。その果てに、大切な誰かを。』

大事な何かを守れるならば

『

……………戦える。これからも頑張れる。

士郎は弓に剣やを番えた。

(……………すごい)

刹那の見つめる先には、何もなかった。何も無かったのだ。辺り一面を覆う程の数の鬼。それらの姿は何処にもなく、挟られた地面のみが残っている。

その、大地を削った男が　　刹那の顔を覗き込んでいた。

「っ……！」

一足跳びで数メートル後退し、男に向かって剣呑な声色で話しかける。

「……………何故助けた。何者だ。貴様のような人間が学園にいらるとは聞いていない」

出来るだけ鋭い”気”を込めて睨みつけるが、男は呑気な顔で頭を掻いて呟いた。

「ああ、やっぱりそうだ」

「……………？ 質問に　　」

「デカくなつたな。刹那」

男はそう言って破顔した。

「え……………」

（も…もしかして）

赤い髪。そして目の前の、この人懐っこい笑みは。

「……………し、るつ?」

8年ぶりの再会だった。

「ははっ、当たり。やっぱり気づいてなかったんだなー俺はすぐ分かったのに。」

それにしても、随分可愛くなった……………いや、美人になった」

（……………へ!?!）

「い、いやそんなウチなんか　そ、それに土郎かて背が伸びて格好良くなって……………ってウチなに言うてるん!?!」

刹那は髪を振り乱し、顔を真っ赤にして混乱した。

『其処の男、貴様　何者だ?』

「「!?!」」

木々の陰から誰かの声が聞こえた。

(誰だ? 声が異様に高い。女 いや子供?)

「その声は エヴァンジェリンさんっ!?!」

闇から現れたのは。

月光を受けて輝く金の髪。その身に纏う漆黒の外套。

その容姿は 10歳程度の幼い少女だった。

「……………で 刹那、いつまでイチャついているつもりだ?」

彼女はからかう様に刹那をチラッと半目で見た。

「いつ…!?!? わ、私は別にイ、イチャついてなど……………!?!」

「『ああ、すっかり美人になった』 『アナタもとても格好良くなつて……………』

ああ吐き気がする。これのどこがイチャついてないというんだ?」

「うっ!?!? うっ……………」

全く反論できず、刹那は耳まで真っ赤にしながら涙目で士郎を睨んだ。

(いや、なんでさっ?)

「と、そんな事はどうでもいい。その男。貴様一体何者だ?」

エヴァンジェリンは殺気を込めて士郎を睨んだ。

エヴァンジェリンは森に、自分の近くに大量の”気配”がするのに気づいていた。

警備の魔法先生や魔法生徒が出張るだろうと静観していたが、何時まで経っても気配は消えない。

今日が満月　　僅かに魔力が回復する日　　ということもあり、
業を煮やして自ら出向いてみれば。

圧倒的な力で鬼を屠る男。彼女はその人物が久しく見ない”本物”だと直感した。

(いや……それは色目で見過ぎか。だがいずれ……アイツは必ず
”本物”に届く)

だが男が何者かだけは確認しなければならない。
機を窺って、エヴァンジェリンは木の陰から声を発した。

「その男。貴様一体何者だ？」

エヴァンジェリンは殺気を込めて士郎を睨んだ。
だが士郎は、そんなエヴァを食い入る様に見つめていた。

士郎が生まれて初めて見た、最初の魔法使い。
彼女に瓜二つ いや、間違いなく彼女本人だった。

(馬鹿な……アレはもう何年前だと……！？ 何で、あの時の
まま)

ほんの数日前、士郎が殺した男が答えを持っていた

”吸

血鬼”。

(吸血鬼で、少女……………子供……………!?)

ハイデライトウオーカー
真祖の吸血鬼、『童姿の闇の魔王』。

「……………『ダーク闇の福音』……………!?’」

「ほう? よく気づいたな。いや誰かにでも聞いたか? そう、私こそ悪の大魔法使い『ダーク・エヴァンジェル闇の福音』!! ふふん、この偉大さが解るか?’」

ド……………ザッ!

「!?’」

エヴァが誇らしげに名乗った直後、士郎は地面に膝をついて土下座した。

「お願いします。俺を、貴女の従者にしてください」

この後 紆余曲折を経て、士郎は「従者候補その1」としてエヴァの家に居候することになる。

1996年12月24日。 土郎11歳

金系の髪を靡かせて、冬の街に降り立つ小さな魔法使い。
彼女が何か呟く毎に、光が奔って化け物が凍りつく。

『フン、他愛のない。数だけの雑魚が私の手間を取らせるな』

封印されているとはいえ、アイツは圧倒的だった。

「俺は、弱い自分が嫌いだった。大切な誰かを守れる力が欲しかった」

「だから。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの強さに、俺は憧れたんだ。

いつか彼女のように。いつか彼女になりたいたいと 並び立てるような存在

これが後に語られる、士郎が魔法使いを目指した理由だった。

衛宮士郎が麻帆良に帰還し、桜咲刹那と再会し、エヴァンジェリンと出会う。

現在、2001年9月。

運命が始まるその時まで

あと17ヶ月。

・1話 麻帆良編 そこは運命が始まる場所（後書き）

これで過去編シリーズは終了です。

しかし、過去編として小説…ストーリーが作れそうなエピソードがあと2つほどあるんですよねえ……。

1) 魔法世界で士郎がとある事件に首を突っ込む話、アリアドネー過去編

2) エヴァが士郎を「従者候補その1」として引き取って(？)から、エヴァが士郎にデレるまでの話、麻帆良過去編？

作るのが面倒だったので書かなかったんですけど、いつか書いてみたいなあ。

疑問点、お気づきの矛盾点がありましたら感想までお寄せください。

それでは次回！

第0話 プロローグ(前書き)

全てはここから始まった！

ネギま！剣製の凱歌・新編

「第0話 プロローグ」。

どろぞろー！

第0話 プロローグ

鉄を鍛つ、音が聞こえる。

其処は地獄。または煉獄。或いは魂を灼く錬鉄場。

瓦礫の隙間から覗く外の世界。
そこには、空を焼き天を焦がす、真つ赤な炎が燃えていた。

少年の視界には瓦礫と炎以外なものも見えない。何も、わからない。

なんで？　なんで燃えてるんだ？　なにがあったんだ？
ここはどこだ？　なんでボクはこんなところに？
痛い。痛い。たすけて、だれか
……

瓦礫の下敷きになった身体が苦痛を訴える。
炎の熱が徐々に迫り、少年の恐怖を増幅させる。このまま炎が勢い
を増せば、自分も
燃えてしまうのではないか

「……………大丈夫だよ、士郎……………」

その声に、8歳の少年　衛宮士郎は一瞬驚き、そして安堵する。
声の主は士郎の最愛の姉、衛宮イリヤスフィールの声だったから。

「大丈夫、わたしがちゃんと傍に居るから……………」

その声で、士郎は自分の左手に伝わる温もりに気づいた。
姿は見えない。だが士郎の左手は姉の手と繋がっていた。
おそらく瓦礫の向こうにいるのだろう。
イリヤはずっと、士郎の手を繋いでいてくれた。

「……うん、おねえちゃん……」

姉の言葉で緊張が解けたのか、少年はそのまま意識を手放した。

結論からいえば、その惨事の原因はテロだった。

衛宮一家は家族でアメリカを訪れていた。

士郎は一家がどんな理由で、何処を目的地とした来訪だったのかは知らない。まだ幼い士郎にそんな事は関係なく、ただただ異国の地への期待に胸を膨らませていた。

そして　　地獄は生まれた。

士郎が意識を失ってから数時間後……。

(大丈夫、……大丈夫……。助けが来る。待ってればきつと来るはず……)

イリヤは自分にそう言い聞かせ、士郎の手を強く握る。

士郎の声はずいぶん前から聞こえないが、握る手の温かさから生きていると予想する。

バキッ……

「えっ………?」

パラパラと、上から砂が降ってくる。

ガゴッ……

(そんな、だめ)

瓦礫が、崩れる。

「うん………!」

士郎、と呼ぼうとするが、彼女の、姉イリヤの声が弟士郎に聞こえる事は、

二度と、なかった。

誰かの声が聞こえた気がして。士郎は目を覚ました。

声が聞こえる。

「……………X…X……………XXXXXX……………！……………！……………！」

「……………XX！？XXXXX……………XX！XXXXX……………XXXXX！！……………！」

（だれかいるみたいだけど何を言ってるのかわからない。たぶん英語。アメリカだし）

そんなことを思っていたら、目の前から瓦礫がどけられ、数人の大

人たちが現れた。

大人たちは英語で何か言いながら、士郎を引き上げた。

(助かった……)

あれから何時間経ったのか。

疲弊しきった心は、助かったことを喜ぶことさえしなかった。

そしてそれよりも重要なことが、士郎にはあったのだ。

「お……ねえ……」

炎で高温になった空気と煙を吸ったため、喉が焼けて声が出せない。しかし士郎が話さずとも、救助隊員たちは士郎が埋まっていた辺りの瓦礫を更に除去し始めた。別の子供の手が見えていたから。

そして士郎は見てしまった

姉がいるはずの場所にあった、姉だったモノを。

(え)

ソレは 赤かった。
赤く、紅く、朱く、赫い。 士郎が今まで見たこともない程に鮮やかな「血の色」。

力なく放り出された細い手足。

落ちた瓦礫に潰されて、腹から飛び出した内臓。

その時のものであるう、とてつもない量の出血。 乾いた血溜まり。 美しい銀髪と、整った顔。

生前は愛らしかったであろう目は濁り、瞳孔が開いている。

誰の目にも、彼女 衛宮イリヤスフィールの死は明らかだった。

それを。 士郎は見てしまった。

「う、あ……ああ……あ……… あああ!!」

嘘だ。

(嘘だ……嘘だ……嘘だ……嘘だ……嘘だ……嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ……
嘘だ!!!!)

第0話 プロローグ（後書き）

〔補足・解説〕

：麻帆良の空が赤く焼けるのを眺めながら、士郎はそう独りごちた。
麻帆良商店街からの買い物帰り、ふと空を見上げて言った。
このあとエヴァアの家に戻った時、ちよっとブルーな気分になって
いたのを見抜かれて慰められる。

それでは次回！

第1話 衛宮士郎の1日（前書き）

ようやく第1話です。長かった……………。

そして書いてて楽しかった。まさに改訂版、といった仕上がりになったのではと思います。

それでは「第1話 衛宮士郎の1日」、どうぞ！

第1話 衛宮士郎の1日

時は2003年2月、その深夜。
夥しい数の黒い影が空を占めて大地を這う。
それらはみな一様に、とある場所を目指していた。

夜。それは魔が跋扈する刻。

古来より魔性の類は群れを成し、悪鬼羅刹・魑魅魍魎を人々は畏れた。
しかし長い年月は文明を進化させ、科学が発展し、いつしか人々は神秘を信じなくなった。
それに伴って神秘は力を失い、精霊・妖精・妖怪・鬼・悪魔など、人ならざる存在は自分達の世界へ姿を消した。

だがそれはあくまで”普通の”場所の話。

日本有数の霊地 「聖地」であるこの麻帆良は、現代においても年に数回、鬼や悪魔が現れる。

世界有数の学園都市・麻帆良学園。その正体は「関東魔法協会」。

20年前に”新世界”で起きた大戦時、こちらの世界「旧世界」でもその影響が現れた。
日本は以前から対立のあった「関東魔法協会」と「関西呪術協会」に勢力が二分した。

戦争が終結し和平が成った今日であるも、当時のしこりは水面下で未だ消えず、敵国側の魔法使いや陰陽術師達の末端は暴走し、今でも鬼や悪魔かれらを召喚して送り込んでくる。

そしてそんな輩からこの地を護る役目を担うのが、

”夜の警備員”
「魔法先生」と「魔法生徒」である。

今日、麻帆良の夜を護る者の中には………………。
紅いジャケットを纏って赤い髪を靡かせる弓兵アーチャーがいた。

第1話 衛宮士郎の1日

「まだ確定じゃないだろ。ていうか持ち場を離れていいのか？ 刹那はどうしたんだ」

「あの程度の敵なら1人で問題ない、もう終わる」

「終わってないのに来るな！ てか仲間を敵地に置いて来るな！！」
「だってしょうがないだろう？」

真名はスルツと士郎の腕に自らの腕を絡めた。

「この時間に士郎さんに会うことなんて、滅多にないんだから」

真名も士郎も遠距離支援に適した能力の持ち主だ。故にこの2人が同じ時に警備にあたるという事はほとんどない。今回は弐集院の急用の為にたまたま士郎がシフトに入ったのだ。

真名は妖しい笑みを浮かべて流し目を送る。だが士郎には効果がなかった。
ほくねんじん

(俺なんかをからかって何が面白いんだか)

「昼間にしょっちゅう会ってるだろ？」

「ムードっていうものがあるんだよ」

真名が更に士郎に密着し、その肩に頭を乗せて

「 龍宮っ！！ 」

「 ん？ 」

下の方を見ると、野太刀を持った少女 刹那が顔を真っ赤にして、建物の屋根からふたりを見上げていた。

「 ……何だ、もう来たのか 」

「 そっそそ…！ そんな事よりたっ龍宮…！！ 」

狼狽しているわりに、刹那は視線を逸らすこともせず2人をじっと凝視していた。

ちなみに今の士郎と真名は逢瀬を重ねる男女のようで、密着した2人の姿に刹那は顔から火が出そうだった。

「 …… 」

真名に天啓が降って来た。

悪戯めいた笑みで刹那に顔を向け、士郎にバレないように口パクで話しかける。

「 ？ 真名……？ 」

『おまえもまざるか？』

(ボンツ！！！！)

「せつ刹那

！！？」

あまりの刺激に耐えられず、刹那の頭は一瞬でショートした。

この後、刹那は体調が悪いと勘違いされて士郎におぶられて寮に帰ることになった。

刹那はこれ以上ないほど恥ずかしかったが、最後は大人しくその背中に身を任せた。

真名が「ちっ、抜かった」と思ったかどうかは定かではない。

こうして今日も麻帆帆の夜は更けていく。

…… Pipi！ Pipi！ Pipipipipipipipipi
ipipipipi……！！！！

カチッ！！

「……………眠い」

目覚まし時計を止めて目を開ける。

陽光が窓から射すなか、重い瞼をこすりながらベッドから這い出た。

着替えて1階へ下りると、キッチンから包丁の音がする。

「おはよ茶々丸」

「おはようございませす士郎さん」

緑色の髪を持つ女性型ガイノイド（ロボット）、絡繰茶々丸。

”アイツ”の従者の1人で、そういう意味では俺の先輩に当たる。

そもそも女性型ガイノイドという呼び方は間違いで、ガイノイドという名称自体が女性型を表すらしい……とかどうでもいいや。

洗面所で顔を洗ってうがいをして、それからまたキッチンへ。

「茶々丸、何か手伝うコトあるか？」

「いえ、もう朝食の支度は終わりますので」

普段なら俺も手伝っているのだが、昨夜のように仕事が入ると次の朝は早起きできないことが多いため、今では朝の準備は茶々丸1人に任せている。

「もう時間ですね。土郎さん、マスターを起こして来てくださいますか？」
「ああわかった」

朝に弱い、この家の家主にして我らがマスターを起こしに階段を上がる。

・
・
・
・
・
・

どうせ起きていないだろうと思ってノックせずにドアを開ける。目当ての人物はやはり、布団を頭まで被って日光を避けていた。

「エヴァ起きろ、朝だぞ？」

「……………」
へんじがない。ただのきゆうけつきのようだ。

「エーヴァー、あーさーだーぞ!？」

「……………」

……………。

「 ていつ」

ガバツ！

布団を剥がすとネコのように丸くなって眠る、白いパジャマ姿の少女が現れた。

金系の長髪と鮮やかな青い瞳を持つ人形のように可憐な少女。

元賞金首の大魔法使い、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

「……………ん……………ん……………！！」

眉間に深い皺を寄せて、逃げていく温もりを集めようと身を振る。

「ほら起きろって」

彼女の肩を抱いて上体を持ち上げ、ベッドに座らせるような体勢にするが。

（ ウト……………ウト……………。 ）

全く目が覚める気配がなかった。

……この少女が布団を剥がされても起きないほど寝惚ける日。それは必ず士郎が夜の警備に出た日の翌日だ。

待っていてくれるのだいつも。次の朝が辛いのが分かっている。でも、士郎が家に帰って来るまで夜更かしをして。

それが分かっている。士郎も乱暴な起こし方が出来ない。……それを抜きにしてもこの男はエヴァンジェリンに甘いのだが。

「……しょうがない、着替えは後だな。エヴァ、洗面台まで行くぞ」
「ん ……」

結局こんな日は士郎にだっこされて1階まで下りてゆく。
まだ目の開かないエヴァは、士郎の胸に気持ち良さそうに凭れかかって揺られていた。

・ ・ ・ ・ ・

「マスター、もう出発のお時間です。急がないと登校ラッシュに遭遇してしまいます。」

……あ・マスター、お弁当を忘れています」

「ハンカチとティッシュはポケットに入ってるか？ 筆記用具を忘れたなんてオチはなしだぞ？」

「お前らは私の保護者か！」

似たようなものである。

バツチリ目が覚め、ようやく本調子になったエヴァの怒声がリビングに響いた。

「じゃあ、行ってらっしゃい」

「ああ、行ってくる」

「行って来ます土郎さん」

2人が出て行ったのを確認して、土郎も出かける準備を始めた。

鍵を開けて裏口から入る。荷物を置いてエプロンを着て手を洗う。食材の仕込みと下拵えを終えてカウンターとテーブル、床を掃除する。

最後に表口の鍵を開けて「準備中」の札を「営業中」に裏返し、今日のおススメを書いた看板を表に出す。

「喫茶店アルトリア」。
士郎が1人で経営する、一度に20人程度が入れるそう大きくない店だ。ありがたいことに、時間帯によっては忙しくさせてもらっている。

午前10時を以て、本日の営業を開始する。

（さて、今日の最初の客はどんな人かな？）

カランコローン！

（はやつ。）

「いらっしやいませ、何名様で………ホントに早いなオイ」

「ふおふおふお、見ての通り1人じゃ。抹茶と水羊羹を頼むわい」

本日最初の客はこの学園都市の最高責任者、麻帆良学園学園長・近衛近右衛門。

仕事と部下から逃げて来店する、サボリの常連であった。

・
・
・

「ズズ……………おおそうじゃ、近々ウェールズからお主の知っておる顔が来るぞ」

「？ 誰だ？ それに何で？」

羊羹を平らげた近右衛門は残りのお茶を啜っている。

「うむ、修行のためじゃ。昨年メルデイアナを卒業した子の修行先が日本でな、ウチに呼ぶことにした。卒業後すぐ日本語の勉強を始めたんじゃが、何と3週間でマスターしてしもうたらしい。ふおふお、将来有望な子は大歓迎じゃ」

「でも卒業式は夏だろ？ 何でわざわざ年越して2月に来るんだ」

「あれじゃ、前例がない修行内容じゃったから準備や手続きに思ってたより時間を喰ってしもうたんじゃよ。交渉やら根回しやら裏取りひげふんげふん」

…………… 士郎は聞かなかったことにした。

「……………で？ その俺の知り合いつて誰だよ？」

「ふおふおふお それは会ったのお楽しみじゃー！」

カランコローン。

「いらっしゃいま……あ、お久しぶりですタカミチさん！」

やって来たのは麻帆良学園女子中等部の非常勤講師、タカミチ・T・高畑だった。

担任クラスを持っているのに非常勤。表向きは出張が多いからということになっているが、実は紛争地域に向くなどして活動する、魔法使いのNGO団体で活動している為だった。

「久しぶりだね士郎君。いや、この店も本当に久しぶりだ」

タカミチはそう言って眼鏡の奥の目を細めた。

「いつ帰って来たんですか？」

「ついさっきだよ。朝食を抜いたから何か軽く食べたいと思ってね」

「ひよ。御苦労じゃったのタカミチ」

がしっ！

「ふおっ！？」

タカミチが近右衛門の肩を掴んだ。服に皺ができるほど強い力で。

「タ、タカミチっ!?!」

「でもそれも無理みたいだ……食事は昼までお預けだね。ところでですね学園長。僕は久しぶりにこの店に来ましたが……あなたはそうでもないみたいですね?」

「ええ、最近じゃ平日は毎日のように来てますよ。勿論仕事時間中に」

「し、士郎っ!?!」

「僕が出張に行く前は週に3日だったのに……はあ。」

「では帰りましょうか学園長。きつとしずな先生が笑顔で出迎えてくれますよ」

タカミチは疲れたように溜め息を吐きながら近右衛門を引き摺っていった。

カランコロン

ドアが閉まる際、近右衛門は確かに見た。

笑っていた士郎の口が「次来る時はツケを払え」と言っていたのを。

「ひよ……………」

暫くアルトリアには行かないと心に決めた近右衛門だった。

「ほらほら土郎さん早く座って！」
「はいはい」

時刻は変わり夕方。学園都市は放課後の喧騒に包まれていた。しかし喫茶店アルトリア、ただいま身内による貸し切りです。

紅茶のポットと人数分のカップ、ショートケーキをテーブルに置いて土郎も座る。

それ以外で席についているのは木乃香と明日菜。

「じゃあ早速、『このかと桜咲さんを仲直りさせる為の作戦会議』
を始めるわよ！」

・ ・ ・ ・ ・

議論（？）が進むにつれ、士郎は内心で四苦八苦していた。

「いやな、刹那はお前のこと嫌ってるわけじゃないんだよ」
「……………ホンマに？」

木乃香は顔を俯かせたまま士郎に目を向ける。

（むづ…本当の事情を話せないのが口惜しい…）

「うーん、何て言ったらいいか……………家柄を気にしてるっていうのもあるかな…？」

自分なんかがお前の友達に、なんて考えてる節もあるし」

「そっか、そーいえばこのかってお嬢様だもんね」

「そんなん気にせんでえーのに……………」

「あとは……………昔、川で溺れた事があつたら」

『助けられなくてごめん、このちゃん。ウチ……………もっと強おなる』

あれから……………あの時からだ。刹那が”神鳴流”の修行に明け暮れるようになったのは。

「……………うん。よう覚えとる」

『え？ そんなんええよ、一緒に遊んでくれるだけで』

「そんなん……………本当にどうでもええのに。ウチは」
「……………木乃香」

ガタンッ！

「よく分かったわ！ 桜咲さんはよくわかんないけどどーでもいい
ことで悩んじゃってこのかと仲良く出来ないのね！！」

明日菜が勢いよく立ち上がってテーブルをバン！と叩いた。

（「よく分かった」のに「よくわかんない」ってどーいうことだった
イ。……………それに刹那にとっては「どうでもいい」「ことじゃ……………ないん
だけどな）

明日菜が発起して話し合いが続くも結局、良い案が浮かぶことはな
く。

「積極的に話しかけてスキンシップを図る」「ような作戦に落ち着い
たのだった。

（これだけで上手くいくとは思えないけど……………俺も刹那にそれとな
く言ってみようか）

彼は土郎の目前で「キキイイ　　！」とマンガのようなブレーキ音を出して停止した。

「すまない土郎君！　実は娘が急に熱を出してしまって　申し訳ないが今日の”警備”のシフト、代わってくれないだろうか！？」

この学園では堅物　　頭が固いことで生徒に有名な彼なら、本来は「仕事だから仕方ない」と言って娘の付き添いを諦めるだろう。しかし土郎はよく他人とシフトを代わってくれるため、今では魔法先生はちよつとしたことで土郎に交代を頼んだりするようになってしまった。

土郎は麻帆良ではちよつとした有名人で、「誠意を持って頼めば力になってくれる良い人」と評判であった。

(は、はは……)

土郎は乾いた笑いが止まらなかった。

「風邪、流行ってるんですかね……」

「ん？　ああ、最近初等部や中等部では熱を出して休む生徒が多いと聞いている。そういえば弐集院先生の娘さんも先日熱を出したと

か…………… 土郎君？」

そう。だから昨日、土郎は弐集院の代わりに警備の仕事に出た。
弐集院に…………… さっきのガンドルフィーニと全く同じ台詞を吐かれて。

「…………… いいですよ。学園長じいちゃんには俺から話しておきますから…
……………」

「そうか、いや助かった！　じゃあ私はもう行かせてもらうよ、本
当にありがとう…！」

走り去っていく彼の姿を見る土郎の背中へ、日が落ちる空のように
哀愁が漂っていた。

「ただいまー」

今日は深夜1時頃に帰って来れた。襲撃は年に数回の頻度で起きる。
昨日の今日ということまで今夜は何事もなく終わった。

「うむ、おかえり」

「お帰りなさいませ士郎さん」

エヴァはソファに寝転がって本から視線を逸らさずに、茶々丸は薄く笑って士郎を出迎えた。

「別に待っていてくれなくてもいいんだぞ？」

ソファの後ろからエヴァに話しかける。

日付はとつくに変わっている、出迎えてくれるのは嬉しいが、その為には彼女が寝不足になるのは申し訳ない。

「別にお前を待っていたわけじゃない。ただ紅茶を飲みながら読書していただけだ」

「ええ。時折り時計へ視線を向けてその都度溜め息を吐きながら読書されておりました」

「よ、余計なことを言うなポケロボ！！」

(あれ、なんかエヴァの顔が赤くなった。 どうしたんだ?)

「それに私の記憶によればその本、既に何度も熟読されているハズですが。 ああ、そういえばその本を開く前に『ヒマ潰しには丁度いいだろう』と仰っていましたね。

……マスター、お暇だったのですか？ ならばお休みになればよろしかったのでは」

「キサマ確信犯だろうその発言は！！ ええい巻いてやる！ 巻い

「てやるううっ！！」

耳まで真っ赤にしたエヴァがネジ　茶々丸の魔力供給用のネジ。巻き過ぎるとキモチ良過ぎて茶々丸が「感じて」しまったため、お仕置き代わりに使用される　を片手にソファから立ち上がる。

しかし。茶々丸はエヴァの一步先を行っていた。

「　　き…貴様…！！！」

茶々丸は土郎の後ろに避難していた。背中にぴっとりとくっついてエヴァを見ている。まさにロー・アイアスッ！！（一部の人間限定）頭を上った血が僅かに下がり、そこでエヴァはようやく、土郎がじつと自分を見ていることに気づく。

「……………あ、う……………ち、違うぞ。私は別に、お前を待ってなんか……………」

土郎は狼狽するエヴァの前まで歩み寄り、彼女の頭をくしゃりと撫でて破顔した。

「ありがとな、エヴァ」

「……………」

士郎からは見えなかったが、エヴァは口をへの子に曲げて
持ち良さそうに目を細めていた。 気

「今日はもう寝るよ。明日の朝にでもシャワー浴びる。おやすみ
人とも」

「おやすみなさい」

「……………」

こうして士郎の1日は終わった。

これが日常。こんな日がずっと続けばいいと
そう思っていた。

フェイト
運命が動き出す。

《学園生徒の皆さん　こちらは生活指導委員会です　今週は遅刻者
ゼロ週間　始業ベルまで10分を切りました　急ぎましょう》

「え、もうそんな時間！？　僕も急がなきゃ、初日から遅れたらマ
ズイよ　って、アレ？　あの人……………」

少年の視線の先で、2人の少女が走っていた。

・ ・ ・ ・

「でもさ、学園長の孫娘のアンタがなんで新任教師のお迎えまでや
んなきゃなんないのよ？」

「スマンスマン」

橙色のツインテールとオッドアイの持ち主、神楽坂明日菜と。
ツヤのあるストレートロングの黒髪を持つ京都生まれのお嬢様、近
衛木乃香。

彼女達は今日も今日とて遅刻ギリギリで登校する。

「にしてもアスナ足早いなー、私なんてローラーブレードなのに」
「悪かったわね体力バカで。」

瞬間。風が吹いて明日菜の髪とマフラーが揺れた。

「ん」

気づくと明日菜の隣には、彼女に併行して走る赤い髪の子供がいた。彼は直後、初対面の人間に言うには無礼に過ぎる言葉を吐いた。

「あの ……あなた、失恋の相が出てますよ」

第1話 衛宮士郎の1日（後書き）

（補足・解説）

・紅いジャケットを纏って赤い髪を靡かせる弓兵アーチャーがいた。
アーティファクトに登録されている服装、赤い革のジャケットに黒いブーツ。つまりAF「顔のない英雄」を装備中。ただし登録数ゼロなのでただのグローブ状態ですが。

・真名が更に士郎に密着し、その肩に頭を乗せてエヴァや刹那には無理ですが、（現在の）士郎と真名は身長が同じなので可能です。このシチュエーションは真名の特権ですね。

いや、おんぶや抱っこされた時なら可能か……！！

・重い瞼をこすりながらベッドから這い出た。

Fate原作の士郎と違い、ウチの士郎は朝に弱い。

・笑っていた士郎の口が「次来る時はツケを払え」と言っていたのを。

・暫くアルトリアには行かないと心に決めた近右衛門だった。

次回来店時にツケを払ってもらえればよし。ツケを払うのが嫌で来店しなくてもよし、真面目に仕事しろ。という、どちらに転んでも士郎の望むとおりになるという謀略（近右衛門はアルトリア以外にはサボリに行かない）。

見事に士郎の策に嵌まった近右衛門であった。

・しかし士郎はよく他人とシフトを代わってくれるため、

明石「すまない、今日は娘と外食することになってしまっただけね」

刀子「今夜、彼氏とデートなんです」
士郎「NOとは言えない日本人」

：しかし。茶々丸はエヴァの一步先を行っていた。

彼女はきつと「危険物取扱者 吸血種」の資格を取得済み（ウソ）。

：「あの ……あなた、失恋の相が出てますよ」

KC1巻のネギは嫌いです。余計なお世話なんじゃポケエ！ 1
巻読んだときにネギま！読むの止めようと思った（実際そこでネギ
ま！読むのやめた）くらい嫌いです。

でも今のネギは好きですね。応援してるぜ！ ファイト！！

さあ、はたして次の更新はいつになるのか！？

なにぶん不定期更新ですからね……気長に待って頂ければありがたいです。

それでは次回！！

第2話 ネギ・スプリングフィールドの初日（前書き）

旧・剣製の凱歌は休業中ですが、こちらは旧版を修正するだけで比較的楽なので今回少しだけ投稿します。

今話は旧・剣製の凱歌の第21話を書き直したもので、新鮮さには期待しないで頂けると助かります。

お暇な方は以前のものとどう変わったのか読み比べてみては如何でしょう。

それでは第2話、どうぞ！

なるものからパンを買う者など、急いでいる割に余裕こいた顔を実に多く見ることができる。

しかし…遅刻しかねないというこの状況にすっかり危機感を持って比較的まともな生徒も、毎日この時間帯に登校しては全くの無意味なのだが。

「やばいやばい、今日は早く出なきゃいけなかったのにつ！」

「どんなに早く出ようとしても遅刻ギリギリなんがウチらなんやな」

そしてそんな遅刻生徒予備軍常習者がここにも2人走っていた。

「でもさ、学園長の孫娘のアンタがなんで新任教師のお迎えまでやんなきゃなんないのよ？」

「スマンスマン」

明日菜と木乃香。彼女達も常習犯の多分に漏れず大通りをひた走っていた。

「にしてもアスナ足早いなー、私なんてローラーブレードなのに」「悪かったわね体力バカで……………ん？」

ガツチャガツチャガチャツ

気がつくとも明日菜に隣りに、彼女に併行して走る赤い髪の少年がいた。
なにやら妙な大荷物を背負って走りながら、少年は明日菜にその顔を向けている。眼鏡をかけていて落ち着いた印象だが、まだ小学生くらいの歳であるう…そして。

大荷物を背負った子供が木乃香…ローラーブレードを履いた少女と同等のスピードで走っているのに汗ひとつかいていない。

周りがその異常に気づく前に、少年は明日菜にとんでもないことを言い放った。

「あの ……あなた、失恋の相が出てますよ」

「え……………」

明日菜の顔から一瞬で血の気が引いた。

彼女は絶賛恋愛中、タカミチ…高畑先生に真剣に片思いしている明日菜にとって、「失恋の相」など冗談ではない。

「…な…何だところんガキヤ…！！！！！！」

「うわあああっ!?!」

明日菜は外聞をかなぐり捨てて子供相手に怒鳴り散らす。怖ろしい形相で詰め寄ってくる明日菜に対し少年はすっかり怯んでしまった。

「アスナー相手は子供やるー？」

「あたしはねっガキは大っ嫌いなものよ！取・り・消・し・な・さ・い・よ~~~~！！」

がしっ！

「あわわっ！？」

明日菜が少年の頭を鷲掴みにして彼を片手で持ち上げた。

「坊や、こんな所に何しに来たん？」

のほほんと、何でもないような様子で木乃香が少年に話しかける。彼女の目の前には、親友が細腕の片手で少年を持ち上げる光景が映っている筈だが…随分と慣れたものである。

「ここは女子校エリア、中等部とか高等部の女の子しかおらへんよ？ 初等部は前の駅やえ」

「そう！ つまりガキは入って来ちゃいけないの、わかった！？」

「は、放してください~~~~！！」

「いや、いいんだよ明日菜君！」

「え？」

中等部校舎の窓から、明日菜の愛しの高畑先生
タカミチが顔を出していた。

「た…高畑先生！？ お、おはようございます！…！」
「おはようございまーす」

「久しぶり タカミチ！」

明日菜「ッ！？」

(し……………知り合い！？)

「ああ久しぶりだねネギ君……………いやネギ先生。麻帆良学園へようこそ！」

「……………え……………先生……………？」

『以上を以て、メルディアナ魔法学校本年度の卒業式を終了する』

『ネギ、卒業後の修行課題 何て書かれてた？ あたしはロンドン

で占い師よ』

『ネギは一体何かしらね』

『いま浮き出てくる下口……あ、出てきた!』

「自己紹介が遅れました。今日からこの学校で英語の教師をすることになりました

ネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願いします!」

「え………えええ

っ!?!」

第2話 ネギ・スプリングフィールドの初日

「うう、何なんだろうあの人……………」

げんなりした様子でネギが言った”あの人”とは明日菜のことだった。

・ ・ ・

『学園長先生！！ 一体どーゆーことなんですか！？』

『まあまあアスナちゃんや。…………それにしても修行の為に日本で学校の先生を…………そりやまた大変な課題を貰ったのー』

『は、はい。よろしくお願いします』

『しかし先ずは教育実習ということになるかのう。今日から3月までじゃ』

『はあ』

『ちよっ…聞いているんですか学園長先生！ 子供が先生なんておかしいじゃないですか！』

しかもうちの担任なんて ……高畑先生も何か言ってください！

！』

『いやあ……知つての通り僕は出張が多いからね。きちんと君たちに構つていけないから、これを機にちゃんとした担任がつくことは良いことだと思つよ？ネギ君のことは知ってるから信用できるしね』

『そ、そんなあ………』

『ふおつふおつふお。ネギ君、この修行はおそらく大変じゃぞ。駄目だったら故郷へ帰らねばならん。二度とチャンスは無いがその覚悟はあるのじゃな？』

『………はいっ、やります。やらせてください！』

『………うむわかった！ それでは早速今日からやつてもらおうかの。僕の隣に居る彼女が君の指導教員になるしずな先生じゃ。わからないことがあつたら彼女に聞くといい』

『よろしくね。ネギ君』

『は、はい』

『そうそうもう一つ忘れとつた。このか、アスナちゃん。しばらくはネギ君をお前達の部屋に泊めてくれんかの。ネギ君の住む所がまだ決まっておらんのじゃよ』

『げ。』 『え。』 『ええよー』

『そんな 学園長』

『！！』

『フォーフォーフォー』

(……………キツ！)

『アンタなんかと一緒に暮らすなんてお断りよ』

……………そう宣言して、明日菜はさっさと教室に戻ってしまった。

「ふふ、あの子は元気だから。でもとても良い子よ？」

そう言うしずな先生と一緒に、ネギは女子中等部の廊下を歩いていた。タカミチが担任をしていたクラス、明日菜と木乃香のクラスは女子中等部、つまり女子校である。

「ホラ、ここがあなたの担当するクラスよ」

「2-A」。

ネギが背伸びして廊下の窓から覗き込む教室からは、女生徒達の姦

しい声が引つ切り無しに聞こえてくる。そして女子中学生といったも、ネギにとっては年上のお姉さん達である。

(……これが、僕がこれから教える人達か……)

「緊張してきた？ 授業の方は大丈夫？」

「は、はい。大丈夫です」

「あら頼もしいわね。それじゃお願いねネギ先生」

ネギ達が来たことに気づいたのか、教室内は既に静かになっていた。その静寂の中、扉の前で深呼吸してから

(よし！)

意を決して引き戸に手をかけた。

キャツキャツ
アハハハハハ！

朝のHR前の2-A。部活の朝練を終えて着替える生徒、肉まんを売る生徒、話の花を咲かせて騒ぐ生徒など、(一部ヘンなのが混ざっている気もするが)ごく一般的な朝の教室風景だ。

「……………ムスツ……………」

その中に約1名、朝から不機嫌な空気を隠そうともしない生徒がいた。

「あれー？ アスナ何でジャージ着てるの？」

(ギロツ！！)

「ひゃあっ！？(びくうっ！)」

「あー、まきちゃんこっちこっち」

木乃香の手招きに従ってまき絵はそそくさと避難した。

「アスナ機嫌悪いねー」

「何かあったの？」

「あははー、ちょっと新任の先生と揉めてなー」

ガタタンッ！と、木乃香の言葉に反応して一部の生徒が詰め寄った。

「えっ会ったの!？」

「今日ウチのクラスに来るっていう!？」

「そいつは聞き捨てならないねこのか……その話もっと詳しく!」

「来たですー!」

見た目小学生の小さい生徒が声をあげた。廊下側の窓に人影があり、向こうの会話が聞こえてくる。

『……………授業の方は大丈夫?』

『は、はい。大丈夫です』

『あら頼もしいわね。それじゃお願いね……先生』

()(新任キタ

!!!())

(風香、トラップは!?)

(皆でちゃんと仕掛けたよ! 超りんの監修付きでね!!!)

(あの程度の原始的な罠、赤子の手を捻るより造作もないネ。
クク……)

(……………ええんかなー)

(フンッ)

冷や汗を流す木乃香とは対称に、明日菜は「ちよつとくらい痛い目見た方がいいのよ」とでも言いたげな表情をしていた。

ガラッ！

多数の思惑が絡み合う中

戸が勢いよく開け放たれた。

ガラッ！

ボフンツ！！

（ え？ ）

ネギの頭に黒板消しがヒットする。それを見た明日菜が目を剥いた。

「ケホツゴホツ、いやーやられちゃったなーアハハ」

わざとらしい笑いが明日菜の疑心を大きくする。
彼女の目には、黒板消しが一瞬止まった……ネギの頭上で浮いたように見えていた。

（あ、危なかった　　！！　　そっか、魔法がバレないようにって
こういうパターンもあるのか……………）

魔法使いの原則。魔法と、己の正体を一般人に知られてはならない。
魔法使いは自分を守る「魔法障壁」を常に張っている。ネギはつまりそれによって黒板消しを不自然な形で遮ってしまったのだ。

（よし、これでもう大丈夫！）

魔法障壁を解除し、安心してネギ少年は教卓へ向けて歩きだす。
だが、そんなカンタンに済むワケなかった。

ビシッ！

「へぶっ！？」

・TRAP1！　↳ロープ↳

ネギは足元に張られたロープに足を引っかけて前方に転倒した！

「あぼっ!!」

・TRAP2! 　くバケツ（水入り）く
ネギは天井から降って来た水入りバケツでずぶ濡れになった！
クリティカルヒット!!　バケツがネギの頭部に命中、そのまま頭に嵌まった!!

TRAP1とのコンボ発動!!

バケツで前が見えなくなり、ロープで転倒した勢いそのまま転がり始めた!!

「あああああああああ!?!」

・TRAP3!　くオモチャの矢（鏃が吸盤）く
頭や臀部に無様に矢が貼り付いた!!

「ぎゃふんっ!!」

最後に　　教卓に激突してネギ少年は停止した。

しずな「……………あらあら」

2-A「あははははははははははははははは!!」

ネギのあまりの姿にクラス中が笑いに包まれた。…この生徒達、何という鬼畜……！！

「はははは………は？ えっ？」

「こっ、子供

！？」

「ごめんね君、てっきり新任の先生だと思って……！」

事態に気づいた生徒達がネギを介抱し始めた。だが君達。そもそも新任の先生に罾を仕掛ける事自体間違ってる。

「いいえ、その子があなた達の新しい先生よ。さ、ネギ君
「は、はい」

しずな先生に促され、ネギが教卓の前に立つ。

「きよ 今日からこの学校でまほ……英語を教えることになりました
ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけどよろ
しく願います」

『……………』

(あ、あれ……？ 僕、なんか失敗しちゃった……！？)

『 か、かわいいい

！……！』

(っえええええええええええええええええ！?)

直後ネギが彼女達にもみくちやにされ、質問責めに遭い、授業前にすっかり辟易し、その授業も途中で終わってしまうのは……また別の話である。

「 ふう、やっと一段落だ」

放課後。一通りの仕事を終えてネギは女子校エリアの広場に腰を下ろしていた。

初授業での出来事が脳裏を過る

〈回想（ネギ主観）〉

初めての授業……まさか黒板に手が届かないなんて……。いいんちよさんが台座を持ってきてくれて助かったな。いいんちよさんはいい人。

それにしてもあのカグラザカアスナって人、朝から何なんだろう！イジワルしたり、すぐ怒ったり……僕先生なのに。いいんちよさんとケンカまで始めちゃうし、結局そのまま授業が終わっちゃうし。

初日から失敗しちゃったよ……。はあ……。

「……………はあ。……………ん？」

思わずため息をついたネギの目にある女生徒の姿が映る。その生徒はたった1人で大量の本を両手に積み上げ、よたよたと危なっかしく階段を下りていた。

「あれは確かウチのクラスの……『宮崎のどか』さん？」

タカミチから渡された名簿を取り出して確認する。間違いない。

「あんなにたくさん本を持って危ないな」

ズルツ

『あっ』

「あっ」

のどかが足を滑らせた。

『きゃあああああああ！！！！』

「ああっやつぱし！」

『杖よ』

荷物から杖を掴んで言葉を紡ぐ。「始動キー」は要らない、初步的な「魔法」ならば鍵がなくとも魔力の路は容易く開く。ネギの意志に従って、杖を覆う布は弾けるように解けていく！

「ウエンテ風よ！」

ぶわっ！！

魔法で風を操って のどかの体を吹き上げる。だがそれも一瞬しか保たない、風が止んで落下する彼女の体を受け止めるべくネギはすぐさま走りだす。

「 つあぶつぶつぶツーーー!!」

ズシャアアアツ!と音をたててヘッドスライディング。ネギは盛大に地面とキスする羽目になったが何とか間に合った。

「あたたた……」

「……う、ん……?」

意識を失っているようだが、どうやらのどかに怪我はないようだった。

「大丈夫ですか? 宮崎さ」……あ、あなた……?」 つ!？」

その場にもう1人。ネギの目の前に魔法を^{すべて}目撃した人物が立っていた。

「……………」
「……………」

「……………」
「えっと……………」
「あの」

神楽坂明日菜。

「ん……………せ……………先生……………？　ッ！？　せ、せんせ　　！？」

のどかが目を覚ました時には、ネギを拉致する明日菜の背中しか見えなかった。

その後。

「あ、ああ怪しいとは思ってたけど！　やっぱりあんた超能力者だったのね　　！！！」

「ち、違いますっ！　僕は魔法使いで……………！！！」

「誤魔化したってダメよ！　ちゃんとこの目で見た……………ってどっちも同じじゃない！？？」

ネギ・スプリングフィールド。赴任1日目で魔法がバレました。

結局……正体については秘密にしておいてもらったもの、
何故かネギは『タカミチが明日菜のことをどう思っているか』読心
術で調べることになってしまったのであった。

「そうと決まれば早速 実行よ！ 荷物取ってくるからちょっとそ
こで待っ……………」

ガラッ

『ようこそ？ネギ先生 ツ！！』

教室の扉を開けると、ふたりは生徒達の声とクラッカーの音で出迎
えられた。

「え……………」

「あ……………そーだあなたの歓迎会するんだった」

「ええ つ！！」

2 - Aの生徒達は時折りネギと会話しながら、食べて飲んで好き勝手に騒いでいる。そんな楽しい雰囲気の中に居て、ネギの顔も自然と綻んでいた。

（うれしいなー。初めての授業で失敗して頼りないところ見せちゃったなーって思ってたんだけど……こんなに歓迎してくれるなんて余計な心配だったかな）

「あ、あの……………、ネギせんせい……………」

「はい？ あ、のどかさん」

「さっきはその 危ない所を助けていただいて ……、あの、その……………」

「これ、お礼です」

「おおっ本屋が早くも先生にアタックしてるぞ ……！」

「ち、違います ……わたし本屋じゃないです ……」

「先生。私からもこれを……………記念品です」

歓迎会の再中、ネギはのどから図書券を、委員長・雪広あやかに……ネギ自身の銅像を貰った。今日初めて会った人物の銅像を即
日用意させるだと……これが金持ちの財力か……っ！！

「やあネギ君。初日の授業お疲れさまだったね」

「あ、タカミチとしずな先生」

(た、高畑先生！？ チャンスよチャンス！！ わかってるわね！
?)

(は、はい！)

嫌な出来事から逃げるように いや、実際に走って逃げる明日
菜を、ネギは必死に追いかけていた。

(また失敗した！)

タカミチに読心術を使っただけど結果は良くなって、アスナさんは教
室を飛び出してしまった。

タカミチがあんなこと考えてたのは僕のせいだ、なんとかしなくち

や

「ま、待ってアスナさん！」

「ついて来ないでっば！ しつこいわね、あんたには関係ないでしょー!？」

「で、でも僕のせいだし……それに、僕は今日からあなたの先生ですから……。」

ぼ、僕ホレ薬作れますから！ 4ヶ月もあれば

「

「なに？ その惚れ薬を使えば上手くいくっていつの!？」

「……………!?!」

(…………その通りだ。上手くいくわけない。人の心を操って好きにさせるなんて…………間違ってる)

「…………ううん、ゴメンなさい…………。こんな時は魔法に頼ってもダメです…………」

「…………なによ、やっぱりダメなんじゃ

「

「おじいちゃんが言ってました。

『わしらの魔法は万能じゃない。わずかな勇気が本当の魔法だ』
って」

「……………！」

その言葉が、その笑顔が余りにも眩しくて……………思わず明日菜は見惚れていた。

(……………ふん。)

「わかったよ。私も……………勇氣出す」

そう言って、出会って初めて、明日菜はネギに笑顔を見せた。

放課後の喫茶店アルトリア。そこでとある常連客が疲れたようにため息を吐いていた。

「はあ……………マジありえねえ」

(ウチのクラス……いや学校は変わってると思っていたが)

「何だよ『子供先生』って……!!」

「ん？ 今日はどうした千雨ちゃん」

大きな丸眼鏡をかけた中学生・長谷川千雨に話しかけたのは、この小さな喫茶店の店長である衛宮士郎。

この非常識な街にあって千雨が唯一信頼する常識人(と彼女は思っている)であり、この店は彼女の心を癒すオアシスなのだ
要するにこの店の常連である。

そして彼女はネギの担当する女子中等部2-Aの生徒でもあった。

「店長……子供が教師に……ウチのクラスの担任になったって言うたら信じますか？」

「……………いや、おかしくないかそれ？」

突拍子のない妙な質問に、士郎はカウンターでコップを磨きながら苦笑した。

(そつだ、普通そんなことありえない!ああ店長、やっぱりあんたマトモだよ……!)

この街はどんなおかしなことも「麻帆良だから」と済ませてしまっ
氣質がある。

それに違和感を感じ、日々孤独にストレスと戦う戦士。それが長谷

川千雨である！

「ま、これでも食って元気出してくれ。よければだけど」

そう言つて士郎が千雨に出したのは毎のムース。ちなみにこれは士郎のサービスなので料金はタダであり、時たま貰えるこのようなサービスもこの店の密かな人気の理由だった。

「あ ……すみません。さっきまでその先生の歓迎会に出てたんでちよつと……」

「ありゃ、お腹いっぱいか。うーん、お持ち帰りするか？」

「え？ ここテイクアウトはやってないんじゃない？」

「うるさいヤツらがいるからさ、そいつらの要望に応えることにしたんだよ」

プリン好きの忍者とか、あんみつ好きの巫女スナイパーとか。

「まだ宣伝し始めてないから誰も知らない。千雨ちゃんがテイクアウトのお客様第1号だな」

まだ持ち帰るとは言つてない。しかし士郎の料理が美味であることはよく知っているの、千雨はありがたく頂戴することにした。

「で、どんな子なんだ？ その子供先生つてのは」

士郎は興味本位の軽い気持ちで聞いたのだが、千雨は思い出すのも不快といったカンジで眉間に険しいシワを寄せた。

「ええ、赤い髪の外国人で、歳はホントに子供です。10歳くらいじゃないですか？」

オックスフォードを出たとか聞きましたけど……どこかの権力者の息子じゃないですかね」

「……………名前は？」

「……………？ ええと……ネギ・スプリングフィールドって名前ですけど」

・ ・ ・

ムース1つでは淋しいので、紙製のケーキボックスには他のお菓子も詰められた。それを見て千雨が（密かに）ご機嫌で店を出たのを見届けた後、士郎は遠くを見るような目で呟いた。

「………2年か？ 頑張ってるなアイツ」

士郎は静かに口の端を上げた。

「……………はあ。」

歓迎会が終わった頃には辺りはすっかり暗くなっていた。冬の寒さが息を白く染める中、ネギは明日菜達と一緒に寮に向かって歩いている。

（結果的になんとなかったけど……授業は失敗しちゃうし、魔法はバレちゃうし。1日目からこんな感じで僕、やっていけるのかな？）

「……………なに落ち込んでんのよ？」

「……………1日目から失敗ばかりで……こんなので僕、やっていけるのになって」

（……………。）

「さっきの言葉、ちょっとだけ……ぐつときたわ」

「えっ。」

明日菜は照れくさそうに髪を弄りながら

「だから……………このまま頑張れば、あんたもいつかはいい先生になれるかもね」

「え……………。あ、はい！ありがとうございます……」

「アスナ、ネギ君ー、行くえー！」

遅れる二人を木乃香が急かす。

「ほら行くわよ！」

「は、はい！」

(……お姉ちゃん。少し不安だけど……僕ここで頑張ってみます)

「立派な魔法使い」になる誓いを新たに、ネギは冬の星空を見上げた。

第2話 ネギ・スプリングフィールドの初日（後書き）

《おまけ》

風香「皆でちゃんと仕掛けたよ！ 超りんの監修付きでね！！」

超（ネギ坊主は学園赴任初日に酷い目に遭ったと聞いている……クク、ここは歴史通りに事を進めるためには止むを得ぬナ！ ふはははは！！）

葉加瀬「……………いいんですかねー……」

古菲「ム、超の奴どーしたアルか？」

茶々丸「楽しんでるのです」

五月「……………？」

・トラップ連続ヒットの陰には、天才の緻密な計算があったという裏話。

あの超が自分から歴史に干渉するなんて有り得ないけど、ちょっとギャグっぽい彼女が書いてみたかったんです……。ごめんなさい。

〈補足・解説〉

：「あれー？ アスナ何でジャージ着てるの？」
省きましたがあくしゃみです。原作通りです。

・喫茶店アルトリアと店長土郎と常連千雨

初めて千雨がアルトリアにやって来たとき、千雨が纏う鬱屈したどす黒く昏いオーラ（ストレスが原因）を見て、土郎が干将・莫耶を投影しかけたという秘話があったりする。

そんな千雨を元気づけようと土郎が親身になって話しかけていくうちに、めでたく彼女にいいひと認定されて常連客が1名増えました。良かったね土郎！

しかし他のクラスメイトと顔を合わせたくない千雨は、（常連仲間である楓や真名、刹那を除く）賑やかな3-Aメンバーが来店しているときはアルトリアに入店したからない。

それでは次回！

第3話 これが彼らの新たな日常（前書き）

今話は元々4000文字程度だった話を水増しして修正したため、内容的に薄いです。ご注意ください。

それでは第3話、どうぞ！

第3話 これが彼らの新たな日常

「じゃ、行ってくるねこのか」
「頑張つてなーアスナー」

ボタン。

「……あれ…アスナさんはどこに……？」
「あ、起こしてごめんなーネギ君。アスナは新聞配達の仕事して
るんよ」

(……こんな朝早くから……)

「…このかさん、僕も起きます……」

「ほな、だいぶ早いけど朝ごはん作るか？」

「いえ、ちょっと散歩に行ってくるだけなので」

明日菜の帰りまで二度寝しようとしてベッドに潜る木乃香を背に、ネギ

は杖を持って寮を出た。

ようやく地平の向こうが白んできた頃、早朝の時間帯。そんな街中をジョギングしながら世界樹前広場へ向かうのは、今日も今日とて鍛練に勤しむ士郎である。

「ん？」

(……魔力？ 西の空からだ…誰だ？)

怪訝な表情で白くなりつつある空を見上げると、見えたのは空を飛ぶ何かの影。士郎が視力を強化して再度観察すると

その人影の正体は女子中等部の子供先生、ネギ・スプリングフィールドだった。

(認識障害もかけないでなにやってんだアイツは ……!!)

「……悪い、刹那。少し遅れる」

そう呟いて自らに認識障害をかけ、瞬動と虚空瞬動を使ってネギのもとへ駆け出した。

「うーん、アスナさんどこかな …」

「ネギイ！！！」

「うわああっ！？」

突然の大声にネギはびくうっと肩を震わせて驚く。まあ自分以外誰もいない筈の空中で話しかけられるなど、到底予想できないだろうが。

「一体何……………あ……………シ、シロウ！？ シロウなの！？ うわあ久しぶり！！！」

「ああ、もう何年ぶりになるかな？ ていうかお前メガネになったんだな、やっぱり勉強のし過ぎだって言っ……………じゃなくてだなあ！！！」

「っなに！？」

思わず和みそうになった意識をなんとか現実へ引き戻す。

「再会早々悪いがなネギ。お前は魔法使いとして何か大事なことを忘れてないか!？」

「え…ええっ?」

「いくら早朝で人が少ないからって誰かに見られたらマズイだろ! ? 認識阻害かけるよ!!」

「……………え。ああっ、そうだね!」

(危機感薄い……………世話の焼ける…。まだ子供だからポカはすると思っけど……………いや、どんな小さなミスでも魔法使いには致命的なんだよな……………あ、頭痛い……………)

「どうしたのシロウ?」

「……………なんでもない……………そういやお前、こんな朝早くから何やってたんだ?」

「アスナさんって人を捜してるんだ。新聞配達のアルバイトをしてるって聞いたから手伝おうと思って。いつも迷惑かけちゃってるから」

「うん? 明日菜? (……………迷惑かけてる? 何かすごく嫌な予感が……………) だったら、えーと……………あの辺りに自販機あるのが見えるか? あの辺りを通ってるの見たことあるぞ」

「え? シロウ、アスナさんのこと知って あ、いた!」

士郎とネギの視線の先に、ツインテールを揺らして走る明日菜の姿が見える。

「じゃーねシロウ、僕行くよ！」

「おー、もうこんなへマするなよ。あ、あと何か困ったら「アルトリア」って喫茶店に來い！俺の店だ！」

「うん！ありがとーシロウ！ー！」

そのやりとりの直後、ネギは勢いよく明日菜のいる方角へ飛んで行った。

（素直でいい奴ではあるんだよなー。でもこれから色々大変そうだ……おっと、俺も早く刹那のトコに行かないと）

『あれ？何よ浮かばないじゃない』

『おつかしいなー、アスナさん体重何キロですか？』

『……………』

『ああっ待ってくださいアスナさんー！ー！』

結局、ネギは明日菜をまともに手伝うことが出来なかったのだった。

その日の昼休み。

校内広場の芝生で2・Aクラスの生徒：まき絵、アキラ、裕奈、亜子の4人がバレーボールで遊んでいた。

「ねー、ネギ君来てもう5日になるけど、みんなネギ君のことどう思うー？」

「ん…いいんじゃないかな。カワイイし」

「そだね。教育実習生として授業も頑張ってるしね」

「でもウチら来年受験やし、子供先生じゃ頼りくない？」

「受験てアンタ、私達大学までエスカレーターじゃん」

「でもやつぱネギ君で10歳だし、高畑先生と違って悩み事なんて相談できないよねー」

「逆に私達がセンスの悩みを聞いてあげたりして。うぶぶ」

「アハハ、経験豊富なお姉サマとしてー？」

ザ……ッ

『 フフ…誰が経験豊富なお姉サマですって…？ 笑わせてくれるわね』

「！！」

「はっっ！」

「あ……」

「「あなたたちは……！！」「」

第3話 これが彼らの新たな日常

「てんちよーさんー！いちごパフェひとつー」
「アタシはチョコレートケーキお願いしまーす」
「あいよー」

麻帆良学園、放課後の喫茶店アルトリア。女子校エリアに近いこともあり、店内は学校帰りの女子生徒が座席の多くを占めていた。

カランコロン。

「いらっしゃいませ…って、ようネギー！」

入って来たのは巷でウワサの子供先生、ネギだった。

250

『ねえ、アレって「あの」子供先生じゃない？』
『あー！ホントだカワイイー！！』
『ハアンツ！ハアハア可愛い可愛いすごく可愛い可愛い可愛いお持ち帰りしたい…』

彼の登場に店内から黄色い声が沸き立った。……そして凄くアブナイ発言があった気がする。

「……はあ」

(……………?)

「どうした？ ネギ」

「.....」

どうも様子がおかしい。纏う雰囲気はやけに重い。落ち込んでいるようにも見える。

「ま、座れよ」

「うん.....」

士郎はネギをカウンター席に座らせた。

「何にする？」

「.....じゃあミルクティーを.....」

.....

『僕のクラスの生徒達をいじめるのは誰ですかっ！？ い...いじめはよくないことですよ！ 僕担任だし怒りますよっ！-！』

『！？ あ、あんたは.....！？』

『(えっ、なに!?)』

『キヤーーーーーッかわいい~~~~!!』

『この子が噂の子供先生か~~~~!!』

『(えええっ!?またこの展開　　!?)』

回想終了。

「自分の生徒と上級生の仲裁が出来ずに遊ばれていたと……」

「うん…逆に上級生の人達にからかわれちゃって……。結局タカミチがなんとかしてくれただけ、でも、僕も先生なのに……」

しよぼーん、という擬音が聞こえてきそうなほど暗い雰囲気を負い、ネギは頭を垂れて縮こまったままカウンター席に座っている。ミルクティーはほとんど減っていない。

「……はあ」

(……………。)

「ネギ。ネギは先生なのに生徒にからかわれて、喧嘩の仲裁も出来なかった。だから自分が情けなくて、落ち込んでるんだろ?」

「うん…」

「じゃあもう一度目の前で喧嘩が起きたらどうする？」

「え……………」

士郎はじつとネギの眼を覗き込む。だがそれに耐えられず、ネギはまた顔を俯かせた。

「……………今度こそ上手くやりたい。だけど、僕には……………」

「なら頑張れよ。今度こそ上手くやれるように。」今度「なんてチヤンスがあるだけでも充分お前は幸運だ。

言っておくけどな。失敗して落ち込むことは誰にもできる。そこから反省して、努力できなきゃ成長なんて出来やしない。だから大丈夫。お前ならきつと出来るさ」

「……………！！」

士郎からは見えなかったが……………ネギの表情は明らかに変わっていた。

「衛宮さん 会計お願い」

「はい、今いきます」

「シロウー！！」

「ん？」

ネギが立ち上がったって士郎を見る。

「僕、ただ落ち込んでるだけだった。何もしようとしてなかった。タカミチみたいに、先生らしくなれるように頑張るよ！」

「……おう、頑張れ。何かあったらまた来るといい」

「ありがとう！ごちそうさまでしたっ！！」

カランコロン！

（……は。若いってイイなあ）

勢いよく走り去ったネギを見送って、士郎はそんな年寄りくさいことを考えていた。

（あ。ネギ食い逃げ……）

「えーみやさーん」

「あ、ゴメンゴメン」

（……じいちゃんにツケとくか。今さら増えたって大して変わらないだろ）

・ ・ ・ ・ ・

「む…ぶえつくしゅー!!」

「ばっ、汚い唾を飛ばすなジジイ!」

「むう…風邪かのう…? む!? エ、エヴァ! その手は少し待ってくれい!!」

「フン、一手も待たん。この対局は私の勝ちだ。諦めて土郎の店のツケを払うんだな」

「う、う~~~~む……………!!」

知らぬところで払うべきツケが増えていく学園長だった。

後日、学園の5時限目。

中等部校舎の屋上を舞台として新たな火種フィードが生まれていた。

「あらアンタ達、偶然ね？」

「な…！！ 高等部2-D！！」

2-Aが体育授業の為に屋上運動場を訪れるとそこには、先日彼女達にちよっかいを出してきた上級生、ウルスラ女子高の2-Dが先に運動場に陣取っていた。

「私達は体育の自習でバレーやるのよ。アナタ達も？残念、今回は私達先だったわね」

「くっ、アンタ達わざとでしょ！わざわざ中等部の屋上まで来て…

…！！」

「何よ今度は言いがかり？お子ちゃまね」

「なんですって!？」

「アンタ達の方がガキじゃないのよー！ 高校生のくせに!!」

「なんですって!？ かかってきなさいよこの中坊！！」

その中央で、体育教師代理のネギがオロオロしながら必死に考えを巡らせていた。

(ああっなんとかしてケンカを止めないと…！でっでも…タカミチも居ないし…)

『なら頑張れよ。今度こそ上手くやれるように』

『大丈夫。お前ならきつと出来るさ』

ぐっと唾を飲み込み、汗の滲む拳を力一杯握り締めた。

「あ、あの！　どんな争い事も暴力だけは絶対にダメですッ！！」

「　両クラス対抗でスポーツで争って勝負を決めるんです！
爽やかに汗を流せば、つまらないがみ合いもなくなると思いま
す！！」

「……………フ、面白いじゃない」

「いいですわ受けて立ちましょう。このケンカ必ず勝ちますわよ皆
さん！」

「OKッ！！」

「ケ、ケンカじゃないですよー！ー！？」

こうして戦争の火蓋は切って落とされた　　！

麻帆良学園本校女子中等学校2 - A

V S

麻帆良学園聖ウルスラ女子高等学校2 - D

インドツジボール

F i g h t ! !

その日の放課後。

「へえ、そんな事があつたのか」

喫茶店アルトリア、士郎の正面のカウンターに刹那と真名が座っている。事の顛末を語りながら刹那は緑茶と茶菓子を、真名は白玉抹茶クリームあんみつをパクついていた。

「ええ。私や龍宮など参加しなかった生徒もいましたが、勝った時はクラス全員が盛り上がり上がっていましたね」

「勝つたのか、スゴイな。相手は高校生だったんだろ？」

そう訊かれた2人は途端に微妙な表情になる。

「……まあ、らしくない高校生だったな」

「……ああ、そうだな……」

「??？」

確かに高校生らしからぬ振舞いが目立つ集団であった。

わざと人の後頭部にボールを当てたり、自分達がドッジボールの実力者だという事を隠したり。トライアングルアタックだの太陽拳だの、技名を叫びながらプレーしたりなどe t c . . .
だがそれを知らない士郎は、2人のびみよーな表情に首を傾げるだけだった。

「で、ネギが体育の先生の代理だったんだろ? どうだった?」

「……………」

「……………」

二人は視線を交わしてクスツと笑い合った。

「? おい、なんだよ?」

「いや なかなかだったんじゃないか?」

「ええ、またいつも通りオロオロしているだけかと思いましたが、逆にみんなを引っ張っていましたよ」

『後ろを向いていたら狙われるだけです! 前を向けばボールを取れるかもしれないんです、頑張りましょう!』

「……………だったかな？」

「へえ。」

「……………そう言う土郎さんの方こそ、今の表情はなんだい？」

「ん？ 何か変な顔してたか？」

「ええ。なんとというか、いつもと感じの違う笑みでした」

「……………よくわかるな？」

真名は刹那を見て笑う。

「私はただの勘だが、刹那は貴方のことをよく見てるからな？」

「なっ！龍宮なにを……………！！」

(…なんで刹那は龍宮にからかわれるとすぐ取り乱すんだ？)

カランコロン！！

ベルの音とともにバターーン！と勢いよくドアを開けた人物は、両手を振り上げて満面の笑みで入店した。

「シロウ ……！ 僕やったよ……………！！」

「アンタ土郎さんとも知り合いだったのね……………。てゆーか高畑先生とはどういう知り合いなのか教えなさいよー」

「やっほー。シロウ来たえー」

クシヤツ。

(え?)

「聞いたぞ。頑張ったなネギ!」

ネギの頭をぐしぐしと撫でてやる。ネギは一瞬驚いた顔をするが、最後は嬉しそうに破顔した。

「うん! でも何でシロウが知って あ、桜咲さんに龍宮さん」

「あ、せつちゃん!」

「お・お嬢様っ!?!」

「龍宮さんと桜咲さんってよくこの店に来るの?」

「ああ、まあな。楓や長谷川も偶に来るぞ?」

お客様3名追加。ああ、また騒がしくなりそうだ。

そして、ネギ。

まだまだだろうけど、少しは教師らしくなってきたみたいだし。生徒に信頼されるようになってきたみたいだ。頼りないと思ってた

けど、もう少し信用してもいいかな？

そんな思いを巡らせながら、士郎は新たに来た3人の注文をとり始めた。

店外。

「……………なんだって今日はウチのクラスの奴らが多いんだ……………。チクシヨウあいつら、これじゃ入り辛いじゃねえか……………!!」

アルトリアに入れない千雨が悔しそうに店内を窺っていたという。

《ちょっと長いおまけ》

クシヤッ。

ネギの頭をぐしぐしと撫でてやる。

ネギ「えへへー」

木乃香「……………ネギ君ええなあ。ウチ最後にシロウに頭撫でられたん

いつやったやる?」

真名「お前も羨ましいんじゃないか刹那?」

刹那「べつ別に私は……!」

真名「ああそうか、お前この間士郎さんにおんぶされてたな。頭を撫でられるくらい羨ましくもなんともないか」 前話参照

刹那「 ツツツ!!!!」

明日菜&木乃香「……え………」

木乃香「……せつちゃん?」

刹那「ツ!! ち・違います! 違うんですお嬢様!! 私、あの、その……!!」

「ごっ、御免……ツ!!」

カランコーンツ!

ネギ「あれ? 桜咲さん帰っちゃったんですか?」

士郎「……あれ、お代は………」

木乃香「えへへー、久しぶりにせつちゃんに話しかけられたー」

明日菜（桜咲さんって、もしかして……?）

真名「……っ!（隠す気のない笑いをこらえてる）」

状況がわからない一部の人間を置き去りに、アルトリアの時間は過ぎてゆくのだった。

第3話 これが彼らの新たな日常（後書き）

（補足・解説）

：今話は原作の時系列と少しズレてますのでご了承ください。

：（認識障害もかけないでなにやってんだアイツは ！！）

原作ネギよりちょっと抜けてます、この時点では。まあ早朝で出発時には寝惚けてたつてことにしておいて頂けるとありがたいです。

：街中をジョギングしながら世界樹前広場へ向かうのは、今日も今日とて鍛練に勤しむ士郎。

：（素直でいい奴ではあるんだよなー。おっと、俺も早く刹那のトコに行かないと）

士郎は毎朝、世界樹前広場で刹那と一緒に鍛練をしています。たまーに楓や真名が混ざること。徐々にその描写を混ぜていく予定です。鍛練メンバーもストーリー（ネギの魔法バレ）が進むにつれて増えていきます。

：「一体何……………あ……………シ、シロウ!? シロウなの!? うわあ久しぶり!!」

過去編で直接会っているような描写は書きませんでした。ネギ・アーニヤ・士郎は顔見知りです。ネカネも。士郎とネカネは互いにケータイ番号とメルアドを交換しています。

でもこの設定、正直じゃま。敬語で話さないネギって書きづらいんです。ネギらしさを出しづらいいので。

：「てんちよーさーん！」

：「衛宮さーん」

：「えーみやさーん」

士郎は生徒達にとても親しまれております。女子中学生と仲いいとか……滅びろ。

：この対局は私の勝ちだ。諦めて士郎の店のツケを払うんだな」

人知れず従者の為に頑張るエヴァ様でした。ここしか彼女の出番がない……くっ……！

：（……なんで刹那は龍宮にからかわれるとすぐ取り乱すんだ？）

しよつちゆう士郎のことだからかう真名、からかわれる刹那。いい関係だと作者は気に入っています。しかしその所為か真名の性格が（刹那をからかう時だけ）原作と違うという現象が……ぬかった。そして士郎は色々と気づかないw

：勢いよくドアを開けた人物は、両手を振り上げて満面の笑みで入店した。

ネギ「シロウ　　！　　僕やったよー……！！」

木乃香（はぁんっ！ネギ君かわええ〜！）

明日菜（やつぱまだお子様ね（微笑み））

……なんて思ったかもしれません。

：「あ、せつちゃんや！」

：「お・お嬢様っ!？」

せつなはにげだした！

：アルトリアに入れない千雨が悔しそうに店内を窺っていたという。前話の補足・解説に書いた設定ですね。千雨ちゃんはシャイなのです（ちよつと違う）

：「……あれ、お代は……」

担任とはいえネギはまだ子供なので、近右衛門にツケました。

疑問点やお気づきの矛盾点がありましたら感想にてお知らせください。特に今回は何かを見落としているような気がして仕方ないのですが、その違和感の正体は判りませんでした。気の所為だったらいいのですが。

それでは次回！

第4話 期末テストと図書館探検（前書き）

今話は改訂版を書き始めて一番修正作業が大変でした。修正箇所多過ぎ。

昔はこんな稚拙な文章で書いてたんだなと再認識。ホントに勢いだけで書いてたんだなあと。

そしてその”勢い”は、今の私が書く文章からは失われたものでした。ああ、初心者特有のあのパワフルさが懐かしいです……。

それでは第4話、どうぞ！

第4話 期末テストと図書館探検

「……………ふあ。」

刹那が可愛らしい欠伸を漏らした。

「…？ 刹那？」

「すつすいません」

「いや別にかまわないけどさ。…眠いのか？ 疲れてるのか？」

「……………両方だと思います。もうすぐ学期末試験ですから、その勉強で」

「……………珍しいな。刹那ってあんまり自分から勉強しないだろ？」

「はい。お嬢様の護衛がありますし、鍛練や剣道部の練習で時間を使っていますから。でも今回はその……………事情がありました……………」

「……………はあ？ 学年最下位を脱出できなかったらクラス解散ん？」

「いえ、あくまで噂であって…そんなコトはありえないと思うのですが。ただ今回も最下位だと、ウチのクラスに何かあるというのは本当らしいです」

「ふん……」

（ありえないとわかってても、木乃香と離れたくないから一応頑張ってるワケね）

「じゃ、そんな刹那にはこの特製紅茶をあげよう」

疲労回復作用がある酢を少量と、味を調えるためにはちみつが入っている。偶然だがさつきまで刹那が飲んでいた日本茶も、体の疲労成分の排泄を促進する効能があるのだ。

「あ、はい。ではいただきます」

「さて、じゃあテストまで朝の鍛練は休みだな」

何故か刹那に渋られた。お前、状況を考える状況を。

これは麻帆良学園に噂される都市伝説……

馬鹿力のツインテール バカレット

高身長で細目の忍者 バカブルー

褐色肌の中国武人 バカイエロー

リボンを自在に操る バカピンク

いつも変なジュースを飲んでる バカブラック

麻帆良女子中等部には、バカ五人衆レンジャーが棲んでいる。

だがその伝説は実在した……そしてそんな彼女たちが、ある目的の元に集結する！！

『テスト最下位のクラスは解散~~~~!?!?』

『バラバラになるのはイヤやわ〜』

『ま、マズイね。足引っ張ってるの私達だし……』

『今から死ぬ気で勉強しても間に合わないアル』

『ここは……アレを探すしかないかもです』

『夕映!? ア、アレってまさか……!』

『うちの学校の図書館島に、読めば頭が良くなるという「魔法の本」があるらしいのです。まあ大方出来のいい参考書の類かと思いますが、手に入れば強力な武器になります』

『……………。』

『 行こう！！図書館島へ！！ 』

第4話 期末テストと図書館探検

P M : 6 : 5 2

図書館島・秘密の裏口

バカレンジャーの明日菜、楓、古菲クフエイ、まき絵、夕映ゆえ。図書館探検部
であるのどか、ハルナ、木乃香、そしてネギ。総勢8人が図書館島
に集まった。

ネギ（僕、なんでココにいるんだろ……）

シエルパ（実働部隊と連絡を取り合う役割）としてのどかとハルナの2人を残し、バカレンジャーは闇の中へ足を踏み入れた。

PM：7：00

図書館島・地下3階

「往復4時間で帰って来れるハズです」

「一応ちゃんと帰ってきて寝れるねー」

「あ、あのー、皆さん何でこんなトコに集まって……」

「ええーっ！？ 読むだけで頭が良くなる魔法の本を探しに！？」

（ちょっとアスナさん！ 今日僕に魔法に頼るなって言ってたじゃないですかー！）

（うつ…ま、まあ緊急事態だしカタいこと言わないですよ。このまま私達の成績が悪いと大変なコトになっちゃうし。……だから、ね？）

PM：？：？：？

図書館島・？：？：？：？

「わあっ！ これ凄く貴重な本ですよー！」

「あ、先生。貴重書を持ち出そうとすると……」

本を棚から抜き取った瞬間、

ヒュンッ！

ガシッ！！

「え？」

本棚から飛び出した矢を、楓が間一髪で掴み取った。

「気をつけるでござるよネギ先生」

「は、はい……ありがとうございます長瀬さん……」

「盗掘者除けの罠が仕掛けられているそうです」

呆然とするネギの横で、夕映はあっけらかんと恐るべき事実を告げた。

ちなみにネギは「自分はいつも魔法に頼っている」と反省し、魔法封印中だった所を運悪く明日菜に連れ出された　つまりただのお子様状態である。

「それにしても、片手で矢を掴むとはスゴイです長瀬さん」

「お褒めに与り光栄でござるよバカリーダー」

「なに呑気に話してんのよ！ フツー図書館に罠なんてありえない

でしょ!？」

「うわーん大丈夫なのー!？」

「大丈夫やて。図書館探検部のウチもいるし」

その根拠のない自信はどこから来るんですか木乃香さん？

…明日菜、まき絵、ネギは夕映の言葉に恐々としながら歩を進める。すると目の前には続く通路が無い。だが夕映は吹き抜けから飛び降りて下階の本棚に着地、何でもないように歩いてゆく。

「……………本棚の上を歩くんですか？」

「なに考えて作ったんやろねー」

図書館島に所蔵される本の数は膨大で、館内を埋め尽くしている本棚は高さが云十メートルもある。

「た、高いよー、落ちたらケガするー…!」

「そこ、気をつけてです」

カチッ

「えっ」

まき絵の真下、本棚と本棚を繋ぐ床板が開く。まき絵は何も出来ず真つ逆さまに落ちていった。ていうかいちいち忠告が遅くないですか夕映さん！

「キヤーーーーーー！！！」

「さ・佐々木さんーーーー！！！」

「うっつ　　えーーーーーいッ！！！」

ヒュンッ　　シュルルッ　　ビシィッ！！

「……………あゝびっくりした」

新体操部の彼女は咄嗟にリボンを上階の手すりに巻き付けて、何とか落下を免れた。

(……………アレって新体操のリボンだね？　あのリボンって人の体重を支えられるものなの？　ていうかあそこまで自在に操れるものなの！？)

カチッ

うっつかりまき絵が再び罨を踏み、上部の本棚が落ちてくるも。

「ハイヤーッ！！！！！」

古菲が掛け声をあげて飛び蹴りで本棚を押し返す。しかしその本棚に収まっていた大量の本が落下して追撃してくる。

「わあ〜！本の雪崩だ〜！！！」

「ほいほいほいほいほい？」

それらが全て、一瞬で楓の手に収まる。

「はい、時間ないからさっさと進むですよー」

（夕映さん軽ツ！ なんなのこの人たち！？）

「ワタシ達、成績悪い代わりに運動神経いいアルから？」

「これくらいなら平気でござるよー」

（そんなレベルじゃないよ絶対！！）

ネギの後ろでまき絵が「え、私も…？」と呟いた。はい、充分超人です。

「ふふ……流石バカレンジャーです。これなら……！」

隊列の先頭で、夕映が不敵に笑っていた。

「夕映、燃えとるなー？」

バカレンジャーの快進撃は続く。

エヴァンジェリン邸。
エヴァと並んでソファに座って読書していた土郎の携帯電話が鳴った。

「もしもし…ああ刹那か、どうした？……なに？ 木乃香が寮に帰って来ない！？
ああわかった。俺が調べるからお前は大人しく勉強してろ、いいな！」

ピッ。

「悪い、つーワケだからちょっと出掛け なぜ睨む？」

「ふん。こんな平和ボケした場所で大事が起きるわけないだろう、放っておけばいいんだよこのシスコン」

「行ってきます」

「ま、待て土郎無視するな！ そう怒るな、私が悪かったから！！」

「ああ、マスターがあんなに慌てて……」

茶々丸はうつとりした眼で主人の様子を録画カメラしていた。

「変ワツタナ茶々丸……。フ……」

チャチャゼロは妹の成長(?)を喜ぶべきか悲しむべきか悩んでいた。

一方その頃、図書館探検組は戦慄していた。

「な……何コレ……!?!」

英単語TWISTER Ver.10.5

『フオフオフオ……この『メルキセデクメルキセデクの書』が欲しければワシの質問に答えるのじゃー』

RPGゲームのラスボスの間のような広場で、2体の石像ゴレムがバカレ
ンジャーの行く手を阻んでいた。

『第1問、デイファイカルト D I F F I C U L T の日本語訳は？』

魔法の本を手に入れるべく、バカレンジャーがゴレムに挑む！！

『第2問、カット C U T 』

『第7問、リメンバー R E M E M B E R 』

『第11問、ベースボール B A S E B A L L 』

『最後の問題じゃ、ディッシュ D I S H の日本語訳は？』

「やったー！最後だったー！」

「え……ディッシュ？」

「ほら！ 食べるときに使うやつー！」

「メインディッシュとか言うやるー！」

「わかった！』おさら』ねー！」

「『お』！」
「『ち』！」
「『じ』！」

「……………」『おてる』？」

『ハズレじゃな』

「アスナさん————！」
「まき絵————！！！」

文字を間違えて選択した二人に非難が集中する。

『フォーフォーフォー！』

『いやああああ~~~~~~~~~~~~！！！！！！』

ゴーレムは高笑いしながらハンマーで床を破壊する。探検組はそのまま大穴に落ちていった。

さて、木乃香の魔力を頼りに士郎が図書館島に向かっているわけだが。

「……………刹那？ 待ってるって言ったよな？」

「お嬢様に危機が迫っているというのならそれをお守りするのが私の使命です」

「……………ならとつとと仲直りしろよ……………（…ボソッ）」

「何か言いましたか？」

「いや何も？」

「……………あれは？」

刹那の視線の先にいたのは、のどかとハルナだった。

「あーわわわどーしよー！！連絡とれないよー！！」

「皆さん、返事してくださいー！！」

「……………どうしました？」

「あ！桜咲さん……………と、誰？」

「初めましてお2人さん。俺は衛宮士郎、木乃香の兄貴だ」

「へ？木乃香っておにーさんいたの？」

「それよりお二人とも、何があったんですか？」

「あううー、それが……………」

・ ・ ・ ・

えーと……………。学年末テスト最下位を脱出するために、「頭が良くなる魔法の本」を探しに、危ないトコまで行って連絡がとれなくなつた、と。ネギも一緒になつて。

……………。

……………。

……………止めるよ。

止めるよお……………、ネギい……………。

仮にも教師だろお……………！！

(あー頭痛い。茶々丸うー、頭痛薬)

「し、士郎さん?」

「あ・の……馬鹿ども……!!」

「」「ひっ!!」「」

そのとき3人は、怒気を纏う士郎の背後に鬼の姿を幻視したといふ。

「早乙女さんと宮崎さん……と刹那。今日はもう帰れ。後は俺がなんとかしとくから」

「しっしかし」

「大丈夫だから………な?(にっこり)」

「」「はいいいいいい!!」「」

その時の士郎さんは、笑っている筈なのに何故だかとても恐ろしかったのです。by刹那

「さーて、どーいう了見たジジイ」

『ひよっ！？士郎、なぜ一発でわしだと……………』

「気配がする。」

『ひよー……………』

図書館探検組が辿りついた大広間。現在は大穴が開いてゴーレムも一体になっっている。もう一体は探検組と一緒に落ちていった。そしてその2体のゴーレムを遠くから操っていた者こそ、学園長・近衛近右衛門だった。

『ふおっ、流石わしの孫……………！』

「どういっつもりだって聞いてんだけど？」

士郎の手に黒い洋弓と、とてつもない魔力を放つ捻れた矢が現れた。

『わ、わかった！わかったからそれをしまっとくれい！！』

現在、ゴーレムと近右衛門の感覚は同調している、そこに宝具など喰らったらたまったものではない。まあ、士郎はわかってやっているのだが。

『うーむ……つまりじゃな……』

学園長のお話まとめ。

- ・ 今回の学期末試験で2 - Aが最下位を脱出できなければネギは正式教員にならない。
- ・ そのウワサが（変な形で）伝わり、2 - Aの成績不良者がテスト対策を講じようとした。
- ・ その結果、図書館島の都市伝説「魔法の本」を入手し、その力でテストを乗り切ろうという結論になった……らしい。

『それで少くし懲らしめるために突き落したワケじゃ』

「……大丈夫なのか？結構深いだろこの穴？」

言いながら士郎は大穴を覗き込む。

『フオフオ、その辺りは無問題じゃ。落下中に魔法で気絶するようになっておつての、着地時は風魔法で優しくキャッチ。目が覚めたときに「あ、私たち落ちたんだー」と勘違いするようになっておる！！わしが直々に作った術式じゃからネギ君でも簡単にはレジスト出来ん！！』

『そもそもあの高さから落下して気絶せぬ者の方が少ないぞい』

「……………無駄に凝ってんなー……………」

士郎は呆れて言ったのだが、気を良くした近右衛門ゴーレムは得意気に話を続ける。

『それだけではないぞい！あの子らが落ちた「地底図書室」には全教科の参考書（1教科につき10種類ずつある）と食料・キッチン完備！明るい光に溢れ、気温と空調は快適じゃー！』

（……………その情熱を1%でいいから仕事に回してくれ……………）

『おいおい様子を見て、地底から出してあげるつもりじゃ。』

魔法に頼ろうとしたあの子らが地底でマジメに勉強するかは、ネギ君次第じゃな』

「そうだな。じゃ、俺も行ってくる」

『ふお？』

「キッチンあるって言ったけど、アイツらは料理する時間も惜しいんじゃないか？ だから行って来る。早乙女さんと宮崎さんが心配してたからクラスの娘たちにも連絡しといてくれ。あ・俺のこともエヴァに言っといてくれな」

『ふお！？』

「じゃー」

ひょーいと瓦礫を飛び越え、士郎はバカレンジャーを追って大穴に

飛び込んでいった。

(エヴァに伝えたら、それ……
わしが八つ当たりされるんじゃないかの士郎……！
！?)

顔を青くした近右衛門ゴーレムだけが大広間に取り残された。

翌日、朝のHR前の2-Aでは。

「何ですって!? 2-Aが最下位を脱出しなければネギ先生がクビ……!?!」

ネギLoveのクラス委員長・雪広あやかの叫びが響いていた。

「く……何ということでしょう。問題はアスナさんたち5人組レンジャースですわね……」

「みんな……! ニュースニュース!!
アスナたちとネギ先生、今日から3日間、特別学習室に合宿だつて……!」

ハルナとのどかが息を切らせて教室に入ってきた。

「ネギ先生とラブラブお泊まり会ですって！？ズルイですわー！」
「ちよっ、いいんちょソレ違う」

「特別学習室？ どこそれ？」

「合宿だってー 楽しそーじゃない？」

「ていうか今日ネギ先生の授業あったよね」

「あの5人はわかるけど、なんでこのかも参加なの？」

「あ、そうそれ。保護者としてこのかのお兄さんも一緒なんだって」

「えー、このかってお兄さんいたんだ」

「あたし達昨日会ったよ」

「えっ！どんな人！？」

「ん〜けっこーカツコよかったかな？ どっちかっていうとイケメンで、身長は龍宮さんくらいあったし」

「えー！ー！会って見たーい！ー！」

（マ、マジか……………！）

クラスが士郎の話題で盛り上がる中、長谷川千雨は絶望した！

（てことは「アルトリア」は休みかよ！？

テスト前の最後のリラクゼーションタイムが……………）

「皆さん！ アスナさん達が頑張っているのに私達が負ける

わけにはいきませんわ!! ちゃんと勉強して最下位脱出、ネギ先生のクビ回避ですわよ!!」

『おおー！！！！！！！！！！』

機嫌の悪いエヴァを宥めながら茶々丸は、一人落ち込む千雨を首を傾げて見ていた。

地底図書室は樹木の根に支えられた広大な空間で、何処から木漏れ日のような明かりが射しこんでいる。砂地とそこに流れ込む水により、まるで浜辺にいるかのようにも見える。かと思えば遠くには根に取り込まれた建物があり、整備された通路や東屋まで備えられていた。

そして今日はテストを明日に控えた日曜日。地底図書室の面々はといて。

「この問題がわかる人？」

「はい！ $y = 2(x - 2) - 1$ です！...」

「正解です!!」

「やたー!!」

『おおおー!!』

絶賛勉強中だった。

筆記用具とテキストは学園長の言う通りに準備されていたうえ、色々と至れり尽くせりな場所ではあったが案外足りないものも多く、ネギが見つけた黒板と士郎が投影した机と椅子で授業が行われていた。

「みんなー、昼メシできたぞー」

「わー!!」

「待ってましたー!!」

そして士郎は給仕をしていた。この男、何処に行っても主夫である。

士郎は当初、魔法でテストをどうにかしようとした彼女達を説教しようとしていたのだが、地下に着いたらちゃんと真面目に勉強していたので言いだすタイミングを失ってしまっていた。

(……頑張ってるみたいだし。まあいつか)

「師父、これ食べ終わったら食後の運動に手合わせお願いするアル」

「古ちゃん、その呼び方はやめてくれ……」

「おっ、今日の昼食は和食でござるか？」

「しろーさんってなんでも作れるんだねー」

「卵焼き、かぼちゃ煮、こんにやくのおかか煮、野菜の肉巻き炒め、ほうれん草のおひたし、鶏肉の照り焼き、きのこの炊き込みご飯、大根とにんじんのみそ汁……うん、お袋の味です」

「ホント美味しいわよね。桜咲さんと龍宮さんも土郎さんの店に通ってるし」

「2人に会ったでござるか？ 拙者も土郎殿のプリンが好物でござる」

そんなこんなで昼休み。

「師父！ 早速手合わせを」

「テストが終わったらな。ほらほら勉強」

「あ、皆さん。水浴びしてるん…ですか…」

「「「「キヤー…ツネギ君のエッチ…！」」」」

「あ、あわわっ、スミマセン…！」

「本に囲まれて暖かくてホント楽園やなー？」

「一生ここに居てもいいです」

「ゴラ。木乃香はともかく夕映ちゃんはんな余裕ないだろが」

「そんなことを言いつつ差し入れを持ってきてくれる土郎さんはい人です」

「あ、アイス作ったん？ 美味しそーや」

「な・何よそれえ！！クラス解散とか留年とかはデマなの！？」

「はい、そうだと思います。本当は僕のクビがかかってるんですけど」

「だったらこんなヘンな図書館になんか来なかったわよっ！！」

「ええっアスナさんヒドイ！！」

そしてそこに。

「キヤーーーーーッ！大変やーーーーっ！！」

『 あー！』

彼女たちを突き落したゴーレムが現れた。

『フオフオフオ！ ここからは出られんぞい、ここには出口など無い！』

(……ノリノリだなじいちゃん……。つか「様子を見て出してやる」って言ってたよな？こんな登場でどうするつもりだ？)

『フオーフオーフオー！』

「キヤーーーーー！ーーーーー！！！！！」

(……おいおい追って来たぞ！？ こんな怖がらせるような手段で出口まで追い込むのかじいちゃん！？ ……しょーがない)

「皆！あの滝の裏に隠れる！クー！アイツの足止め手伝え！」

『はーい！』

「りょーかいアル！」

この地底図書室の構造は解析済みだ。あの滝の裏に非常口がある。

「中国武術研究会・部長の実力を見るアルよ！」

「ハイ!!! ヤッ!!!」

ゴーレムの左脚部に拳を打ち、直後すぐさま跳び上がってゴーレムの右腕部に蹴りあげる。その隙に士郎はゴーレムの首もと、顔の正面に到達した。

(メローディア・ペライクス
『戦いの旋律』)

「戦いの旋律」。肉体に魔力を流して纏うことで身体能力を上昇させ、攻撃面・防御面ともに強化する近接戦闘呪文のひとつ。

『ちよっ 待つのじゃ、しろ……』

「ボールは友達!!!」

『ひよ……!!!?!?』

ボガンッッ!!!

サッカーボールを蹴る要領でゴーレムの頭を蹴り砕く。あれだけ口が達者だったゴーレムはそのまま無言で倒れていった。

「 というわけで……………」

『 2 - A 学年トップおめでとうパーティー!!!
いえ……………!!!』

なんと 2 - A が学期末試験で学年トップの点数を叩き出したらしい。無謀なことに徹夜で一夜漬けをして遅刻し、その点数が学園長のミスで加算されなかった為に当初は学年ビリだったという。それによりネギはウエルズに帰る支度まで済ませたのだが、明日菜達に引き止められ、再計算されたテスト結果発表により 4 月から正式な教員になる運びとなった。

そして記念パーティーを開くことになり、今回の件に関わった俺が喫茶店の店主だということだ

「 うちの店、定員が 20 人なんだけど……………」

「 詰めればなんとかなるって? 」

「 師父の料理の美味しさなら狭くても問題ないアル 」

「 何コレ!? すっごくおいしー! 」

「 こんな店が近くにあったなんて知らなかったよ 」

「 また来たいねー 」

「ほら、むしろ常連が増えそうだよ」

(くっ…なんてこった、あたしのオアシスが……………!)

「…………あんまり増えても困るんだけどな」

「だってよ朝倉。記事にするのはやめといたほうがいいんじゃない?」

「…チツ」

「え?なにその子?」

「よくぞ訊いてくれました! 報道部の突撃カメラマンといえ私の私・朝倉和美!

どーよこのかのお兄さん? 客寄せしたくない? 取材だけでも

イイよ?」

「……………いや、遠慮しとく」

「…チツ」

「ええい士郎!いつまで他の女と口を利いてる!」

「ああ、マスターが寂しがって……………」

「黙れボケロボ!」

「ネギ君、先生おめでとー!」

「えへへ、ありがとうございます!」

喫茶店アルトリア、定員オーバーで営業中。まだまだ閉まる気配はない。

余談。

ネギたちに採点ミスを伝えに来た学園長は何故か頭が包帯でぐるぐる巻きに、右腕と左脚はギプスになっていたという。その右手でどうやって採点したんですか？

「ひょー……。」

第4話 期末テストと図書館探検（後書き）

（補足・解説）

：今回は特に補足・解説することはありません。質問・指摘等は感想にてお願いします。

それでは次回！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1533w/>

ネギま！ 剣製の凱歌・新編

2011年12月8日00時51分発行